大阪府教育委員会文化財調査事務所年報

3

1999. 12

大阪府教育委員会

はしがき

現在、大阪府は未曾有の財政危機にみまわれ、すべての分野で行財政改革が進められている。20世紀も最末期を迎えた今日、人類の創造してきた文明の様々な分野で軋みが生じてきている。地震や台風、寒波等の天災が地球的規模で発生し、我が国にあっても原子力や新幹線、高速旅客機などのハードウエアを操作し取り扱う人間との不調和による事故が発生している。戦後半世紀が過ぎ、教育・経済・社会制度の再構築が迫られていると言えよう。これからの少子高齢化社会も念頭において、心豊かな気持ちで過ごせる社会、誇りが持てる社会を大阪に創りあげることを目指し、これまで以上に過去の歴史を訪ね日本人としてのアイデンティティを確立するために、今日まで残されてきた貴重な文化財の保存活用に力を注いでゆかねばならないのではないだろうか。

一方、文化財保護行政においても、市町村に対する補助金が一部廃止され、市町村及び文化財所有者との新しい関係を創ってゆくことが求められている。今後、地方分権の推進をはかる関係法規の整備等に伴い、文化財保護法も改正され、地域の文化財保護行政は地域の自治体が、より主体的に取り組んで行くことになるであろう。

埋蔵文化財の調査については景気低迷、雇用不安の中、国・府あげての景気浮揚策として公共事業が前倒しされ、埋蔵文化財包蔵地内での工事が実施されるケースも増加傾向にあり、開発関連の部局からの調査依頼も多く、本年度も開発に伴う発掘調査は多数行われた。大阪府の発掘調査件数は平成８年度76件、面積40,783㎡、平成９年度は65件、54,131㎡を数え、本年度の調査で86件、約58,000㎡と文化財調査事務所の開設以来の規模・件数の調査が行われた。

主な調査成果としては、茨木市安威遺跡における古墳時代集落の発見、枚方市招提中町遺跡の弥生時代方形周溝墓、美原町余部遺跡において飛鳥時代の畠跡や鎌倉時代の鍛冶炉跡などの発見、富田林市新堂廃寺の南門・中門の調査、同市岸之本南遺跡の初期須恵器等の発見がある。

これらの成果を地域の歴史を生かしたまちづくりに活用するとともに、我が国の歴史さらにはアジアの国々との国際的な歴史の流れに位置づけていくことも必要である。今後とも、貴重な歴史資料をよりひろく展示し活用に努めて行く所存である。

平成11年12月28日

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長　鹿　野　一　美

例　　言

1．本書は大阪府教育委員会文化財調査事務所年報の第３冊である。

2．本書の内容は、大阪府教育委員会文化財調査事務所で実施した平成10年度発掘調査及び資料貸出し等に関するものである。

3．本書の第２・３表には平成10年度に大阪府教育委員会が実施した埋蔵文化財の調査のすべてを掲載している。なお、同表中実施面積の単位は「㎡」である。

4．主要な調査については、概要報告を掲載した。各概要報告の表題に示す数字列並びに番号はそれぞれ以下の内容を示している。なお、概要報告表題の調査番号は、第２・３表の調査番号と一致する。

遺跡名（平成10年度調査番号）

（１）所在地

（２）調査面積

（３）現地調査実施時期

（４）調査の原因となった事業

（５）概要報告執筆者

5．概要報告の執筆は調査担当者がこれにあたり、「平成10年度における埋蔵文化財調査の概況」は、調査第２係主査岩崎二郎が執筆した。

それ以外の執筆は文化財調査事務所職員が分担して行った。各文責はそれぞれの文頭に記した。

6．巻末の貸出し・掲載許可・閲覧等にかかる資料の一覧表は、文化財調整係及び資料係で作成した。

7．本書の編集は資料係が担当した。

目　　次

平成10年度における埋蔵文化財調査の概況 …… 1

発掘調査概要報告 …… 7
安威遺跡（９８００１） …… 7
木の本遺跡（９８００２） …… 8
雁屋遺跡（９８００３） …… 9
尾平遺跡（９８００４） …… 10
諸目遺跡他（９８００８） …… 11
田井中遺跡（９８００９） …… 12
誉田御廟山古墳外堤（９８０１２） …… 13
陶器南遺跡（９８０１３） …… 14
余部遺跡その１（９８０１４） …… 15
余部遺跡その２（９８０１５） …… 16
三軒屋遺跡（９８０１６） …… 17
美園遺跡（９８０１７） …… 18
新堂廃寺（９８０２１） …… 19
伽羅橋遺跡他（９８０２４） …… 20
亀井遺跡（９８０２５） …… 21
陶邑窯跡群（谷山池12号窯）（９８０２６） …… 22
招提中町遺跡（９８０２７） …… 23
西大井遺跡（９８０２９） …… 24
岸之本南遺跡（９８０３４） …… 25
伯太藩陣屋跡隣接地（９８０３６） …… 29
男里遺跡（９８０３７） …… 30
駒ヶ谷第２散布地（９８０１８，９８０３９） …… 31
木の本遺跡（９８０４１） …… 32
神田北遺跡・禅城寺遺跡（９８０４４） …… 33
陶邑窯跡群（光明池地区）（９８０４８） …… 34
高向遺跡（９８０４９） …… 35
招提寺内村遺跡・御堂池（９８０５０） …… 36
総持寺遺跡（９８０５３） …… 37
栄町遺跡（９８０６１） …… 38
寛弘寺古墳群（９８０６４） …… 40
目垣遺跡（９８０６７） …… 41
高柳遺跡（９８０６９） …… 42
上汐四丁目所在遺跡（９８０７０） …… 43
倉垣遺跡（９８０７４） …… 44
崇禅寺遺跡他（９８０８１他） …… 45
長谷のガマ（９８０８４） …… 46

普及啓発・広報事業 …… 47

資料の貸出・掲載・閲覧 …… 48

図　目　次

第１図　事業別・地域別調査面積 …… 1
第２図　発掘調査概要報告掲載遺跡位置図 …… 6
第３図　安威遺跡、南端部全景 …… 7
第４図　安威遺跡、18住居跡遺物出土状況 …… 7
第５図　木の本遺跡、古墳前期遺構配置図 …… 8
第６図　雁屋遺跡、弥生後期遺構図 …… 9
第７図　尾平遺跡、調査地位置図 …… 10
第８図　尾平遺跡、調査地地形図 …… 10
第９図　尾平遺跡、調査地全景 …… 10
第10図　尾平遺跡、１号住居跡 …… 10
第11図　諸目遺跡・樫井城跡・
　　藤波遺跡調査地位置図 …… 11
第12図　八王寺遺跡調査地位置図 …… 11
第13図　土丸遺跡調査地位置図 …… 11
第14図　誉田御廟山古墳外堤、調査区全景 …… 13
第15図　誉田御廟山古墳外堤、土層断面 …… 13
第16図　誉田御廟山古墳外堤、円筒埴輪 …… 13
第17図　誉田御廟山古墳外堤、軒平瓦 …… 13
第18図　陶器南遺跡、調査区位置図 …… 14
第19図　陶器南遺跡、掘立柱建物（1998年度） …… 14
第20図　陶器南遺跡、掘立柱建物（1995年度） …… 14
第21図　陶器南遺跡、掘立柱建物（1996年度） …… 14
第22図　余部遺跡その１、調査区位置図・遺構図 …… 15
第23図　余部遺跡その２、飛鳥時代畝溝群 …… 16
第24図　余部遺跡その２、中世鋳造遺構 …… 16
第25図　三軒屋遺跡、調査地位置図 …… 17
第26図　三軒屋遺跡、全景 …… 17
第27図　三軒屋遺跡、方形周溝墓 …… 17
第28図　三軒屋遺跡、竪穴住居 …… 17
第29図　美園遺跡、調査区位置図 …… 18
第30図　美園遺跡、方形周溝墓状遺構図 …… 18
第31図　美園遺跡、弥生前期末～中期初頭土器 …… 18
第32図　新堂廃寺、調査区位置図 …… 19
第33図　新堂廃寺、主要伽藍配置図 …… 19
第34図　伽羅橋遺跡他、試掘区位置図 …… 20
第35図　亀井遺跡、調査区位置図 …… 21
第36図　亀井遺跡、南壁土層断面図 …… 21
第37図　陶邑窯跡群（谷山池12号窯）、位置図 …… 22
第38図　陶邑窯跡群（谷山池12号窯）、窯跡平面図 …… 22
第39図　陶邑窯跡群（谷山池12号窯）、
　　窯跡断ち割状況 …… 22
第40図　招提中町遺跡、方形周溝墓群 …… 23
第41図　招提中町遺跡、遺構全体図 …… 23
第42図　西大井遺跡、平安中期条里型水田 …… 24
第43図　西大井遺跡、弥生終末
　　～古墳時代土壙墓群 …… 24
第44図　岸之本南遺跡、調査地位置図 …… 25
第45図　岸之本南遺跡、掘立柱建物１ …… 25
第46図　岸之本南遺跡、井戸出土遺物 …… 25
第47図　岸之本南遺跡、須恵器両分布図 …… 27
第48図　岸之本南遺跡、出土初期須恵器の産地推定 …… 27
第49図　岸之本南遺跡、土師器両分布図 …… 28
第50図　伯太藩陣屋跡隣接地、全景 …… 29
第51図　伯太藩陣屋跡隣接地、試掘区位置図 …… 29
第52図　男里遺跡、調査区周辺の遺構概略図 …… 30
第53図　男里遺跡、溝内土器出土状況 …… 30
第54図　駒ヶ谷第２散布地、試掘区位置図 …… 31
第55図　木の本遺跡、調査区位置図 …… 32
第56図　木の本遺跡、土層断面模式図 …… 32
第57図　神田北遺跡・禅城寺遺跡、調査地位置図 …… 33
第58図　禅城寺遺跡、溝・柱穴検出状況 …… 33
第59図　陶邑窯跡群（光明池地区）、
　　出土須恵器及び調査区位置図 …… 34
第60図　高向遺跡、試掘区位置図 …… 35
第61図　高向遺跡、柱穴列 …… 35
第62図　高向遺跡、平面及び北壁断面図 …… 35
第63図　招提寺内村遺跡・御堂池北半部平面図 …… 36
第64図　御堂池調査前 …… 36
第65図　御堂池北堤 …… 36
第66図　総持寺遺跡、遺構全体図 …… 37
第67図　総持寺遺跡、39号墳 …… 37
第68図　栄町遺跡、調査区位置図 …… 38
第69図　栄町遺跡、調査区全景 …… 38
第70図　栄町遺跡、土坑68遺物出土状況 …… 39
第71図　栄町遺跡、土坑68遺物出土状況図 …… 39
第72図　栄町遺跡、土坑群遺物出土状況 …… 39
第73図　栄町遺跡、出土遺物図 …… 39
第74図　栄町遺跡、遺構図全体図及び土層断面図 …… 39
第75図　寛弘寺７号墳、下層遺構平面図（弥生後期） …… 40
第76図　寛弘寺７号墳、遺構検出状況 …… 40
第77図　寛弘寺７号墳、遺構検出状況 …… 40
第78図　寛弘寺７号墳、Ｕ字型排水溝工事 …… 40
第79図　目垣遺跡、第３面マウンド・溝 …… 41
第80図　目垣遺跡、第４面竪穴住居 …… 41
第81図　高柳遺跡、調査地位置図 …… 42
第82図　高柳遺跡、遺構検出状況 …… 42
第83図　上汐四丁目所在遺跡、調査区位置図 …… 43
第84図　上汐四丁目所在遺跡、遺構平面図 …… 43
第85図　上汐四丁目所在遺跡、調査状況 …… 43
第86図　倉垣遺跡、竪穴式住居群と掘立柱建物群 …… 44
第87図　倉垣遺跡、完形で出土した布留式土器 …… 44
第88図　倉垣遺跡、大溝と竪穴式住居 …… 44
第89図　崇禅寺遺跡他、出土遺物図 …… 45
第90図　長谷のガマ、調査地周辺の棚田 …… 46
第91図　長谷のガマ、№45ガマ縦断図と平面図 …… 46
第92図　長谷のガマ、№45ガマロと調査風景 …… 46

表　目　次

第１表　平成10年度調査件数・調査面積 …… 2
第２表　平成10年度調査箇所一覧（１） …… 4
第３表　平成10年度調査箇所一覧（２） …… 5
第４表　岸之本南遺跡出土土器の分析データ …… 28

平成10年度における埋蔵文化財調査の概況

岩　崎　二　郎

1．調査件数・面積と各種土木工事等の動向

平成10年度に実施した埋蔵文化財調査は、発掘・試掘・立会あわせて86件、約58,000㎡にのぼる。昨年度にくらべ件数は21件、調査面積は6.7％増加している。

調査の原因は大部分が大阪府が実施する公共工事に先立つものであり、例年住宅・農林・道路関係の調査が大きな部分を占めるが、平成10年度は特に住宅関係の調査面積の増加が目立つ。

府営住宅に関する調査は21件、26,271㎡で全面積45.5％を占める。建替えに伴う面的調査は５件で、のこりは次年度以降の建替え・増築等の予定地の試掘調査である。次年度以降も当分高層化に伴う調査が続きそうな情勢である。

環境農林水産部の圃場整備事業等に伴う調査は、ほぼ去年並みの15,026㎡であったが、総面積の増加により、比率は26％に低下した。調査件数は21件で昨年にくらべ倍増している。条件に恵まれた大規模な圃場整備事業は終息しつつあり、ため池改修など小規模なものが多い。

道路関係の調査は19件で調査面積は9,590㎡、比率は16.6％であった。新設道路の調査は一段落し、歩道設置などに伴う小規模な調査が多くなっている。

下水道事業に伴う調査は９件、4,356㎡である。前年度は竪坑に伴うものが大部分であったが、今年度は大井処理場建設に伴う西大井遺跡の調査を実施したため調査面積は大幅に増加した。

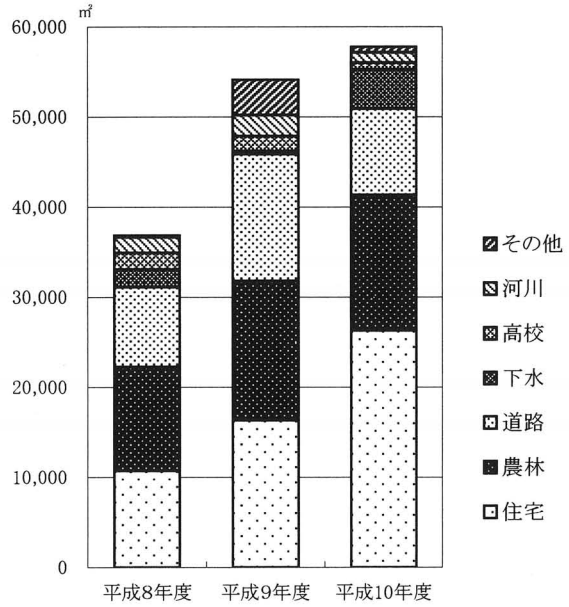
府立高校は生徒減少期にさしかかっており、このところ調査面積は減少傾向をたどっている。今年度は昨年度から引き続き調査した雁屋遺跡の１件750㎡にとどまった。

河川改修に伴うものは６件1,125㎡であった。長年にわたり実施してきた平野川改修工事に伴う調査も今年度で大部分が終了し、あとわずかの面積を残すに過ぎない。工事の進捗に合わせて細長いトレンチ調査を数多く実施しており、整理作業を進めて全体像を明らかにすることが今後の課題である。

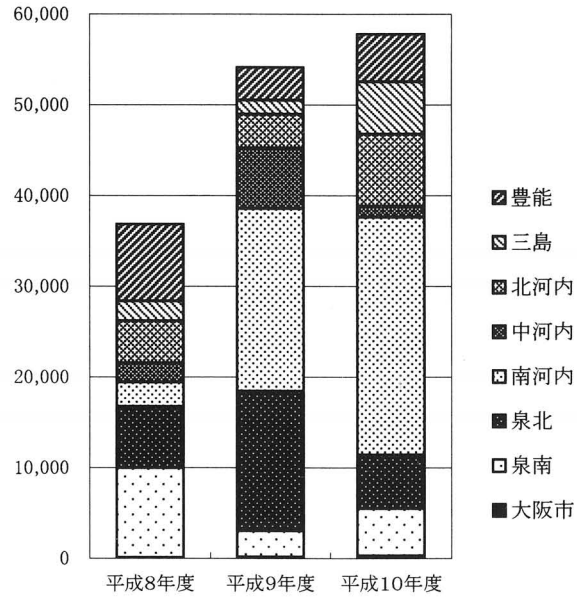
その他各種事業に伴った調査は９件あるが、い

	平成8年度		平成9年度		平成10年度	
	調査面積(㎡)	比率	調査面積(㎡)	比率	調査面積(㎡)	比率
住　宅	10,696.5	29.0%	16,304.0	30.1%	26,271.0	45.5%
農　林	11,539.0	31.3%	15,482.0	28.6%	15,026.0	26.0%
道　路	8,870.5	24.1%	14,074.0	26.0%	9,590.4	16.6%
下　水	1,948.5	5.3%	294.0	0.5%	4,355.9	7.5%
高　校	1,844.0	5.0%	1,680.0	3.1%	750.0	1.3%
河　川	1,738.6	4.7%	2,351.0	4.3%	1,125.0	1.9%
その他	207.0	0.6%	3,946.0	7.3%	665.0	1.2%
合　計	36,844.1		54,131.0		57,783.3	

	平成8年度		平成9年度		平成10年度	
	調査面積(㎡)	比率	調査面積(㎡)	比率	調査面積(㎡)	比率
豊　能	8,513.0	23.1%	3,647.0	6.7%	5,249.0	9.1%
三　島	2,163.5	5.9%	1,523.0	2.8%	5,779.0	10.0%
北河内	4,664.0	12.7%	3,738.0	6.9%	7,948.0	13.8%
中河内	2,099.1	5.7%	6,676.0	12.3%	1,204.8	2.1%
南河内	2,692.0	7.3%	20,144.0	37.2%	26,177.9	45.3%
泉　北	6,760.0	18.3%	15,359.0	28.4%	5,922.5	10.2%
泉　南	9,882.5	26.8%	2,901.0	5.4%	5,206.1	9.0%
大阪市	70.0	0.2%	143.0	0.3%	296.0	0.5%
合　計	36,844.1		54,131.0		57,783.3	



事業別調査面積



地域別調査面積

第１図　事業別・地域別調査面積

ずれも小規模なものであった。

地域別にみると、平成10年度は特に南河内が突出しており、45.3%を占める。逆に中河内はわずか2.1%にすぎない。他は10%前後でほぼ拮抗している。大阪市域は府営住宅などの試掘だけで、面的な調査はなかった。

第1図に明らかなように、事業別、地域別とも年度間の変動が激しいが、大規模事業が遺跡内で実施されるとその事業・地域のシェアが急増するので、偶発的要素も含んでいる。また、大阪府の公共工事に伴う発掘調査は、文化財保護課と（財）大阪府文化財調査研究センターが分担して実施しているので、大阪府の公共工事の動向を直接反映しているとも言い難い。

2．各地域の主要な調査

豊能地区

能勢町では圃場整備に伴う調査を長年にわたり実施している。今年度は昨年度に引き続き倉垣遺跡を調査した。弥生時代前期末から中期前半の竪穴住居跡や方形周溝墓、古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物、飛鳥時代の竪穴住居、平安時代の掘立柱建物などを検出した。

能勢町では他に長谷（ながたに）地区の「ガマ」の調査を実施した。「ガマ」とはこの地に特有の水利施設で、その築造は中世に遡るといわれている。今回の調査でその構造・機能の一端が明らかになった。

三島地区

茨木市安威（あい）遺跡では5～6世紀の集落を調査した。竪穴住居32棟、掘立柱建物10棟、柵、溝、土壙など多くの遺構を検出し、豊富な遺物が出土した。竪穴住居には竈が付属するものが多い。瓦質土器、初期須恵器、鉱滓、フイゴ羽口等の出土も注目される。

北河内地区

四条畷市雁屋（かりや）遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓2基、溝、土壙などを検出した。弥生式土器他多量の遺物が出土したが、注目されるものとして溝から出土した鳥形木製品がある。

枚方市招提（しょうだい）中町遺跡では弥生時代中期の南北2列に並ぶ方形周溝墓、古墳時代前期の竪穴住居群、平安時代の掘立柱建物数棟等を検出した。平成11年度も引き続き調査が実施されることになっており、遺跡の全容に迫る成果が期待される。

寝屋川市高柳（たかやなぎ）遺跡は平成8年度以来調査を継続してきたが、今年度は一連の調査の最終年度に当たる。弥生時代後期に居住が始まり、古墳時代にも散漫ながら遺構が認められ、平安時代・中世の掘立柱建物も存在する。今年度の調査区は集落の縁辺部に当たり、自然河川を検出した。

中河内地区

八尾市田井中（たいなか）遺跡では縄文時代晩期末の溝やピット、古墳時代前期～中期の溝、土壙、ピット、奈良時代～平安時代の水田を検出した。

八尾市木の本（きもと）遺跡では古墳時代前期・中期の集落の一部を検出した。河川改修に伴う細長いトレンチなので集落の構造に迫ることは困難だが、特に古墳時代前期は大量の遺物が出土した。

八尾市美園（みその）遺跡は地下河川の竪坑に伴う小面積の調査だが、弥生時代中期初頭の竪穴住居や前期の溝、土壙等を検出した。

		豊能	三島	北河内	中河内	南河内	泉北	泉南	大阪市	合計
道路	件数	1	3	2	2	3	5	3		19
	面積(㎡)	995.0	3,877.0	1,292.0	9.8	2,784.0	465.5	167.1		9,590.4
学校	件数			1						1
	面積(㎡)			750.0						750.0
圃場整備等	件数	3		1		3	3	11		21
	面積(㎡)	3,954.0		484.0		604.0	5,109.0	4,875.0		15,026.0
住宅建設	件数	1	2	6		6	1	1	4	21
	面積(㎡)	300.0	1,870.0	5,422.0		18,473.0	16.0	12.0	178.0	26,271.0
河川改修	件数				3	2		1		6
	面積(㎡)				856.0	245.0		24.0		1,125.0
下水道建設等	件数				2	5	1	1		9
	面積(㎡)				239.0	4,071.9	20.0	25.0		4,355.9
その他	件数		1		1		2	3	2	9
	面積(㎡)		32.0		100.0		312.0	103.0	118.0	665.0
合計	件数	5	6	10	8	19	12	20	6	86
	面積(㎡)	5,249.0	5,779.0	7,948.0	1,204.8	26,177.9	5,922.5	5,206.1	296.0	57,783.3

第1表　平成10年度調査件数・調査面積

南河内地区

藤井寺市西大井遺跡では、縄文時代晩期から弥生時代前期に埋没した埋積谷を完掘し、谷の斜面で縄文時代後期の土壙墓を検出した。また、弥生時代終末から古墳時代前期の土壙墓群を検出した。隣接する調査区でも検出されていたものであるが、今回土壙墓群の東端が確認された。その上層では平安時代前期から近世に至るまで何枚も形成された水田面を調査した。

美原町余部遺跡（その１）では旧河川をはさんで存在する中世の集落と耕地を検出した。この500ｍ北の余部遺跡（その２）では古墳時代の畑の畝溝群、12世紀後葉から14世紀初頭の鋳造集落を検出した。周辺の過去10年程の近畿道和歌山線や府営住宅に伴う調査成果と相まって、河内鋳物師の本拠地の具体的な様相が明らかになりつつある。

富田林市新堂廃寺では中門、回廊、南門、築地塀、参道、宝鐘遺構など寺域を構成する主要遺構を調査した。四天王寺式の伽藍配置をとり、創建から再建という寺域の造営過程が明らかになるなど重要な成果が得られた。

富田林市尾平遺跡では尾根上に立地する弥生時代後期の集落を調査した。竪穴住居４棟、多数の土壙、溝などがあった。また、弥生時代から古墳時代の方形台状墓と土器棺墓、古墳時代の横穴式石室を持つ古墳もあった。

富田林市岸之本南遺跡では古墳時代中期の掘立柱建物、井戸、土壙、溝等を検出した。井戸から初期須恵器、韓式土器、土師器の一括遺物が出土した。

出土した土器について蛍光Ｘ線分析を実施したところ、陶邑産の須恵器と伽耶産の陶質土器があり、後者が多数を占めるという興味深い結果が得られた。

泉北地区

陶邑窯跡群では試掘・立会を合わせて４件の調査を行った。窯跡を検出したのは谷山池12号窯と光明池48号窯である。谷山池12号窯では焼成部のみを検出し、II形式３～４段階の須恵器が出土した。光明池48号窯では窯本体は残っていなかったが、奈良時代後半の須恵器が出土した。また、周辺に光明池14・23・41号窯の窯体の一部が露出しているのが観察され、須恵器を採集した。

堺市陶器南遺跡では陶荒田神社の東北方一帯に広がる中世居館の一部を調査した。圃場整備事業の水路や切土部分の限られた調査であるが、居館の変遷の一端が明らかになった。

泉南地区

泉佐野市三軒屋遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓と古墳時代の竪穴住居を検出した。水路予定地の幅２ｍのトレンチ調査であるため、墓地・集落の全容は明らかにできないがこの地の開発過程を示す一資料が得られた。

泉南市男里遺跡では双子池改修工事に伴う調査を行い、古墳時代終末から奈良時代の杭列や平安時代以降の堤状の道など周辺の開発過程を示す遺構を検出した。

大阪市

大阪市域では府営住宅建替え等に伴う試掘調査を実施したが、顕著な遺構・遺物はなかった。唯一、崇禅寺遺跡で自然堆積と思われる砂礫層から５世紀代の埴輪片が出土した。円筒埴輪、朝顔形埴輪、衣蓋形埴輪等がある。

遺物整理事業

発掘調査と平行して、過去の調査で出土した遺物の整理事業も実施している。平成10年度は下記の事業を実施した。

高校遺物整理事業として、堺環濠都市遺跡等の出土遺物の整理作業を行った。

昭和63年度以来５次にわたって行った府営道明寺南住宅建替えに伴う土師の里遺跡発掘調査による出土遺物の整理事業を行い報告書を刊行した。

平成４年度以来実施した都市計画道路池上下宮線建設工事に伴う池上曽根遺跡発掘調査の遺物整理事業を行い報告書を刊行した。

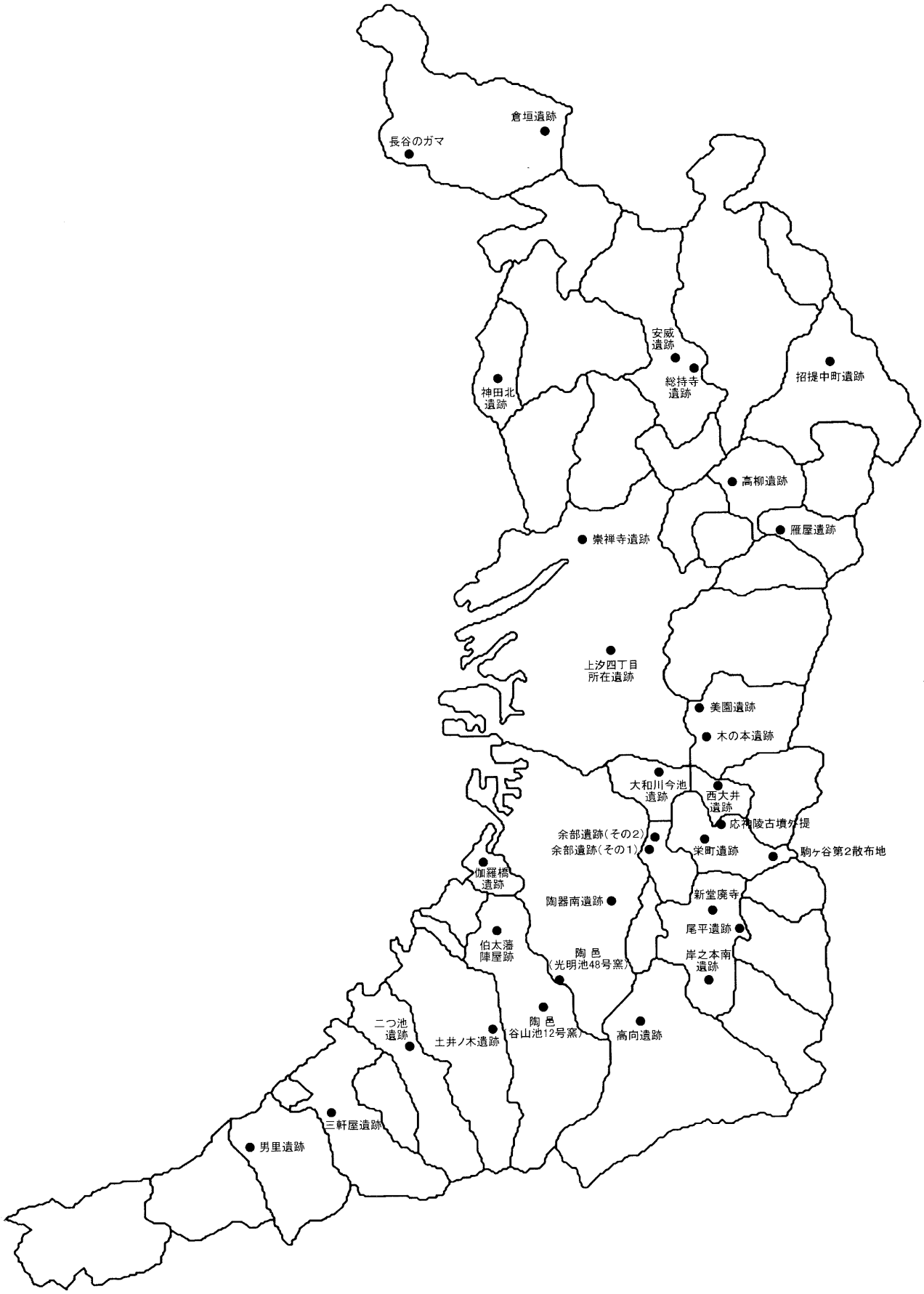
調査番号	遺跡名	所在地	種別	調査開始	調査終了	実施面積(㎡)	担当者	事業名
98001	安威遺跡	茨木市南安威1丁目	発掘	H10.04.01	H11.03.31	3,750.0	奥 和之	主要地方道茨木亀岡線改良
98002	木の本遺跡	八尾市南木の本	発掘	H10.04.01	H11.03.25	485.0	岩瀬 透 横田 明	平野川改修
98003	雁屋遺跡	四条畷市雁屋北	発掘	H10.04.01	H10.09.30	750.0	阿部 幸一	府立四条畷高等学校校舎建替
98004	尾平遺跡	富田林市東板持町	発掘	H10.04.01	H10.07.31	2,620.0	今村 道雄	一般国道309号線改良
98005	はざみ山遺跡	藤井寺市野中3丁目	発掘	H10.04.20	H10.04.28	18.9	竹原 伸次	御陵西幹線下水道管渠築造
98006	堺環濠都市遺跡	堺市少林寺町～寺地町～南旅籠町西	試掘	H10.04.27	H10.04.27	10.0	芝野 圭之助	一般府道深井畑山宿院線共同溝建設
98007	遺跡外	高槻市城東町	試掘	H10.05.14	H10.05.14	32.0	山上 弘	高槻保健所建替
98008	諸目、藤波、樫井城、三軒屋、八王子、土丸	泉佐野市樫井	発掘	H10.05.15	H10.12.25	1,500.0	橋本 高明	泉佐野灌漑排水路・水質保全
98009	田井中遺跡	八尾市空港1丁目	発掘	H10.05.14	H10.12.15	290.0	亀島 重則	平野川改修
98010	土師の里遺跡	藤井寺市道明寺6丁目	立会	H10.05.11	H10.05.11	18.0	小浜 成	府営藤井寺道明寺住宅建替
98011	溝咋遺跡	茨木市学園町	立会	H10.05.20	H10.05.20	100.0	山上 弘	茨木寝屋川線先鉾橋橋脚下部工
98012	誉田御廟山古墳外堤	羽曳野市誉田5丁目	発掘	H10.05.26	H10.09.20	200.0	橋本 高明	大水川改修
98013	陶器南遺跡	堺市陶器北、上之	発掘	H10.06.10	H10.10.30	2,240.0	竹原 伸次	陶器北地区府営圃場整備
98014	余部遺跡その1	美原町南余部	発掘	H10.07.21	H11.03.25	7,600.0	枡本 哲	府営美原南余部住宅建替
98015	余部遺跡その2	美原町北余部	発掘	H10.07.21	H11.03.25	7,000.0	上林 史郎	府営美原北余部住宅建替
98016	三軒屋遺跡	泉佐野市上之郷	発掘	H10.07.06	H10.10.20	3,000.0	橋本 高明	農用地総合整備事業下村地区
98017	美園遺跡	八尾市美園町	発掘	H10.07.13	H10.10.02	81.0	泉本 知秀	寝屋川南部地下河川美園立坑築造
98018	駒ヶ谷第2散布地	羽曳野市駒ヶ谷	試掘	H10.07.13	H10.07.13	25.0	西川 寿勝	石川右岸幹線下水立坑築造
98019	摩湯山古墳	岸和田市摩湯町	試掘	H10.07.16	H10.07.16	7.1	森井 貞雄	一般府道三林岡山線歩道設置
98020	船橋遺跡	枚方市南舟橋2丁目	試掘	H10.07.13	H10.07.14	105.0	佐久間 貴士	府営枚方船橋住宅建替
98021	新堂廃寺	富田林市緑ヶ丘1615	発掘	H10.07.03	H11.03.25	3,780.0	小浜 成	府営富田林住宅建替
98022	大和川今池遺跡	松原市天美我堂5丁目	立会	H10.08.04	H10.08.05	12.0	西川 寿勝	府道大堀堺線内下水道管渠築造
98023	宮野遺跡	門真市上島町	試掘	H10.08.11	H10.08.12	13.0	佐久間 貴士	府営四宮鉄筋住宅建替
98024	伽羅橋遺跡他	高石市高師浜1丁目	試掘	H10.09.01	H10.09.09	100.0	西川 寿勝	府道高石北線建設
98025	亀井遺跡	八尾市南亀井町	発掘	H10.08.03	H10.09.30	172.0	岩崎 二郎	長吉ポンプ場増設
98026	陶邑窯跡群(谷山池12号窯)	和泉市鍛冶屋町他	発掘	H10.08.20	H10.12.25	2,634.0	今村 道雄	柑橘母樹園跡地整備
98027	招提中町遺跡	枚方市東牧野町	発掘	H10.09.01	H11.03.31	5,250.0	山上 弘	府営枚方牧野東住宅建替
98028	摩湯山古墳	岸和田市摩湯町	発掘	H10.09.02	H10.12.11	150.0	芝野 圭之助	一般府道三林岡山線歩道設置
98029	西大井遺跡	藤井寺市西大井	発掘	H10.08.12	H11.03.25	3,370.0	森井 貞雄	大井処理場建設
98030	中神田遺跡	寝屋川市御幸西町	試掘	H10.09.16	H10.09.18	33.0	佐久間 貴士	府営御幸西住宅建替
98031	遺跡外	大阪市住之江区他	試掘	H10.09.25	H10.09.25	150.0	芝野 圭之助	府営住之江住宅建替
98032	梶遺跡	守口市金田町	試掘	H10.09.30	H10.10.02	12.0	佐久間 貴士	府営庭窪金田住宅建替
98033	枚方上之町遺跡	枚方市枚方上之町	試掘	H10.10.12	H10.10.14	9.0	佐久間 貴士	府営西枚方住宅建替
98034	岸之本南遺跡	富田林市大字龍泉	発掘	H10.09.30	H11.02.10	334.0	橋本 高明	府営農地開発事業(東条地区)
98035	幡代南遺跡他	泉南市岡中他	試掘	H10.10.19	H10.10.19	24.0	芝野 圭之助	金熊寺川改修
98036	伯太藩陣屋跡隣接地	和泉市太町4丁目他	試掘	H10.10.21	H10.10.31	157.5	西川 寿勝	府道岸和田南海線建設
98037	男里遺跡	泉南市男里	発掘	H10.11.01	H11.01.15	300.0	芝野 圭之助	府営地域総合オアシス整備事業・泉南地区双子池改修
98038	フキアゲ山東遺跡	泉南市兔田	試掘	H10.11.01	H10.11.10	30.0	芝野 圭之助	府営地域総合オアシス整備事業・泉南地区
98039	駒ヶ谷第2散布地	羽曳野市駒ヶ谷	立会	H10.11.25	H10.11.25	45.0	枡本 哲	一級河川飛鳥川改修
98040	土井ノ木遺跡隣接地	岸和田市稲葉町	試掘	H10.11.10	H10.11.10	10.0	西川 寿勝	府道岸和田牛滝線歩道設置
98041	木の本遺跡	八尾市空港1丁目	試掘	H10.11.17	H10.11.26	100.0	岩崎 二郎	中部広域防災拠点整備
98043	遺跡外	藤井寺市小山藤美町地内	試掘	H10.11.26	H10.12.01	35.0	竹原 伸次	府営小山住宅建替
98044	神田北遺跡・禅城寺遺跡	池田市神田1丁目他	発掘	H10.11.25	H11.03.19	995.0	泉本 知秀 溝口田 佳男	都市計画道路神田池田線建設

第２表　平成10年度調査箇所一覧（１）

調査番号	遺跡名	所在地	種別	調査開始	調査終了	実施面積(㎡)	担当者	事業名
98045	瓜生堂遺跡	東大阪市若江西新町1丁目	試掘	H10.11.26	H10.11.26	8.0	中井　貞夫	主要地方道大阪中央環状線若江西交差点改良
98046	二ツ池遺跡	貝塚市清児	試掘	H10.11.20	H10.11.20	18.0	芝野　圭之助	府営ため池整備事業(二ツ池地区)
98047	長尾遺跡	堺市長曽根町	試掘	H10.11.25	H10.11.25	20.0	芝野　圭之助	府道大阪高石線歩道設置
98048	陶邑窯跡群	堺市城山台5丁	発掘	H10.11.30	H10.12.25	235.0	西川　寿勝	府営ため池整備場(光明池地区)
98049	高向遺跡	河内長野市高向	試掘	H11.01.05	H11.01.31	120.0	西川　寿勝	府営ため池整備場(田保池地区)
98050	招提寺内村遺跡	枚方市招提元町	発掘	H10.12.03	H10.12.21	484.0	佐久間　貴士	府営ため池整備場(御堂池地区)
98051	神宮寺遺跡	八尾市神宮寺4丁目	試掘	H10.12.07	H10.12.07	1.8	中井　貞夫	旧170号線歩道設置
98052	金岡神社遺跡	堺市金岡町地内	試掘	H10.12.07	H10.12.16	178.0	竹原　伸次	都市計画道路南花田鳳西町線建設
98053	総持寺遺跡	茨木市三島丘2丁目	発掘	H10.12.21	H11.03.25	1,850.0	阿部　幸一	府営三島丘住宅建替
98054	遺跡外	大阪市旭区中宮1丁目	試掘	H10.12.15	H10.12.15	18.0	芝野　圭之助	大阪府旭警察署改築
98055	才賀池(熊野街道隣接地)	泉佐野市鶴原	立会	H10.12.03	H10.12.10	2.0	芝野　圭之助	府営ため池整備場(才賀池地区)
98056	田口山遺跡	枚方市田口	試掘	H10.12.21	H10.12.21	6.0	佐久間　貴士	歩道拡幅
98057	箕土路遺跡	岸和田市中井町1－19	立会	H10.12.15	H10.12.15	3.0	芝野　圭之助	水道管改修
98058	遺跡外	岬町淡輪、深日	立会	H10.12.11	H10.12.11	25.0	芝野　圭之助	下水立坑
98059	中茶屋遺跡、西高野街道	堺市福田	立会	H11.01.06	H11.01.06	20.0	今村　道雄	大和川下水道堺狭山幹線(19･20工区)
98060	金池	岸和田市東大路町	立会	H10.12.17	H10.12.17	5.0	芝野　圭之助	府営ため池整備場(岸和田金池地区)
98061	栄町遺跡	羽曳野市栄町	発掘	H11.01.29	H11.03.05	152.0	枡本　哲	旧170号線歩道設置
98062	陶邑窯跡群	堺市茶山台	立会	H11.01.28	H11.01.29	12.0	芝野　圭之助	子供の城整備
98063	駒ヶ谷第2散布地、竹内街道	羽曳野市駒ヶ谷	試掘	H11.02.16	H11.02.16	12.0	西川　寿勝	国道166号線歩道設置
98064	寛弘寺古墳群	河南町寛弘寺	発掘	H11.02.17	H11.03.05	150.0	今村　道雄	農地開発事業(河南西部地区)
98065	位上池	泉南市信達岡中	立会	H11.01.22	H11.01.22	4.0	芝野　圭之助	府営ため池整備場(位上池地区)
98066	二ツ池遺跡(その2)	貝塚市清児	試掘	H11.03.01	H11.03.01	6.0	西川　寿勝	府営ため池整備事業(二ツ池地区)
98067	目垣遺跡	茨木市目垣3丁目	立会	H11.02.26	H11.03.06	27.0	亀島　重則	府道地下道整備
98068	止々呂美	箕面市下止々呂美	試掘	H11.02.01	H11.02.26	300.0	辻本　武	水と緑の健康都市
98069	高柳遺跡	寝屋川市高柳2丁目	発掘	H10.08.24	H10.12.25	1,286.0	禰宜田　佳男	都市計画道路千里丘寝屋川線建設
98070	上汐四丁目所在遺跡	大阪市天王寺区上汐4丁目	発掘	H10.08.20	H10.08.20	100.0	西川　寿勝他	府立夕陽ヶ丘女子職業技術専門校建替
98071	上之郷遺跡	泉佐野市上之郷	立会	H10.04.20	H10.04.20	10.0	上林　史郎	泉佐野瀦漑排水路水質保全
98072	根福寺城跡	貝塚市キビタニ	分布	H11.02.18	H11.02.18	延長5km	芝野　圭之助	農道建設
98073	飯峯畑	阪南市箱作	立会	H10.04.20	H10.04.20	100.0	上林　史郎	飯ノ峯川通常砂防事業砂防ダム工事
98074	倉垣遺跡(F～J地区)	能勢町倉垣	発掘	H10.06.08	H10.11.30	3,364.0	辻本　武	歌垣地区府営農村基盤整備
98075	倉垣遺跡(K地区)	能勢町倉垣	発掘	H11.03.01	H11.03.31	530.0	辻本　武	歌垣地区府営農村基盤整備
98076	恩智遺跡	八尾市恩智北町12－3	発掘	H11.03.31	H11.05.07	67.0	亀島　重則	恩智川東幹線下水管渠築造
98077	西大井遺跡(その2)	藤井寺市西大井	発掘	H11.02.15	H11.03.31	646.0	森井　貞雄	大井処理場建設
98078	安威遺跡	茨木市南安威2丁目	試掘	H10.07.29	H10.07.29	20.0	奥　和之	府営安威住宅増築
98079	陶邑窯跡群	和泉市室堂	試掘	H10.10.29	H10.10.29	300.0	橋本　高明	土地開発公社用地管理
98080	遺跡外	阪南港	立会	H10.09.21	H10.09.21	……	佐久間　貴士	埋め立て引き揚げ物
98081	遺跡外	岸和田市下野町5丁目	試掘	H10.09.28	H10.09.28	12.0	芝野　圭之助	府営岸和田簡易耐火住宅建替
98082	遺跡外	忠岡町東1丁目	試掘	H10.09.29	H10.09.29	16.0	芝野　圭之助	府営忠岡住宅建替
98083	上田町遺跡	松原市上田町8丁目	試掘	H10.09.29	H10.09.30	40.0	芝野　圭之助	府営松原住宅建替
98084	長谷のガマ	能勢町長谷	発掘	H10.05.01	H10.06.05	60.0	辻本　武	農道新設
98085	遺跡外	大阪市旭区中宮5丁目	試掘	H10.10.05	H10.10.05	8.0	芝野　圭之助	府営城北住宅建替
98086	遺跡外	大阪市北区中津6丁目	試掘	H10.10.08	H10.10.08	8.0	芝野　圭之助	府営中津住宅建替
98087	崇禅寺遺跡	大阪市東淀川区東中島5丁目	試掘	H10.10.26	H10.10.26	12.0	芝野　圭之助	府営崇禅寺住宅建替

※98042は欠番

第３表　平成10年度調査箇所一覧（２）



第２図　発掘調査概要報告掲載遺跡位置図

発掘調査概要報告

安威（あい）遺跡（９８００１）

（１）茨木市安威１丁目～南安威１丁目地内　（２）3,750㎡
（３）平成10年４月１日～平成11年３月31日
（４）主要地方道茨木亀岡線改良　（５）奥　和之

遺構の概要

調査した結果、竪穴住居跡32棟、掘建柱建物10棟、柵列、溝、土坑などを検出した。遺構の時期は、５世紀初頭から６世紀前半かけてものと推定され、南側が古く、北に行くに従い新しくなる傾向を示している。

竪穴住居跡の平面形は、隅丸方形に近い形をなすものがほとんどであるが、中には隅丸長方形、円形のものも認められ、一辺４ｍ前後、最大でも一辺5.5ｍを測り、小規模なものが多い。通常竪穴住居跡には、４本ないしは２本の柱穴が認められるが、全て柱が存在しなかった。竪穴住居跡全体を調査した例が少ないが、作り付けの竈が設置されているものが17棟ある。検出状況から判断すると、ほとんどに竈が存在していたものと推定される。竈が設置されている場所は、隅丸方形をなす竪穴住居の一辺の中央部付近にあるものがほとんどであるが、コーナーにあるものも２例認められる。

竪穴住居跡の約３分の１が火災を受けており、遺物が、当時の生活していたそのままの状態で床面上から出土した。出土した土器は、平均８個前後で、器種は甕が大半を占める。甑がほとんどの竪穴住居に１個体存在する。

掘建柱建物は、10棟検出した。竪穴住居と掘建柱建物の数が異なることから各竪穴住居に１棟の割合ではなく少ない。

出土遺物

注目される遺物としては、瓦質土器・初期須恵器・韓式系土器（軟質）・鉱滓などがある。

瓦質土器は、竪穴住居の埋土中より３個体出土した。器形が判別できるのは１点のみである。これらが出土した竪穴住居跡からは、初期須恵器が１点も出土していない。このことから、それらよりりは時期が古い可能性もある。共伴する遺物と比較検討中であるので断定は避けたいが、４世紀末から５世紀初頭のものと考えている。

初期須恵器は、土師器の出土量と比較して少ない。これらの中には、形式的にはＴＫ73号窯前後のものが多いと推察されるが、ＴＧ232号窯前後のものも存在する。

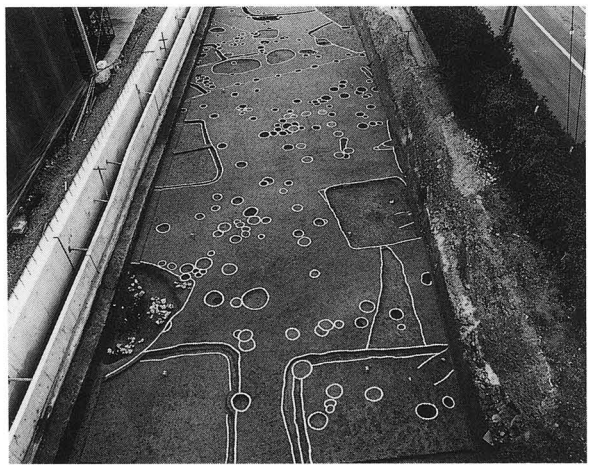
韓式系土器（軟質）は、甑が目立つが、平底鉢も若干見受けられる。甑は、口縁が外反するものと直行するもの、把手に刻み目の持つものと持ないもの。甑の孔は、円、楕円。底部は、丸底と平底。などさまざまな形態を示している。

鉱滓は、４点出土した。椀形鍛冶滓と推定されるもので、フイゴの羽口片も１点出土している。

まとめ

古墳時代中期から後期にかけての集落は、東西に広範囲に広がる可能性が高く、200棟以上の竪穴住居跡が存在していたものと推定される。

竪穴住居跡の特徴、竈、瓦質土器、韓式系土器など朝鮮半島南部からもたらされた遺物、遺構が数多く検出された。これらをもって朝鮮半島南部から渡来した人々の集落とは言えないが、同時期の集落とは異なる状況を示しており、密接な関係があったものと思われる。



第３図　南端部全景（南から）

第４図　18住居跡遺物出土状況

木の本遺跡（９８００２）

（１）八尾市木の本２、３丁目　（２）500㎡
（３）平成10年４月１日～平成11年３月25日
（４）平野川改修　（５）横田　明

木の本遺跡は八尾市の西南部にあり、西側は大阪市平野区に接している。弥生時代～近世にかけての遺構、遺物を出土する遺跡である。発掘調査は一級河川平野川改修事業に関わるものである。了意橋上下流地区の成果を中心に述べる。

調査の結果

基本層序は

０層　旧平野川の河底砂およびヘドロ層である。

１層　旧の耕作土である。層厚20センチで、均質、水平に堆積している。

２層　青色粘土層である。弱粘性の粘土層で層厚は0.2～0.4mである。水平堆積で、中世遺物を含んでいる。耕作に関する整地土であろうか。

３層　青灰色粘土層である。２層よりも濃い色合いで粘りのある粘土である。水平堆積で、層厚は0.3～0.4mであり、小石を若干含んでいる。耕作関係の整地土であろうか。

４層　暗青灰色粘土を主体とする層である。植物遺体を含む弱粘性の粘土で、層厚は0.2～0.4mである。須恵器や土師器を含む包含層である。

５層　暗灰色粘土である。古墳時代の遺物を含む包含層で、廃棄された状態の須恵器や土師器を確認した。

６層　黒灰色粘土層を主体とする。層厚は0.3mで、土師器や須恵器などを包んでいる。この層の上面において、溝と土坑を検出している。

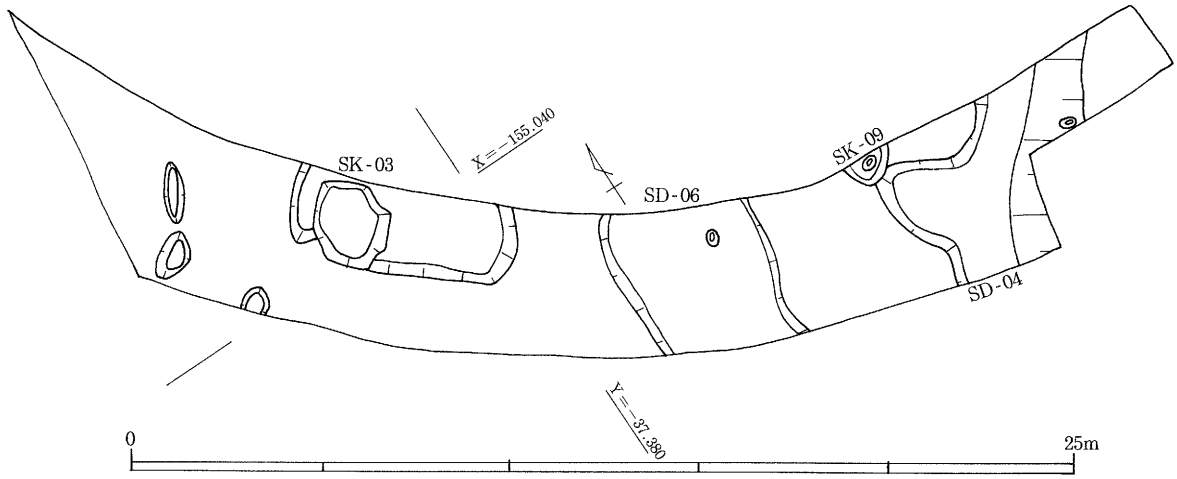
７層　明緑灰色シルト層である。層厚は0.4mである。調査区全体で検出され、この層の上面で、古墳時代前期を主体とする遺構群を検出した。遺物は含んでいない。

８層　青灰色砂層で、古い時期の河川堆積層と推測される。植物遺体は含むが遺物は含まない。

上層は平野川による土砂の堆積が厚くみられ、内部から陶磁器が大量に出土した。平野川流路は中世の包含層を切るように流れており、護岸改修の痕跡も確認された。この砂層から出土する遺物は17世紀以降のものが主体で、近世以降に流路が整備されたことを示している。

この地点において、明確に集落に伴うと考えられる遺構が検出されるのは、古墳時代前期および中期である。６層上面では土坑と溝に伴って、若干の須恵器や土師器が検出された。古墳時代中期は、遺構も遺物も希薄であり、集落の縁辺にあたるのであろうか。

７層上面では古墳時代前期を主体とする遺構、遺物が発見された。溝、土坑などが主体である。特に調査区東端で検出されたＳＤ－04からは多量の古式土師器を出土している。ＳＤ－04は、幅３～５ｍ、深さ60㎝の浅くて幅広い溝で、埋土は２層にわかれる。上層は黒色粘土、下層は暗青灰色粘土で、上層の黒色粘土に土器を含んでいる。土器はまるで並べられたような状態で出土している。溝の埋没途中で、何らかの理由により配置された土器の可能性がある。またＳＫ－03のように水溜状の遺構も発見されている。日常の生活域に近いことを感じさせる。



第５図　古墳前期遺構配置図

雁屋（かりや）遺跡（９８００３）

（１）四条畷市雁屋北町１丁目１番　（２）1,500㎡（平成10年度750㎡）
（３）平成９年５月31日～平成10年９月30日
（４）四条畷高校建て替え　（５）阿部　幸一

遺跡は生駒山地西麓の河内平野に面した扇状地の扇端部に立地する。これまでの調査で、弥生時代前期中頃の遺構・遺物や、中・後期頃の方形周溝墓、竪穴住居跡が検出されており、北河内地域を代表する弥生時代の遺跡として知られている。

調査は、平成９年度から実施している、府立四条畷高校の校舎建て替えに伴うもので、平成９年度は西側半分の調査を実施し、弥生時代中期から後期、古墳時代後期の遺構・遺物を多数検出した。平成10年度は東側半分、約750㎡の調査を実施し、弥生時代中期の方形周溝墓２基、土坑、溝、後期の溝、土坑、古墳時代から奈良時代頃の河道とそれに伴う、杭列、堰などを検出した。

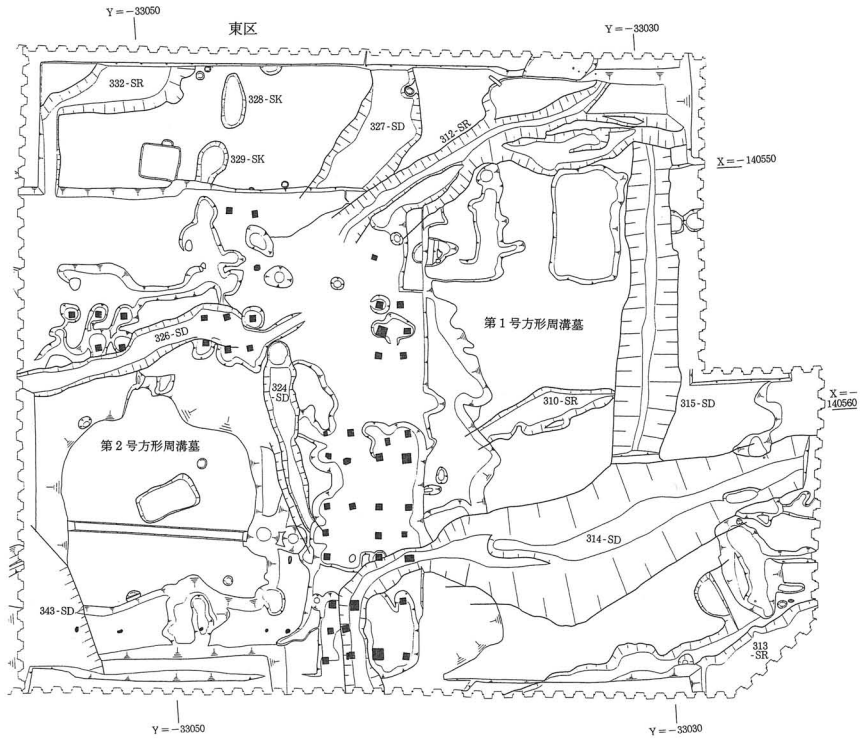
２基検出した方形周溝墓は、弥生時代後期以降の河道や水田開発、及び旧校舎の建築、解体時に一部破壊されているが、現況で第１号方形周溝墓は南北13m、東西７ｍ、第２号方形周溝墓は南北９ｍ、東西８ｍを測る。主体部はそれぞれ２基検出した。主体部の遺存状態は悪く、木棺の痕跡が残るだけであった。第２号方形周溝墓の北裾部及び東周溝からは供献土器が出土している。第１号方形周溝墓の南溝（314－ＳＤ）は幅約６ｍで、擂鉢形を呈するが、東溝は幅２ｍ、深さ1.5mの、Ｖ字形を呈する。南周溝が以前に掘られていて、その後に、周溝墓を区画する目的で東周溝が掘られたと考えられる。供献とみられる遺物は出土しなかった。

327－ＳＤの底面では口縁部を打ち欠いた中期の壺とほぼ完形の鉢が重なって出土しており、溝内埋葬の可能性がある。また、327－ＳＤ底面で検出した土坑（357－ＳＫ）からは、鳥形木製品が出土している。当遺跡では、約200ｍ離れた四条畷保健所建て替えに伴う調査でも鳥形木製品が出土しており２例目となる。

314－ＳＤ、327－ＳＤは中期と後期の遺物が出土している。327－ＳＤでは後期の層に中期の遺物が混入しているが、土層から溝内に土砂がある程度まで堆積した段階で、浚渫され、再利用されたと考えられる。

まとめ

平成10年度の調査では弥生時代中期の２基の方形周溝墓、後期の土坑、溝などを検出した。86年度調査や、四条畷市の調査でも学校の東側を通る府道四条畷停車場線に沿って方形周溝墓が検出されている。また、住居と墓地が混在するように検出されており、少なくとも両者を区画する意識はなかったようである。また、９年度調査区や、西に隣接する体育館の調査では中期末以降の遺構しか検出されなかったことから、後期にはより低地に集落が移動したと考えられる。



第６図　弥生後期遺構図

尾平遺跡（９８００４）

（１）富田林市東板持町　　（２）2,620㎡

（３）平成10年４月１日～平成10年７月31日

（４）一般国道309号線改良工事（富田林バイパス）　　（５）今村　道雄

はじめに

本調査区は、1997年富田林バイパス築造工事予定地に未知の遺跡が存在している可能性があり工事に先立ち本府教育委員会の林技師が試掘を実施することになった。その結果、試掘トレンチの半数以上から遺構と遺物を検出・採集することができた。試掘調査で発見した遺構は、ピットや溝等で、遺物は奈良時代の須恵器・土師器類が主なものである。

調査は、諸般の事情から土木事務所が本体工事を発注し、遺跡調査は、工事の設計変更で対応するとの内容で協議が整った。また、調査予定範囲の大半が土地境界の係争地と土砂崩れ危険箇所に隣接していることから、調査と工事に関する地元協議及び設計変更に関する事務手続きは土木事務所が行なうこととなった。

調査地は、東西80m、南北40m余の面積3,276㎡になり、最高所は標高98.0m前後、低い箇所は86mで比高差が12m、さらに谷底までは13mある。遺構は南西から北東に伸びてきた尾根が鞍部を経て東と北に分岐するがその尾根と斜面上半部を利用して築かれている。

調査成果

主な遺構は弥生時代後期４棟の住居跡、無数の土坑、１基の小土坑、無数の溝、弥生時代から古墳時代の３基の土器棺墓、１基の方形台状墓、古墳時代の１基の横穴式石室を持つ古墳である。

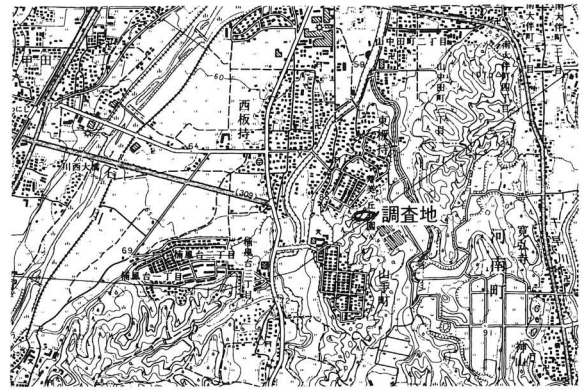
尾根の鞍部に作られた住居跡は、径8.4～8.8mの円形住居跡で、３回の建替えを施し、中央に炉跡を設け、排水溝が炉跡から住居跡の外にまで延びる。

まとめ

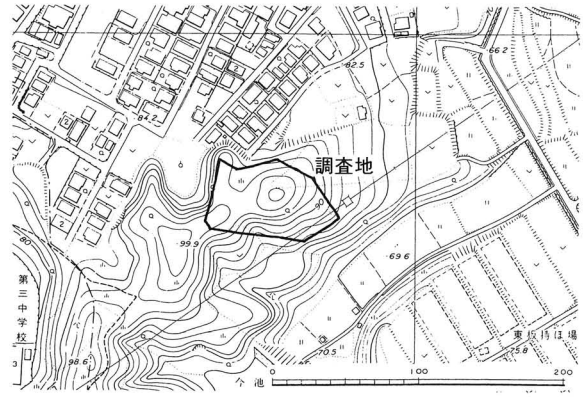
遺物は石鏃１点、サヌカイトフレーク、チップ高杯の杯部１点の他は土器片である。

住居跡の時期は森井編年のＶ－２・３期頃が考えられる。

他の住居跡も円形住居跡とほぼ同時期頃の土器が出土している。

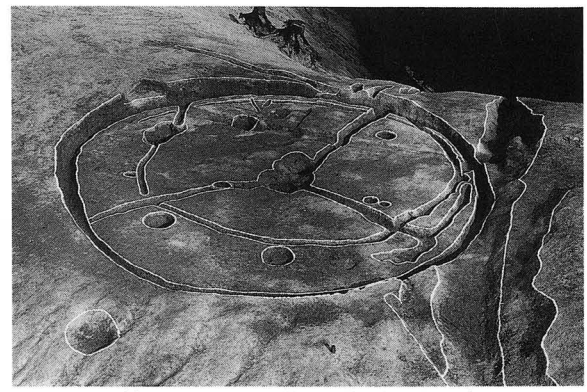


第７図　調査地位置図



第８図　調査地地形図

第９図　調査地全景（西から）



第10図　１号住居跡（西から）

諸目（もろめ）遺跡他（９８００８）

（１）泉佐野市域　（２）1,500㎡

（３）平成10年４月24日～平成11年３月31日

（４）府営かんがい排水事業　府営水質保全対策事業　（５）橋本　高明

（府営かんがい排水事業）

【諸目遺跡】樫井幹線（調査対象150m）

調査地は、諸目遺跡の南端に位置する。層序は、市道の盛土（１m程度）直下は、撹乱層が約１m続く、その下は灰色砂礫層と黄灰色シルト層の互層となる。樫井川の氾濫源にあたると思われる。遺構・遺物は、確認できなかった。

【樫井城跡】樫井幹線（調査対象50m）

調査地は、樫井城跡の北東端に位置する。盛土及び旧耕土の直下に淡黄灰色粘質土（近世水田層、20㎝）、赤褐色粘土（厚さ80㎝以上）と続く。赤褐色粘土は比較的安定しているが、遺構・遺物は確認されなかった。

【藤波遺跡】樫井幹線（調査対象220m）

調査地は、藤波遺跡の北東部に位置する。大半は、市道工事によるコンクリート擁壁によって撹乱されていた。部分的に残存する層位をみると、ＧＬ－0.4～0.8mまで青灰色シルト層、その直下に青灰色砂層が厚さ20～30㎝でみられる。共に流水堆積の可能性が高い。ＧＬ－１m以下で黄色粘土層（地山）になるが、遺構は認められない。

【三軒屋遺跡】上之郷幹線（調査対象160m）

調査地は、九踏池の南の三軒屋遺跡のほぼ中央に位置する。盛土及び旧耕土の直下に黄灰色粘質土（厚さ20～30㎝）がみられ、近世の耕作土と思われる。遺物は、土師器の細片が極少量出土したが、正確な時期は不明である。その直下は、灰色砂礫層と青灰色シルト層の互層となっており、湧水もはげしい。おそらく九踏池から樫井川に向かう埋積谷であろう。

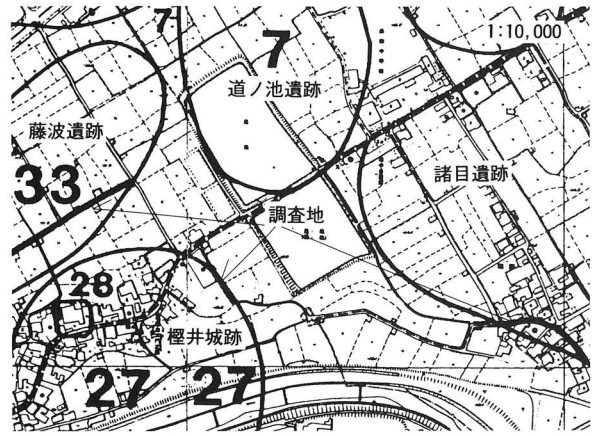
【八王子遺跡】一の井幹線（調査対象100m）

調査地は、八王子遺跡の南部に位置する。道路のアスファルト、路床を除去すると黄褐色砂礫層がみられた。非常に堅く段丘礫層と思われる。遺構・遺物は認められなかった。

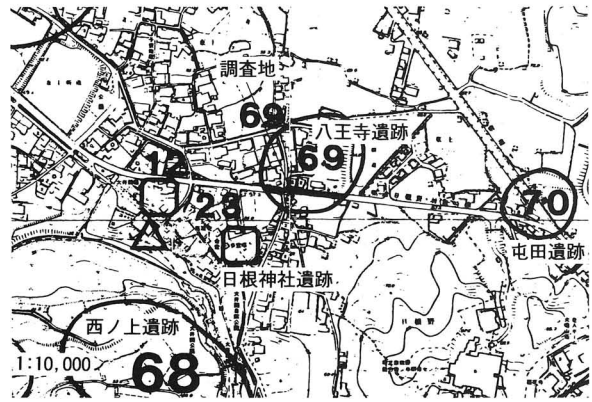
（府営水質保全対策事業）

【土丸遺跡】泉佐野地区（調査対象250m）

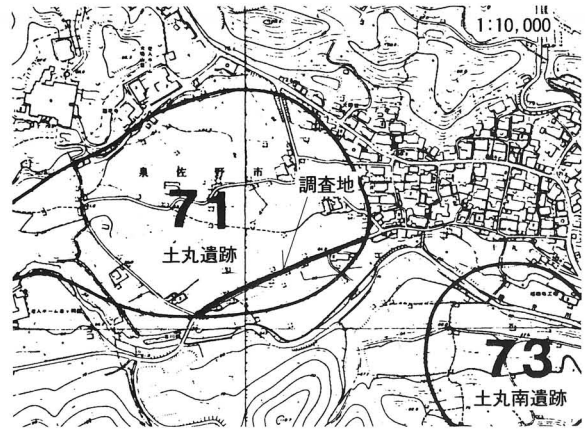
調査地は、樫井川によって形成された開折谷の崖の縁辺部である。層序は、市道の盛土（１m程度）及び旧耕土の下に、茶褐色粘質土層（厚さ10～20㎝）、黄灰色粘土層（地山、洪積層）と続く。遺構・遺物は確認できなかった。



第11図　諸目遺跡・樫井城跡・藤波遺跡調査地位置図



第12図　八王寺遺跡調査地位置図



第13図　土丸遺跡調査地位置図

田井中遺跡（９８００９）

（１）八尾市空港１丁目　（２）290㎡
（３）平成10年５月14日～平成10年12月15日
（４）平野川改修工事　（５）亀島　重則

1990年から大阪府教育委員会が実施している北濠・平野川地区（延長約500m）のうち、下流部にあたる区域を調査した（第６調査区）。調査の結果、縄文時代晩期後半から、古墳時代前期～中期、飛鳥・奈良時代～平安時代後期および中世にかけての遺構・遺物が出土した。

縄文時代晩期後半　溝・土坑・小穴・落ち込みなどがある。今回の調査区を含めた一帯は当該期遺構の集中する地域である。環濠集落のある地域と比べると、遺構・遺物の量は少ない。しかし、遺構としては竪穴住居・土坑・柱穴・溝などがある。小穴は全体に散在するが、遺構の疎密の点からみると、住居を中心として北西寄りに集中する群と北東寄りに密度の高い群に分かれる。今回の調査区を含む後者の群は前者の居住区の外縁の様相を示すが、地形的に東へ高くなることや遺構が広がることから西の一群とは別の居住区を形成する可能性がある。

古墳時代前期～中期　小穴・土坑・小溝・落ち込みなどがある。遺構面は、２面認められる。上位面は布留式期、下位面は庄内式期にあたるが、出土遺物はきわめて少ない。また下位面は遺構が少なく、中央部で確認した小穴３基のみである。上位面で地震による墳砂痕が南北ないしは北西～南東にかけての方向を中心として走る。上位面遺構は墳砂形成後に掘削している。

飛鳥・奈良時代～平安時代初葉　５面検出した。最上位の１面と下位の４面とで、遺構の性格を異にする。最上位面には、溝・小溝・柱穴・小穴などがある。下位の４面では、大小の畦畔が検出された。とくに調査区の中央を東西に走る大畦畔は、各面ごとにほぼ平面的に位置を保ちながら連続する。小畦畔の一部でも、同様に同一平面位置で検出されるものがある。下位の４面は、本地区全域が水田として利用される。各所で、大畦畔・小畦畔・足跡・鋤跡など水田関連遺構が検出されている。しかし全体に挟長な調査区のため水田畦畔から田面の広がりをとらえるには不十分である。今回の調査では、周辺の既掘調査区とあわせて、部分的に水田の形態が復元できた。東西南北に直線的に走る大畦畔は条里型地割の坪境線に沿うもの、外れるものがあるが、方位に沿っている点が注意される。さらに各面ごとに重層する大畦畔もみられる。田の一筆面積も自然地形による起伏の制約を受けつつも、大畦畔による平面的な骨組みのなかで大きなバラツキをつくらずに造成を行っている。

平安時代中期　２面検出した。大溝・溝・土坑・柱穴などがある。現存条里型地割と一致する地割を基礎に整然と耕地面を区画し、畠を造成している。前代から耕地の整備を一段と強力に推し進めてきたとみられる。今回の調査区にみられるように自然地形に沿った方向に段を残すものが一部であるものの、方格地割に則った段を形成している。これには南北をはじめ東西に設定された坪境線を基本に耕地の割り付けが行なわれている。検出された南北坪境溝は、西側に畦を設け、道としての機能をもち、すでに検出した坪境溝の延長線上に連なる位置で検出している。ついで、上位面段階でも坪境線を基調として、畑地耕作が続いたものと思われるが、南北坪境溝も明瞭さを欠く。今回検出した大溝は、前代より小規模化している。坪境内部は、小溝が縦横に設けられている点は同じだが、溜池用とみられる大土坑などが掘削されている。

平安時代後期　平安中期の南北大溝に重複して、大溝が検出された。以前検出された南北坪境溝の延長線上にあり、同一の溝と考えられる。また坪境の他に坪内部の中央、半町の位置にも畦畔がすでに検出されており、この時期は前代よりさらに耕地の整備が進んだものとみられる。

中世以降も水田および畑地として耕地の経営が行なわれてきた。

誉田御廟山古墳外堤（９８０１２）

（１）羽曳野市誉田　（２）200㎡
（３）平成10年５月26日～９月20日
（４）大水川改修工事　（５）橋本　高明

位置

大水川改修工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和55年度の試掘調査に始まり、昭和56年度以降、応神陵古墳外堤、古室遺跡、林遺跡の３遺跡の調査を断続的に実施してきた。

今回の調査地は、国道170号線に接する部分で、現河川内及びその北側にあたる。本事業にかかわる最後の調査である。

層序

土層の堆積状況は旧河川による氾濫の繰り返しであり、狭小な調査区の中で平面的に、流れの方向や規模を確認することはできなかった。

断面から観察できる礫層及び砂礫層の堆積状況と川底（地山）の起伏の状況から最低４回の氾濫が想定できた。ただし、長年にわたる氾濫と浚渫などの繰り返しは、深層に至るまで層位を撹乱している。したがって現代から古墳時代までの遺物が混在して認められた。

遺構

調査地全域が、河川堆積層であったために明確な遺構は確認できなかった。

遺物

今回の調査においても従来の調査成果と同様に河川堆積層から多量の土器、埴輪、瓦類が出土した。先の層序で述べたようにすべて二次堆積であり、現代から古墳時代までの遺物が入り交じって出土している。

（古墳時代） 応神天皇陵古墳に伴う埴輪破片が大半を占める。埴輪は墳丘から転落したものではなく、西側や北側の外濠を画する外堤の埴輪が転落したものと考えられる。出土した埴輪は、円筒埴輪が大多数を占めるものの盾形埴輪・靫形埴輪などの形象埴輪もみられる。

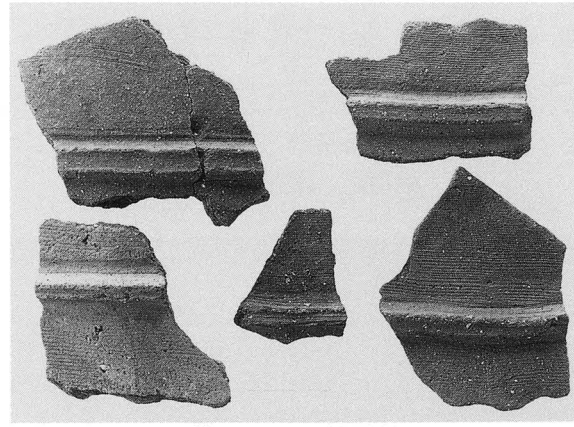
また、口径20㎝以下の小型の円筒埴輪が少量認められる。胎土や焼成から明らかに応神天皇陵古墳の円筒埴輪と峻別できる。円筒埴輪編年の末期に位置づけられるものである。

（奈良時代） 土師器・須恵器・瓦類・土製品などがある。特に、これまでの調査と同様に瓦磚類の出土量が最も多い。軒瓦・丸・平瓦・道具瓦（熨斗瓦）、磚がある。軒丸瓦はこれまでの調査でも多く確認されている平城宮6282系型式と共通する紋様をもつ。

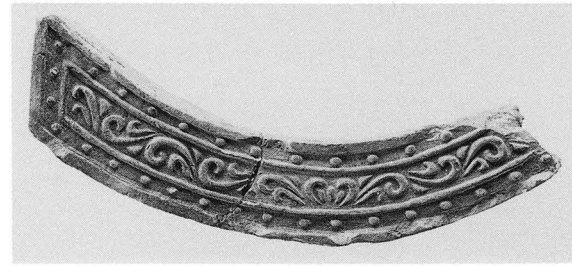
（平安・鎌倉時代） この時期の遺物は、非常に少ない。平安時代後期の黒色土器、鎌倉時代の瓦器碗、瓦質羽釜、青磁および白磁片がある。いずれも流水による摩滅がひどく、細部の調整は明確でない。

第14図　調査区全景

第15図　土層断面



第16図　円筒埴輪



第17図　軒平瓦

陶器南遺跡（９８０１３）

（１）堺市陶器北、上之　（２）2,400㎡
（３）平成10年６月10日～10月30日
（４）陶器北地区府営圃場整備　（５）竹原　伸次

陶器南遺跡は、堺市の南部に位置し、南東から北西に伸びる舌状の丘陵及びその先端部に立地している。遺跡の南側には、古墳時代から古代にかけての日本最大の須恵器生産地であった陶邑窯跡群が谷をひとつはさんで広がっている。

府営圃場整備事業に伴い、平成６年から継続して発掘調査を実施している。

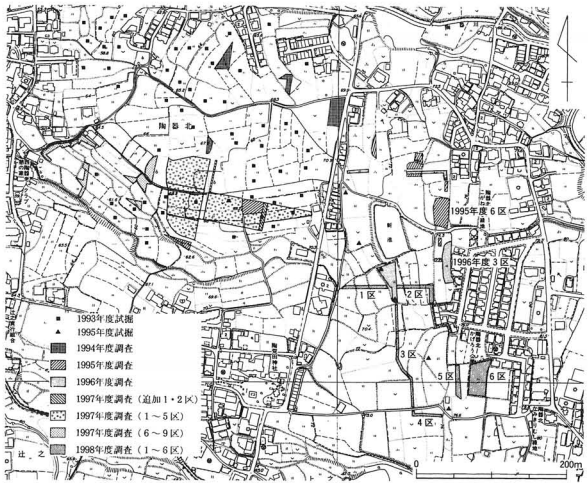
これまでの調査の結果、古墳時代から平安時代の須恵器生産に関連した人々の集落跡、中世の集落跡や土地の開発状況を確認することができている。このなかで特徴的なことは、時代によって検出される遺構が明確に分かれることである。

陶荒田神社から、遺跡の中を南北に貫いている道路を挟んでその西側、つまり丘陵の先端部には、古墳時代の堀立柱建物を中心とする集落が広がる。

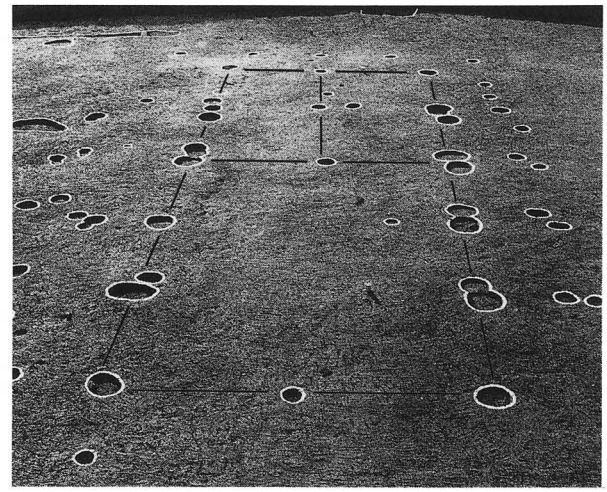
道路沿い丘陵のより低い部分には奈良時代の集落跡、そしてその東側には、平安時代、鎌倉時代の集落跡を検出し、時代が下るにしたがって丘陵の高所に開発が及んでいくことが明らかとなっている。

1998年度の調査は、道路の東側を調査し、鎌倉時代の集落跡を検出するとともに、室町時代の集落跡を確認することができた。

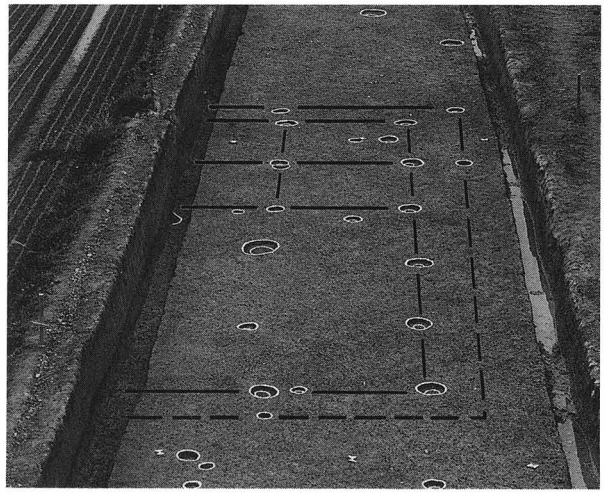
また、1995年度６区から２間×５間、1996年度第３調査区から２間×６間の、いずれも鎌倉時代初頭の堀立柱建物を検出していた。これらの建物は、その規模などから居館であると考えられている。今回の調査でも、そのほぼ南100ｍの位置から時期、規模をほぼ同じくする新たな居館を検出することができ、居館群が南に広がっていくことを確認することができた。



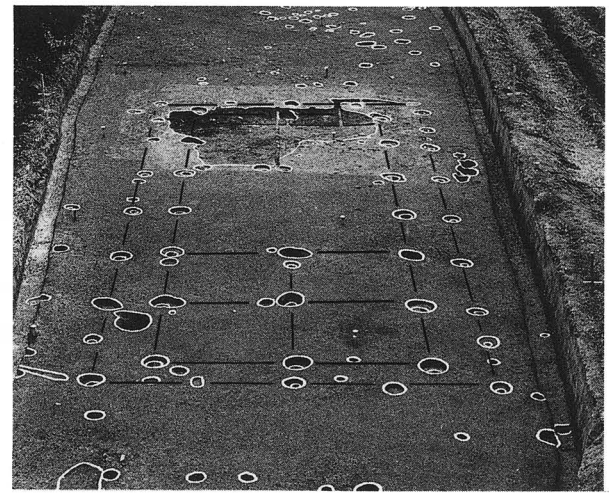
第18図　調査区位置図



第20図　1995年度６区掘立柱建物



第19図　1998年度５区掘立柱建物



第21図　1996年度３区掘立柱建物

余部（あまべ）遺跡 その１（９８０１４）

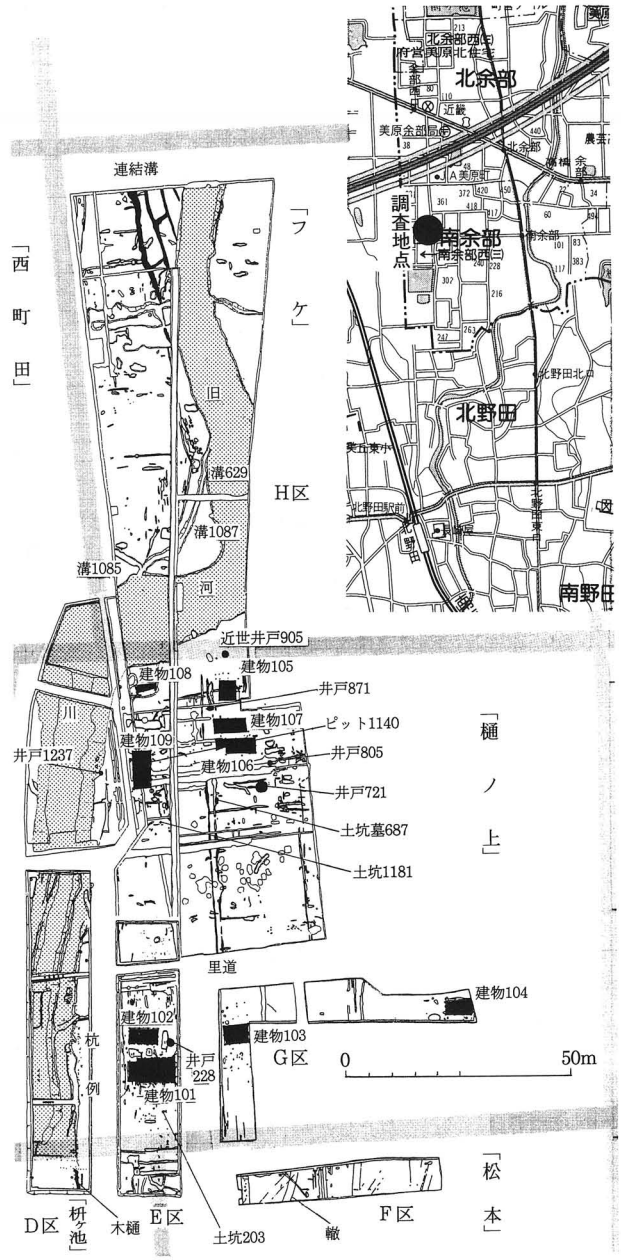
（１）南河内郡美原町南余部281番地　（２）7,600㎡
（３）平成10年７月27日～平成11年３月31日
（４）府営美原南余部住宅建替　（５）枡本　哲

余部遺跡（その１）の調査地点は、西除川左岸流域の中位段丘面上に位置し、余部遺跡（その２）とは、北の近畿自動車道・府道松原泉大津線を挟んで約500m隔たっている。

今回の調査では、一部に古墳時代の溝が検出されたが、前回同様中世の遺構が中心である。調査は前回に続けて新たにＦ～Ｈ区で実施した。この内、Ｈ区中央から北にかけては前回検出された旧河川の痕跡が認められ、この付近では耕作溝が検出された。一方、それより南側では前回居住区と考えたE区に連続する部分で、やはり建物、井戸などの生活の跡が見い出された。したがって、これまで検出された遺構全体をながめると、蛇行はしつつも南から北へ流れる旧河川跡を挟んで西側、北側は確実に中世の耕地であり、南側は現在11階の高層住宅となっているかつての「枡ヶ池」の北辺まで、東はG区を含めて西除川左岸方面へのびる居住域なっている。この居住域は地割りの１町分にあたっており、南余部の旧来の集落もその中に収まる。

居住域では、建物が７棟、井戸が４基、そして土坑墓が１基みつかっている。耕作域では旧河川からの取水用とみられる溝をはじめ、東西・南北方向の耕作溝が検出され、旧河川の流水方向に左右された溝を除いて、建物、溝などほとんど地割りラインに軸を揃えている。このほか、瓦器椀や、小皿を入れて埋めた浅い小土坑、ピットがあり、地鎮めなど宗教儀礼的行為に関連するとみられる特徴的な遺構もみつかっている。

旧河川とその堆積過程はそれ自体前回と同じようなデータであるといえるが、生活域・耕作域の遺構全体の変遷を関連づけると、13世紀前半の集落の出現、それ以降の動きは、結局、狭山池下流西除川左岸流域の取水システムの整備の営みに連動している可能性がある。最近とくに明らかにされつつある近世の記録に具体的に示された河川流域の潅漑の手法は、この地点でその一端が確認された、以上のような中世の開発の状況の中からも浮かび上がってくるのではないかと思われる。



第22図　調査区位置図・遺構図

余部（あまべ）遺跡 その2（９８０１５）

（１）南河内郡美原町北余部80番地外　（２）7,000㎡
（３）平成10年８月１日～平成11年３月25日
（４）府営美原北余部住宅（第２期）建替　（５）上林　史郎

余部遺跡は、南河内郡美原町北余部及び南余部に所在する。地形的には和泉山脈から北に伸びる羽曳野丘陵や陶器山丘陵とに挟まれた領域にあたり、狭山池から北へ流れる西除川西側の沖積地及び低位段丘面に立地している。さて、今年度の調査では、旧石器時代のナイフ形石器や縄紋～弥生時代の石鏃などが出土しているが、それらに伴う土器や遺構はみられない。明確に遺構がみられるのは古墳時代である。今年度調査の主要な遺構には、掘立柱建物25棟以上・ピット・畑の畝溝群・わだち・牛などの足跡・土坑・井戸・溝・土壙墓などがある。また、主要な遺物には須恵器・瓦器・土師器・土釜・土師質小皿・須恵質土器・陶磁器・瓦・柱根片・桶の底板、鋳造に関わる鉄鍋などの鋳型・鉄片・窯壁・鉄滓などがある。

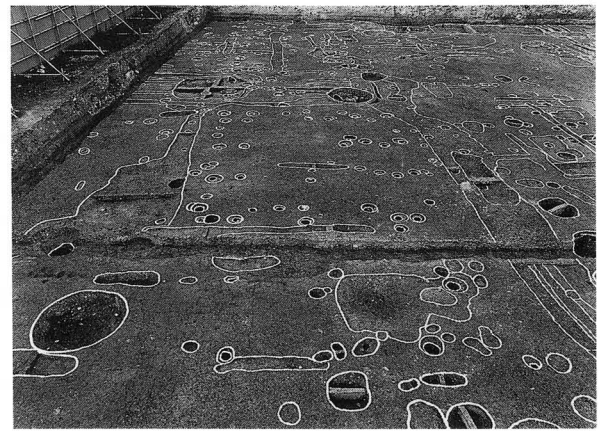
古墳～飛鳥・奈良時代

古墳時代の畑遺構の検出は、水田遺構に比べると極端に少ない。ただ、群馬県下では古墳時代の畑跡が20数例発見されている。本遺跡で検出された畑は、古墳時代の集落と近接して検出されたことに意義がある。『魏志倭人伝』や『日本書記』にも穀類の伝承記事がみられることから、穀物類を中心とした作物が栽培されていたのは確実であろう。なお、畑の畝溝群と２棟の掘立柱建物について導かれる当時の景観は、疎らな数棟の建物に居住している人々が天水などを利用しながら、粟や稗、芋、麦などを栽培していたイメージであろう。

平安～室町時代

中世については、鋳造に関連する遺構（12世紀後葉～14世紀初頭）が、23棟の掘立柱建物を中心に展開されている。細部をみると、建物（総柱の東西棟＋屋の南北棟）・井戸・鋳造関係の土坑・溝などが一体となって各々鋳造空間を形成していた。これらの遺構・遺物は、紛れもなく丹南地域を本拠地とした河内鋳物師の活躍場所であり、卓越した鋳造技術をもって梵鐘・灯炉・仏像・仏具などの寺院関連の製品を鋳造していたと考えられる。また、当地周辺は、寺社の所有する大荘園地帯でもあったため、寺院などの需要に応じる形で、鋳物師は梵鐘などを鋳造していたものが、天皇直轄の蔵人所に属して「灯炉供御人」になり、灯炉や鍋釜などを調進するようになったものと考えられる。その後、河内鋳物師は、「蔵人所牒」を得て、通行免税などの権益や鋳物の専売権をも獲得し、全国的展開を遂げていく。当時の大消費地である京での需要に応じて、150年近くにわたって鋳造品を供給しつづけたのであろう。しかし、当地での鋳造品の製造は、14世紀前葉に始まる日本全体を巻き込んだ南北朝の大動乱によって終焉をむかえることになる。

第23図　飛鳥時代畝溝群



第24図　中世鋳造遺構

三軒屋遺跡（９８０１６）

（１）泉佐野市上之郷　（２）3,000㎡
（３）平成10年７月20日～平成10年10月20日
（４）農用地整備事業「下村地区」　（５）橋本　高明

位置

三軒屋遺跡は、泉佐野市の西南部「長滝」地区、「上之郷」地区に所在し、樫井川右岸の標高28～22mの田園地域に位置する。

調査

調査は、水路設置予定部分について樫井川に直行する方向にトレンチ４箇所、樫井川に平行する方向にトレンチを１箇所設定した。いずれも幅２mである。

層序　基本的な層序は、次のとおりである。

第Ⅰ層　表土層（20～30㎝）現代の耕作土である。

第Ⅱ層　黄灰色粘質土（30㎝）近世以降の耕作土層であろう。部分的に二層に分かれる。

第Ⅲ層　茶灰色粘質土（10～15㎝）中世の遺物包含層である。

第Ⅳ層　灰褐色粘質土層（20㎝）上面は、古墳時代の遺構面である。無遺物。

第Ⅴ層　黄色粘土　遺物は認められない。

なお、調査地の東端から樫井川に向かって100m付近までは上記の層序であるが、以西は第Ⅰ層の直下は全て河川堆積層（無遺物）である。

また、調査地の東端で下層調査を実施した結果、第Ⅴ層の下層に河川堆積層を確認した。したがってこの地点より西の樫井川まで広がる平坦面は、河岸段丘面であることが理解できる。

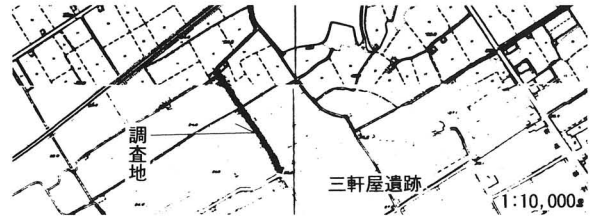
遺構と遺物

今回の調査で確認した主要な遺構は弥生時代中期の方形周溝墓と古墳時代の竪穴住居である。

〈方形周溝墓〉溝の幅は1.2～1.5m、深さ20㎝、埋土は暗茶灰色粘質土層である。

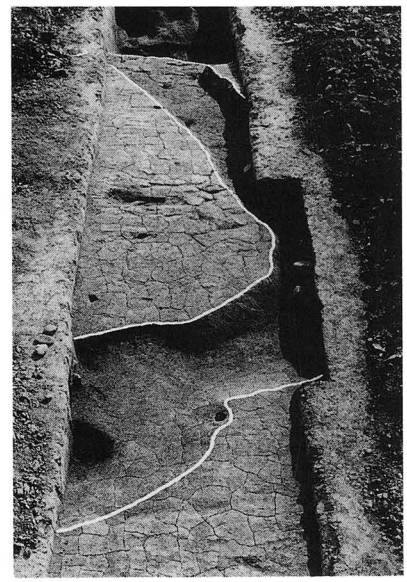
遺物は、溝の底付近から弥生土器壺が数点出土した。溝が直角に曲がること、溝の底付近から弥生時代中期の完形品に近い土器が集中して出土し、供献土器の可能性が考えられることから方形周溝墓と考えたが、後世の開墾で削られたためか主体部は確認できなかった。

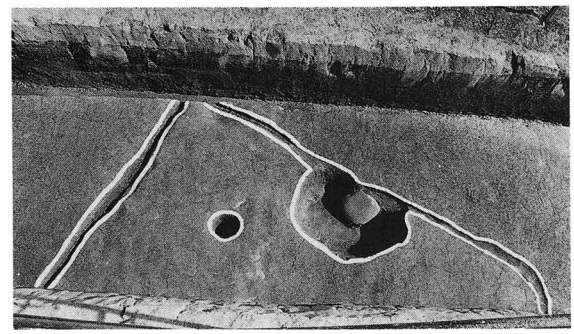
〈竪穴住居〉Ｂトレンチの東端から90m付近で確認した。方形プラン（一辺4.5m）、深さ20㎝程度、南辺の中央に接して楕円形の土坑があり、埋土（茶褐色粘質土）から石皿、摺石、土師器の小壺が出土した。また、住居内からは、土師器の高坏、壺が出土した。



第25図　調査地位置図

第26図　全景


第27図　方形周溝墓


第28図　竪穴住居

美園遺跡（98017）

（1）八尾市美園町３丁目地内　（2）約80㎡
（3）平成10年７月13日～９月30日
（4）寝屋川水系地下河川竪坑築造　（5）泉本　知秀

今回の調査は大阪府土木部の地下河川の竪坑築造工事に伴って実施した。

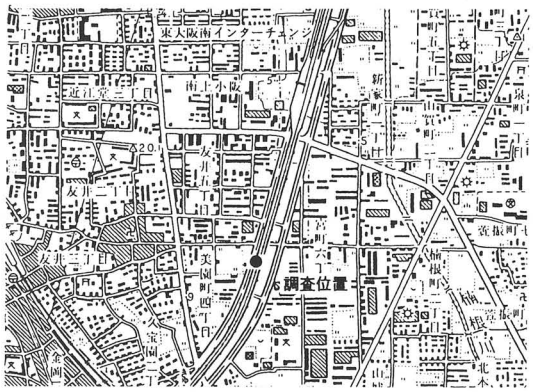
発掘地点は1980年代に（財）大阪文化財センターが調査した美園遺跡Ａ地区の北端部の西側にあたる。鋼矢板打ち、薬注工事を行った後調査にとりかかった。

現地表面は海抜6.3mで海抜約1.0mまで掘り下げた。最下層は黒色粘土が３層ベルト状に存在し、センターの調査で縄文時代の晩期に属することが解明されている。今回は遺構、遺物は認められなかった。この直上で３面にわたり弥生時代前期から中期初めの遺構が存在し土器、石器等が出土した。海抜2.2m付近で方形周溝墓状の溝、住居跡壁溝状小溝、杭列等が検出された。その直上で大小の土壙が17個確認された。焼土片、灰、炭が混入しているものが多い。墓壙、井戸等断定できるものはない。海抜2.6m付近では竪穴住居跡を２つ検出した。床面に伴う完形の出土品は存在しない。弥生前期末から中期初めと推定される。

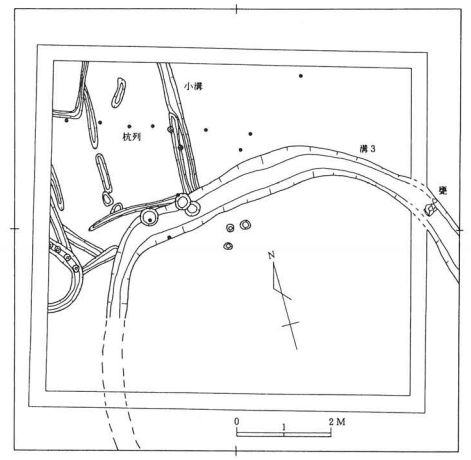
その上層60㎝の間はシルトの互層で遺物は皆無で水田畦畔等も認められなかった。

海抜4.6m付近でほぼ南北方向に掘られた大溝を検出した。推定幅約６ｍ、残存深さ60㎝から1.0mで条里線にのる溝である。馬または牛の脚の骨が出土した。

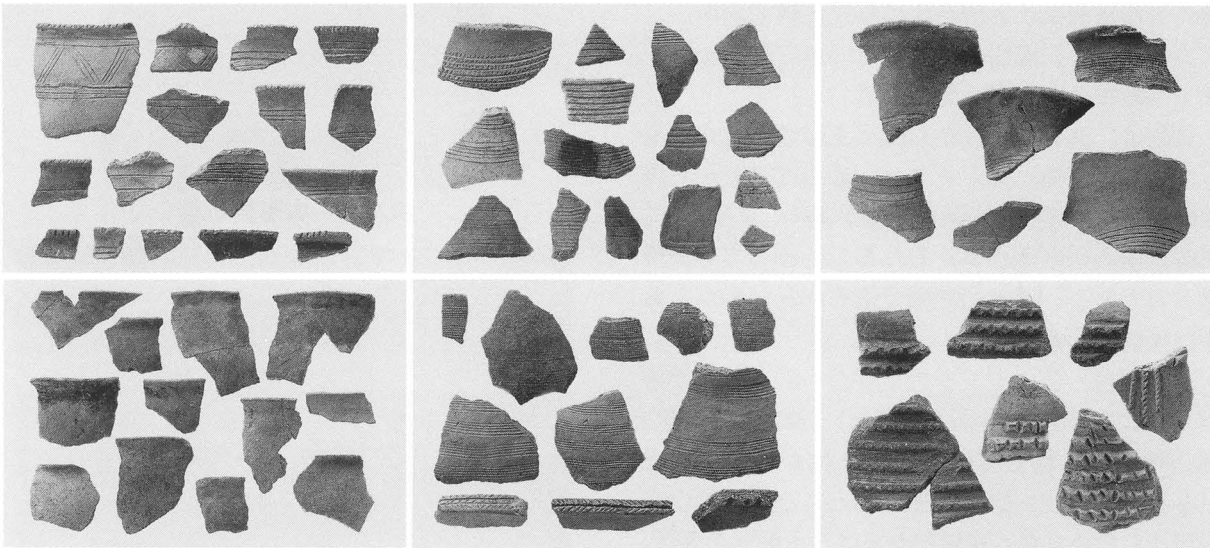
遺物量はコンテナに約10箱出土し、弥生時代前期の土器が90％強をしめる。復原できたのも弥生時代前期の土器が10点余りである。



第29図　調査区位置図



第30図　方形周溝墓状遺構図



第31図　弥生前期末～中期初頭土器

新堂廃寺（98021）

（1）富田林市緑ヶ丘町1615番地　（2）3,800㎡
（3）平成10年7月24日～平成11年3月31日
（4）府営富田林緑ヶ丘住宅第2期（建替）建設工事　（5）小浜　成

はじめに

富田林市緑ヶ丘町に所在する新堂廃寺は、飛鳥時代に創建された南河内最古の古代寺院であり、飛鳥寺・四天王寺と並んで日本で最も古い寺院のひとつである。周辺には、この寺を建てた豪族の墓と考えられるお亀石古墳や、所用瓦を焼いたヲガンジ池瓦窯、造営母体集落の可能性がある中野遺跡などが存在している。

発掘調査の成果

中門・回廊・南門・参道・築地塀・宝幢遺構など寺域南半の主要遺構とその造営過程および寺域南側の地形環境などが明らかになった。

中門　創建時に遡る基壇の一部が見つかった。東西幅は約13.4mと復元できる。再建後の中門は、削平を受けて残っていなかった。

回廊　中門に取り付く東側回廊の一部分が見つかった。創建時の回廊東南隅や、再建後の東側拡張整地土が認められた。また、廃絶時の大量の瓦が見つかり、8世紀代に廃絶したと考えられる。

南門　東西3間、南北2間の東西棟の掘立柱建物である。中央間が約3.0m（10尺）、両脇間が約2.4m（8尺）、南北間が約2.1m（7尺）等間であり、基壇規模は推定で東西約13.4m、南北約8.2mである。倒壊時の瓦落から、7世紀末葉に建立され、8世紀代に廃絶したと考えられる。

築地塀　南門西側に取り付く築地塀跡が見つかった。この築地塀は南門の中央棟柱列とラインが一致しており、版築土の連続性から南門・築地塀は同時作業で造られていることがわかる。

参道　中門の南には創建当時、谷地形が入り込み、湿地状態であったが、南門造営時に整地し、参道を造っていたことが判明した。7世紀後葉における整地である。

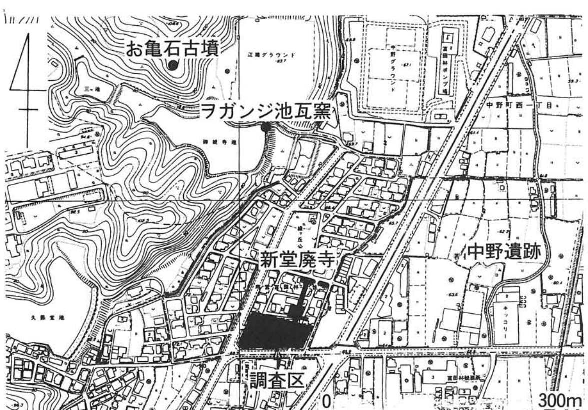
宝幢遺構　南門の前面に6本の柱の掘形が見つかった。約3.3m（11尺）等間で、南門の棟柱列と平行している。この遺構の性格としては、儀式の場での旗竿を立てる宝幢遺構の可能性が高い。

南限を画する溝　南門造営以前には、東西方向の一直線の溝が掘られており、主要伽藍造営当初から南門建立を計画に入れた寺域南限の溝として機能していたと考えられる。7世紀中葉に埋没。

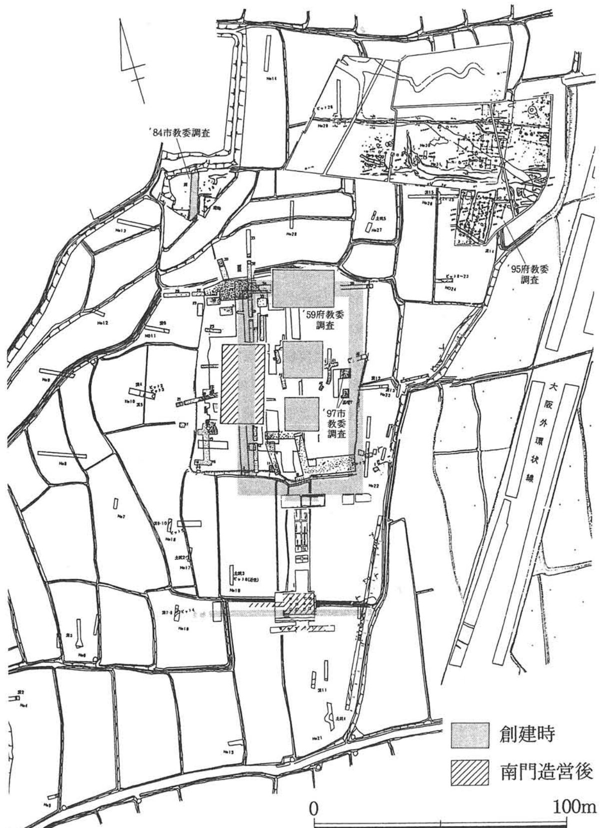
まとめ

1959・60年の調査以来、約40年ぶりに新堂廃寺の伽藍跡が見つかり、南門から中門・塔・金堂・講堂を南北に一直線に建て並べる四天王寺式を基本とする伽藍配置をとることがわかった。

さらに、主要伽藍創建から南門造営および主要伽藍再建後の寺域内の造営過程が明らかになるなど、新堂廃寺の伽藍配置と寺域の全体を解明できる貴重な成果を得ることができた。



第32図　調査区位置図



第33図　主要伽藍配置図

伽羅橋遺跡他（９８０２４）

（１）高石市高師浜１丁目　　（２）100㎡

（３）平成10年９月１日～９月９日

（４）府道高石北線建設　　（５）西川　寿勝

調査経緯

調査は府道高石北線建設予定地のうち、すでに買収されている用地に７か所の試掘区を設定しておこなった。

試掘１～３区は伽羅橋遺跡に、４～７区は伽羅橋東遺跡に位置する。特に試掘１～３区を含む開発予定地は同志社大学先史考古学会が昭和30年に調査した地点を含んでおり、大量の遺物が発見され、遺跡実態解明の起点となった場所でもある。

一方、伽羅橋東遺跡は伽羅橋遺跡と一部が重複し同じ性格の遺跡として認知されている。すなわち、泉州高石大雄寺跡を中心とした中世寺院・集落から構成される遺跡群である。

試掘調査成果

１～３区は盛り土を除く海抜約２ｍの地表面から50～70㎝程度掘り下げた地点で、層厚約30㎝程度の良好な遺物包含層があった。包含層には古墳～中世の遺物があり、特に中世の瓦が多い。

遺構は大溝・土坑・旧河川の堤などがある。２区で発見された幅約２ｍの大溝は昭和30年の調査で発見された南北溝の一部と考える。ただし、地山は海成堆積による乳白粗砂で崩れやすく、上半部は不明瞭である。包含層はこれらの遺構が風化・撹乱したり、整地されたことによって形成されたらしい。

４～５区は海抜2.5m前後の地面下、約１ｍ前後の堆積層があり、洪積段丘に由来する礫混じりの粘土層を基盤とする地山層がある。この地山礫層の直上に約10㎝程度の遺物包含層があり、中世の遺物や土坑などが発見された。

６区は旧耕作土の下に薄い粘土層が床土として形成されていることを確認したが遺構・遺物はなかった。７区は地山を削った上に整地土がのせられており遺構・遺物は失われていた。いずれも地山は段丘礫混じりの粘土層であった。

発見された遺物

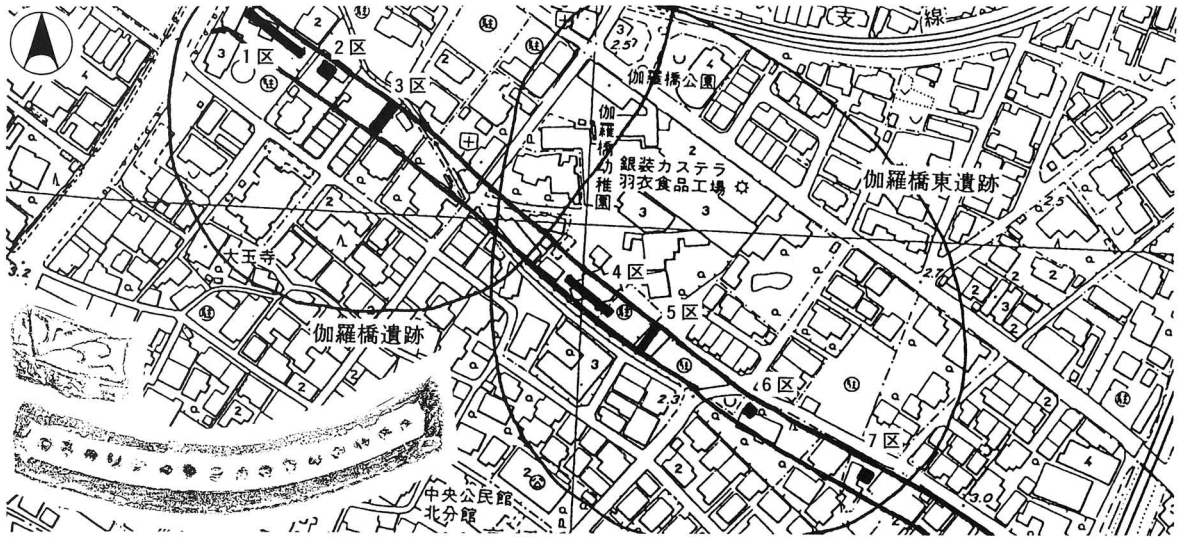
遺物はコンテナ３箱におよぶ。１・３区の包含層出土遺物が大半をしめ、中でも瓦がめだつ。軒瓦はこれまで発見されている紋様と共通するもので鎌倉・室町時代の特徴を示す。平瓦は小型で凹面に厚い離れ砂が付着したものが多く、その他縄目たたきが残るものもある。

土器は瓦器、土師器、陶器、土錘などがある。大半が中世の遺物である。その他、少量の須恵器があり、古墳時代後期の遺物と考える。これらは中世の遺物にまざって発見された。

まとめ

試掘調査によって中世寺院と集落の一端が確認できた。しかし、西側の調査区は粗砂による堆積物が地山・遺構を形成しており、遺構が良好に残存しない可能性が高い。ただ、発見された遺物から試掘区周辺が遺跡の中枢であると予想される。

以上より、１～５区を含む地域については開発に先立ち文化財保護について、さらに協議を必要とする結果となった。



第34図　試掘区位置図

亀井遺跡（９８０２５）

（１）八尾市南亀井町３丁目　　（２）172㎡

（３）平成10年８月３日～10月14日

（４）寝屋川流域南部下水道長吉ポンプ場重油タンク築造　　（５）岩崎　二郎

亀井遺跡は河内平野南部の沖積地に立地する。1978年以来長吉ポンプ場、近畿道天理吹田線、平野川改修工事等に伴い発掘調査が行われ、弥生時代を中心とする大規模な遺跡であることが知られている。今回の調査は長吉ポンプ場内の重油タンク築造工事に伴うもので、調査面積172㎡という小規模なものであった。

約２ｍの盛土を機械掘削し、地表下２ｍからタンク築造に必要な地表下3.9ｍまで発掘調査を実施した。調査区南壁の土層を下図に示す。

第１層は灰オリーブ色粘質シルトで、削平を受け10㎝程度しか残っていない。

第２層は灰オリーブないし暗灰黄色の粘質シルトである。上面で鋤溝群を検出した。鋤溝は南北方向で幅20㎝前後である。鋤溝からは土師器・磁器の細片が少量出土した。この面の標高は約7.8ｍである。調査区内では畦畔は検出されなかった。近世の耕作面であると考えられる。

第３層は灰色粘質シルトで下部はマンガン斑が多く集積する。上面で溝や段落ちを検出した。溝や段の方向は第１面と同じく南北方向である。段落ちにはヒトや寓蹄類の足跡が散見され、須恵器・瓦質羽釜の破片が出土した。３層から黒色土器の破片が１点出土した。

第４層は灰色粘質シルトで、橙色の酸化鉄斑が集積する。

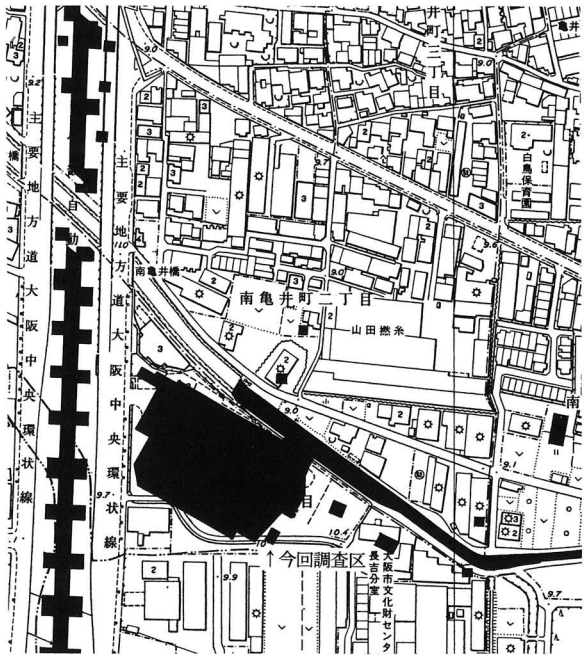
第５層はオリーブ褐色シルトである。この層の上面は隣接調査区の所見によると平安時代の水田面と考えられるが、今回の調査区内では畦畔等の遺構は検出できなかった。土師質羽釜の細片が１点出土した。

第６層は暗オリーブ灰色粘土で、炭酸カルシウムの集積が見られ、植物遺体を少量含む。第７層は禾本料植物の遺体を多く含む暗緑灰色粘土である。

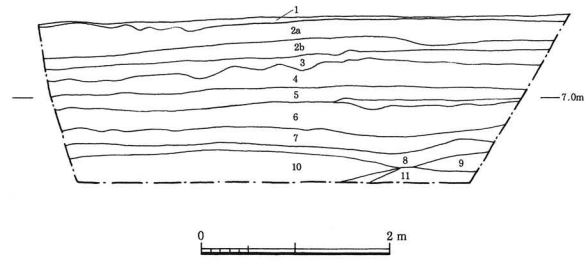
第６・７層は遺物はほとんどなく、側溝掘削時に７層から土師器または弥生式土器の細片が１点出土したのみである。隣接調査区で飛鳥時代の沼とされた層に対応する。

第８層は暗緑灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

第９層は黒色粘土で、弥生時代後期の土器を多く含む。この層を切る砂層（第10層）を検出したが、予定掘削深度に達したためそれ以上は掘り下げなかった。そのため明確にはわからないが、この砂層は東南から西北にむかう流路であろうと思われる。過去の調査で明らかになっている弥生時代後期後半の河川の流入の一端を示すものであろう。砂層上面の標高は約6.6ｍである。



第35図　調査区位置図



1	7.5Y5/2	灰オリーブ色粘質シルト
2a	2.5Y4/2	暗灰黄色粘質シルト
2b	5Y5/2	灰オリーブシルト（茶褐色斑）
3	5Y5/1	灰色粘土（茶褐色斑多い）
4	5Y5/1	灰色粘土（橙色斑）
5	2.5Y4/6	オリーブ褐色シルト
6	5GY4/1	暗オリーブ灰色粘土（炭酸カルシウム）
7	7.5GY3/1	暗緑灰色粘土（植物遺体多く含む）
8	10GY3/1	暗緑灰色粘土（植物遺体含む）
9	2.5GY2/1	黒色粘土
10	5GY4/1	暗オリーブ灰色砂
11	5GY3/1	暗オリーブ灰色シルト質粘土

第36図　南壁土層断面図

陶邑窯跡群（谷山池12号窯）（９８０２６）

（１）和泉市鍛冶屋町及び浦田町　（２）2,600㎡（敷地13,263㎡）
（３）平成10年８月20日～平成10年12月25日
（４）柑橘母樹園跡地整備　（５）今村　道雄

はじめに

陶邑窯跡群は、現在の行政区画で言えば堺市を中心に東は狭山市、南は和泉市・岸和田市の東西15㎞南北９㎞の和泉丘陵地帯に1,000基以上の窯が拡がる古墳時代最大の須恵器生産地の呼び名である。

谷山池地区は、丘陵地帯の南端、槇尾川が切り開いた谷の主谷と、主谷から派生する支谷に窯跡が築かれている。

この丘陵の窯跡が注目されたのは1961～４年の分布調査であるが、この時の調査の主眼は現在の泉北ニュータウンに含まれる陶器山（ＭＴ）、高倉地区（ＴＫ）、栂地区（ＴＧ）、光明池地区（ＫＭ）であった。

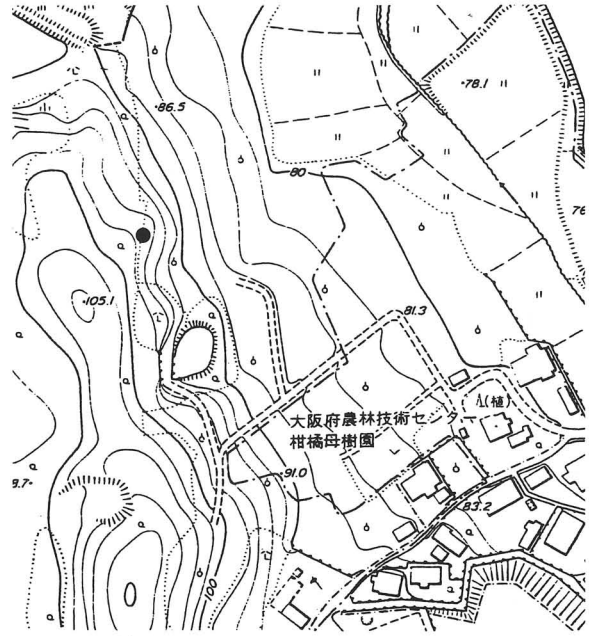
谷山地区（ＴＮ）の分布調査が再度行なわれたのは、和泉市総合基本構想をうけ、現和泉中央駅を中核とした約1,000㌶の開発範囲を対象にし、昭和51年７・８月に実施した。その後宅地開発公団から同地域受託して同52年２月、分布調査を実施したところ窯跡・須恵器散布地等は89箇所を数えることができた。

地区名について、従来この地区は「谷山」の呼称が使われていたが、この名称は今回の分布調査かぎりとし、次期調査からは「谷山池」の名称を使用するようになった。今回調査した地点はＣ－12地点として把握されていた箇所で、周辺では本地点をいれてＣ－８～Ｃ～18地点の11箇所が窯跡推定地にリストアップされていた。

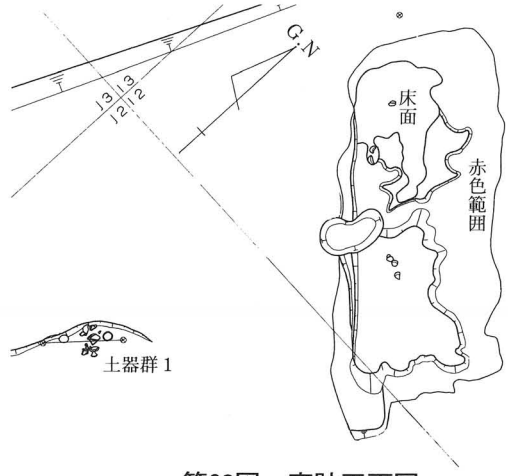
調査成果

また、調査をはじめるにあたり、和泉市教育委員会の窯跡分布図と窯番号を共通のものにするため市の白石氏より提供を受け、現地で使用した。

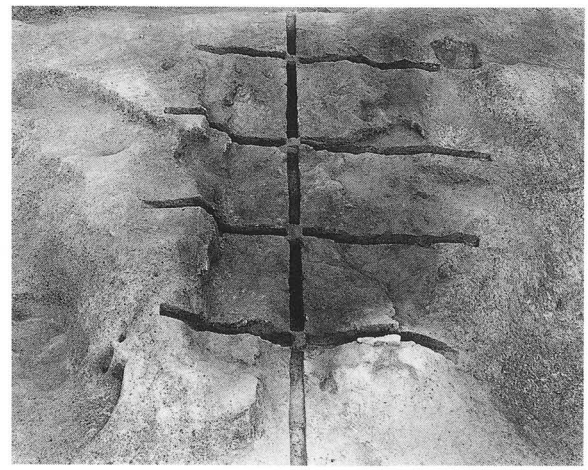
谷山池12号窯は、標高約100ｍの南から北に延びる尾根を数ｍ下った稜線部から東斜面にかけて作られた窯である。調査区内に認められたのは長さ5.2m，幅2.2mの焼成部のみで、焚き口、燃焼部、奥壁、煙道部、天井等はすでに失われていた。床、壁の補修回数は２回を数えることができ、床面には焼き台につかわれた須恵器杯身、が数点残されていた。時期はⅡ－３～４期である。



第37図　谷山池12号窯、位置図



第38図　窯跡平面図


第39図　窯跡断ち割り状況

招提中町遺跡（９８０２７）

（１）枚方市東牧野町　（２）15,238㎡
（３）平成10年８月７日～平成12年３月24日
（４）府営枚方牧野東住宅建替　（５）山上　弘

招提中町遺跡は、淀川を北東に遡った枚方市に所在し、枚方台地と呼ばれる標高約20mの低位段丘上に立地している。従来より弥生時代から平安時代にかけての複合遺跡と認識されていたが、大規模な調査が行われなかったため、その詳細は明らかでなかった。

周辺の遺跡に目を向けると、西側に隣接して白鳳時代創建の九頭神廃寺があり、塔跡の基壇も見つかっている。また遺跡の南側を流れる穂谷川をはさんで、弥生時代中期の交北城の山遺跡や古墳時代中期の牧野車塚古墳がある。

今回の調査は、府営住宅建替えに伴い、平成10年度から11年度の２カ年にわたって約１万５千㎡の範囲を行い、今年度はその内約５千㎡の範囲を終了した。調査の結果、弥生時代中期の方形周溝墓群、古墳時代前期の竪穴住居跡、平安時代の掘立柱建物等を検出した。

弥生時代

弥生時代にかかる遺構は、方形周溝墓17基、土器棺墓１基を検出した。

方形周溝墓は、調査区の東側で、北東から南西に向かって列状に検出した。２～３基が周溝を共有し、一辺の長さ５～８ｍ、周溝の幅1.5mを測る。方形周溝墓群の中央で検出した４号墓は、周溝を共有せず単独で築造されている。墳丘規模約８ｍ×11ｍ、周溝幅約2.5mを測り、これまで検出した周溝墓の中では最大である。４号墓を中心として、南北２列に周溝墓が並ぶ。周溝墓は盛土がすべて削平され、主体部は一切検出できなかった。また周溝内からも遺物はほとんど出土せず１号墓周溝内から打製短剣、２号墓周溝内から大型蛤刃石斧が出土したのが主な遺物である。14号墓の周溝南コーナー外側に隣接して土器棺墓を検出した。これらの方形周溝墓群の築造時期は、弥生時代中期中頃と考えられる。

古墳時代

古墳時代にかかる遺構は、竪穴住居跡８棟、木棺墓、土坑等を検出した。

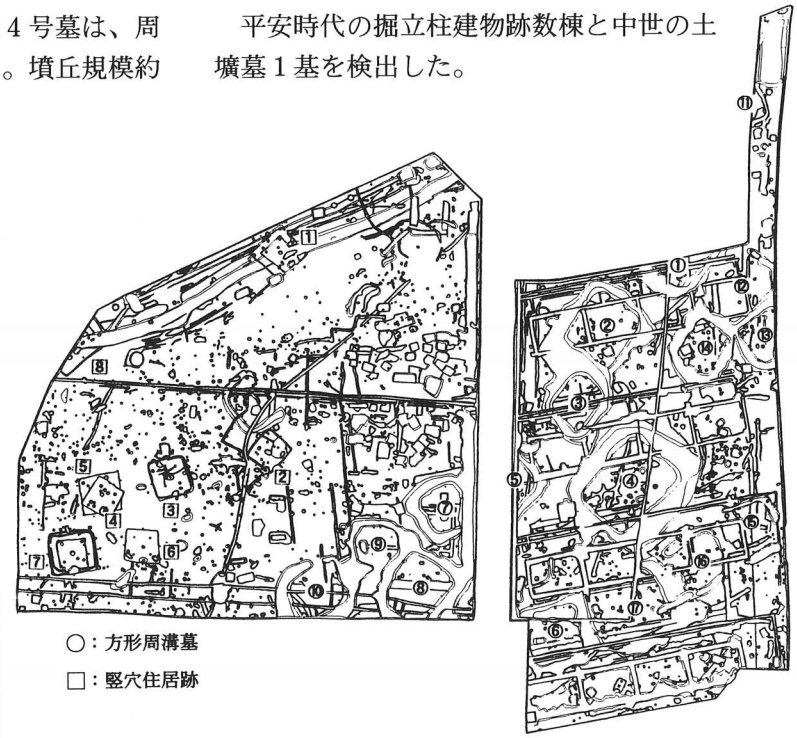
竪穴住居跡は、調査区の西側で検出した。平面形はすべて方形である。規模は、一辺4.5m～６ｍを測る。８号住居跡のみ規模が大きく、一辺８ｍを測る。２・４号住居跡が布留期まで下る以外は、庄内期の住居跡である。

庄内期の住居跡に共通する構造は、住居内に炉跡と考えられる中央穴、南に面する壁面の中央部に貯蔵穴、４本の主柱穴である。１・７・８号住居跡はコ字形にベット状遺構をもつ。

古代・中世

平安時代の掘立柱建物跡数棟と中世の土壙墓１基を検出した。

第40図　方形周溝墓群



第41図　遺構全体図（1000分の１）

西大井遺跡（９８０２９）

（１）藤井寺市西大井１丁目　（２）3,370㎡
（３）平成10年８月11日～平成11年３月31日
（４）大阪府大井下水処理場建設　（５）森井　貞雄

西大井遺跡は、羽曳野丘陵と国府台地に挟まれた標高15m前後の谷底平野に立地する旧石器～江戸時代の複合遺跡である。昭和54年以降、大井下水処理場用地内で、本府教育委員会及び（財）大阪府埋蔵文化財協会による継続調査がなされている。今回の調査区は、平成４年度調査区の東側に接続した場所にある。

調査は、盛土・近代層を深さ約2.4mまで機械掘削した後、厚さ3.1m～5.0mの包含層を人力で調査し、９面余の遺構面を検出した。

第１～５遺構面は、江戸後期～平安前期の条里型地割りを踏襲した耕作地の重なりである。調査区西側では坪界畦畔が交差する様子が確認される。

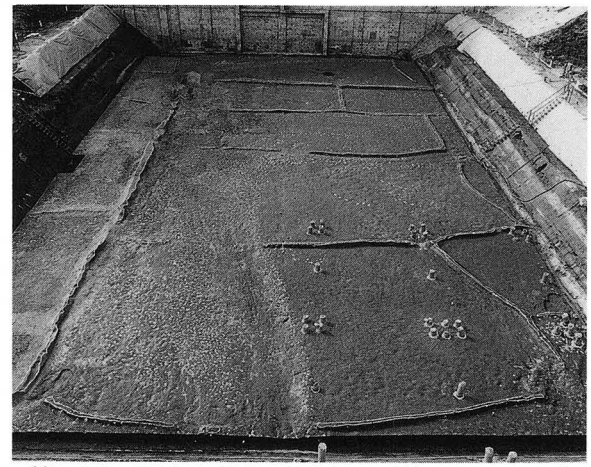
第１面の江戸後期の水田区画は、幕末の絵図にほぼ一致する。煉瓦用粘土を採取した近代の長方形の穴も多数認められた。第２面の江戸中頃の水田は、南側の坪内に幅3.5～５mの狭い間隔で東西方向に小畦畔が平行して走るのが特徴である。この面の直下には1794年の大和川付替えの影響と見られる湿地性堆積が広がる。第３面では江戸前期の島畑と室町中期の素堀り溝を検出した。

第４面は平安後期（12世紀）頃の水田面である。第３面以降の東西坪界畦畔は、図上で復元した本来の坪界線より北に振れていたが、この時期以前ではほぼ一致する。小畦畔はほとんど削平されていたが、整然とした長方形区画が確認される。この面の下からは、11世紀頃の坪界畦畔（４b面）を検出している。第５面は平安中期（10世紀後半）の水田面であり、洪水堆積層に覆われたため良好に残存する。坪界畦畔は幅２m、高さ0.3mと大規模で直線的に延びるが、小畦畔は緩やかにカーブする。合計17筆を検出し、一筆は144～357㎡を測る。大人、子供、牛の足跡が多数残る。この面の直下（第５b面）で平安前期（９世紀前半）に遡る可能性が高い幅1.2m、高さ0.2mの条里畦畔を検出した。西大井遺跡では最も時期の遡る条里遺構である。

第６面は灰緑色シルトをベースとする弥生時代終末～古墳中期の遺構面である。調査区の中央には、僅かに窪む程度まで埋没した南北に走る幅約30mの谷状地形（自然河川）がある。谷より西側では土壙群と２条の溝、東側では溝と浅い落ち込み・柱穴を検出した。土壙群は以前の調査で確認された群集土壙墓群の東端に相当するが、平安期の攪乱が著しい。土壙は24基あり直径0.4～１m、深さ0.1～0.4mの円形・楕円形を呈し、黒褐色粘土ブロック土を埋土とする例が多く、布留式の高杯を埋納するものがある。

第７面は谷状地形を掘り切った段階。谷の深さ約2.0mを測り、上半は縄文晩期～弥生前期の２枚の黒色粘土と灰緑色粘土の互層、下半が灰褐色シルト、最下層は砂礫となる。下半層には縄紋時代後期の土器片を僅か含むが、谷の東側斜面でも縄文後期の土壙１基を検出した。上半層中には杭が対になって打たれた場所があった。

ベースとなる緑灰色シルトを谷の東側で掘り下げた結果、やや汚れたバンド層（標高10.4m付近）までの間で旧石器～縄文草創期のナイフ型石器、剥片、石核等及び風倒木痕を検出した。



第42図　平安中期条里型水田（第５面東から）

第43図　弥生終末～古墳時代土壙墓群（第６面南から）

岸之本南遺跡（９８０３４）

（１）富田林市龍泉　　（２）334㎡

（３）平成10年12月10日～平成11年２月10日

（４）府営農地開発事業「東条地区」　　（５）橋本　高明

位置

岸之本南遺跡の所在する富田林市龍泉の地は、東の佐備丘陵と西にそびえる「嶽山」に挟まれた谷間に位置する。その中央を佐備川が蛇行しながら北流する。

層序

第Ⅰ層：表土（耕作）層（20～30㎝）現代。

第Ⅱ層：淡灰色砂質土層（20㎝）近世以降の耕作土層であろう。陶磁器を少量含む。

第Ⅲ層：淡灰茶色砂質土層（20㎝）中世以降の耕作土層であろう。瓦器が少量含まれる。

第Ⅳ層：黒灰色粘質土層（10～15㎝）初期須恵器等を含む古墳時代の包含層である。

第Ⅴ層：暗黒灰色粘質土層（10～20㎝）第Ⅳ層にかわって東側にみられる。

第Ⅵ層：淡灰黄色砂層、古墳時代遺構面のベースとなり、自然堤防の上部を形成している。

第Ⅶ層：淡灰黄色粘質土層、調査区東端にみられ、西に向かって傾斜している。洪積段丘の傾斜と考えられる。

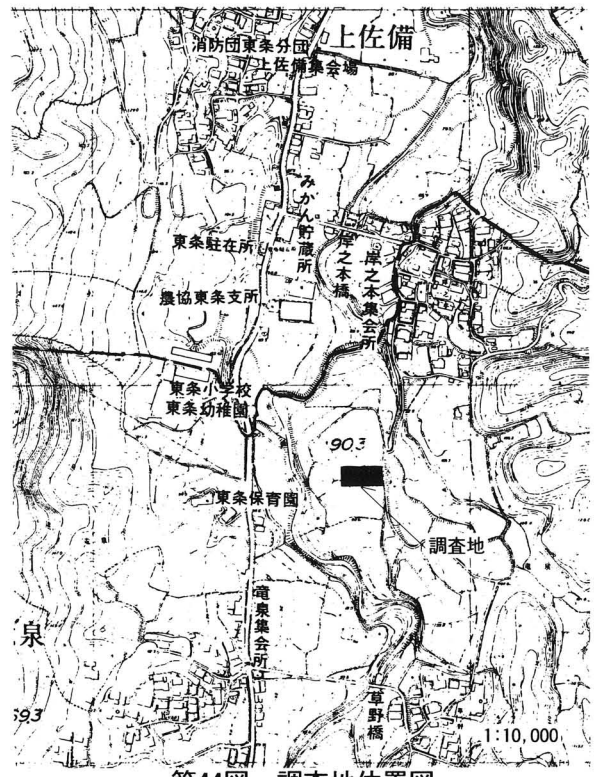
当遺跡は、佐備川の右岸に形成された自然堤防上に立地している。遺構面の高さは、調査地西端から東へ約20mは自然堤防上部にあたり平坦（約T.P.＋90.0m）である。その東側は緩やかに下降し、丘陵部と接するところまでは、後背湿地となる。

遺構と遺物

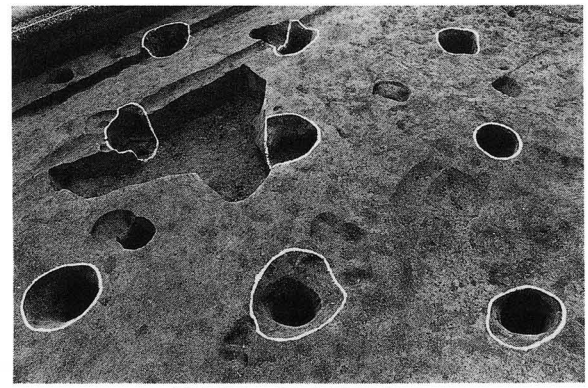
遺構には、ピット、建物、土坑、井戸、溝がある。〈ピット群および建物跡〉ピットは約50個確認した。建物は２棟確認した。

建物１は、２間×２間の総柱建物である。柱穴は、円形に近い不定形を呈し、深さは30㎝前後である。埋土は、暗茶褐色粘質土である。ベースが砂層のため建物の重みでベースに数㎝くい込んだ柱痕が顕著に認められた。柱の直径は10㎝程度である。出土遺物には初期須恵器がある。

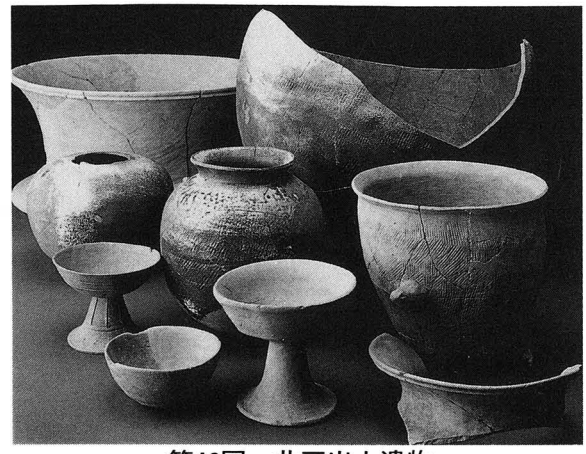
建物２は、調査区の南端に一部を検出したもので、建物１と方向、埋土、柱穴の規模等共通している。**〈井戸〉**平面形は上端が一辺1.0mの隅丸方形で、下端が円形に近い不定形である。埋土は三層に分かれ、上層と下層の上面から遺物が出土した。特に下層上面からは、初期須恵器、韓式土器、土師器の一括性の高い資料が出土した。



第44図　調査地位置図



第45図　掘立柱建物１



第46図　井戸出土遺物

岸之本南遺跡出土土器の蛍光X線分析

奈良教育大学　三辻利一

1）はじめに

20年間にわたる窯跡出土須恵器の分析科学的研究の結果、全国どこの窯跡出土須恵器も各窯ごとに、K－Ca、Rb－Srの両分布図上でまとまって分布し、一定の科学特性をもつこと、さらに、各地域ごとに地域差も認められ、相互識別も十分可能であることがわかった。このデータが原点となって須恵器産地推定法が組み立てられた。現在、この方法を使って、初期・古式須恵器や、平安時代の須恵器の伝播・流通の研究が各地で進められている。

窯跡の数が少ない初期・古式須恵器については地元産か陶邑産かの2群間判別分析が有効である。そして、朝鮮半島からの搬入品が想定される場合には伽耶群、陶邑間の2群間判別分析も適用される。この方法を使って、全国各地の遺跡から出土した初期・古式須恵器の産地推定のデータが大量に集積されている。その結果、地方窯の製品は外部地域へ供給されていないこと、陶邑産の須恵器のみが一方的に全国各地の古墳に供給されていること、そして、朝鮮半島産の陶質土器も検出されているが、少数であり、大きな流れとなって供給されているのではないことが示されている。

このような流れの研究の中で、分析試料が増加する傾向にあり、これらをまとめて、より包括的にデータを整理しようとする方法論の開発研究も進められている。胎土分析による須恵器の伝播・流通の研究がいよいよ、定着しようとしている。本報告では岸之本南遺跡の初期須恵器と土師器のX線分析の結果について報告する。

2）分析方法

全試料は表面を研磨して付着物を除去したのち、タングステンカーバイト製乳鉢の中で100メッシュ以下に粉砕した。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして、13トンの圧力を加えてプレスし、コイン状の一定形状の試料を調整して、蛍光X線分析を行った。

蛍光X線分析には波長分散型の完全自動式の装置（理学電機製3270型機）を使用した。この装置には48試料が同時に装塡できる自動試料交換機が連結されている。1セット、48試料の中の1つは必ず、岩石標準試料、JG－1である。JG－1は定量分析のため標準試料であるとともに、分析作業が定常状態で進行したことを調べるモニターとしての役割をもっている。

JG－1の分析値を通して、全分析値は％やppmの濃度表示をすることもできるが、いちいち、これらの濃度表示に変換しなくてもJG－1による標準化値を使って直接、データ解析ができる。むしろ、その方が便利である。そのため、筆者はJG－1による標準化値を使ってデータ解析を進めている。

3）分析結果

今回分析した、岸之本南遺跡出土土器の分析値は第4表にまとめられている。分析値はJG－1による標準化値で表示されている。

このデータを解読するためにはまず、K－Ca、Rb－Srの両分布図を作成しなければならない。図47には須恵器の両分布図を示す。大部分のものが陶邑領域には対応せず、伽耶領域に対応することが注目される。

そこで、これらの試料について陶邑群、伽耶群間の2群間判別分析を適用することにした。両群の重心からのマハラノビスの汎距離の2乗値の計算値も表1に示されている。この結果を判別分析図上にプロットしたのが図48である。

5％の危険率をかけたホテリングのT2検定より、陶邑群への帰属条件はD^2（陶邑）≦10であり、伽耶群への帰属条件はD^2（伽耶）≦10である。しかし、これだけでは陶邑領域と伽耶領域は確定しない。両母集団の試料の中には両領域が重複する領域に分布するものがあるからである。ここでは、便宜上、理想境界線の上部にあり、かつ、D^2（陶邑）≦10で規定される領域を陶邑領域とし、理想境界線の下部にあり、かつ、D^2（伽耶）≦10で示される領域を伽耶領域とした。そうすると、陶邑産と推定できるのは№17、22、23、26の4点にすぎず、逆に、伽耶産と推定されるのは№3、6、8、9、11、13、14、19、21、25、31、32の12点にもなる。不明領域に分布するものは数点あるが、このうち、№7は陶邑産でも、伽耶産でもない。朝鮮半島の未特定の窯の製品である可能性が高い。№30についてはよくわからない。この他、№16は陶邑産の可能性があり、№12、24、27、33の4点は朝鮮半島側の製品である可能性が高い。この結果は図47の両分布図と比較すると理解し易い。№27の縄蓆文土器は陶邑産の製品でないことは明白である。朝鮮半島の製品であろう。

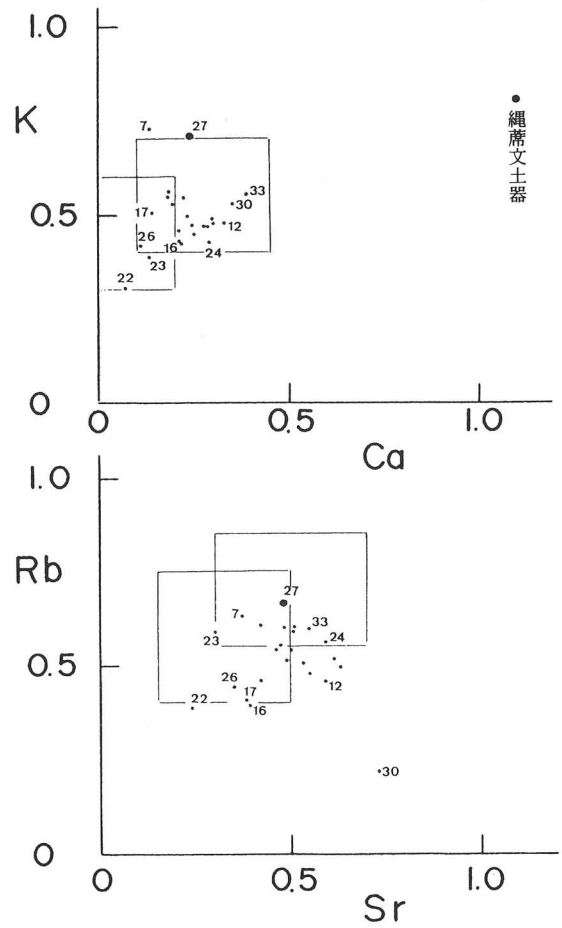
以上が須恵器の分布結果であるが、図47に示すように、両分布図はかなりばらついて分布しており、1ヶ所の製品でないことは明白である。初期・古式須恵器の窯の操業期間が比較的短く、したがっ

て、素材粘土を採取する場所は固定されているせいか、窯出土須恵器の両分布図における分布は集中度が高い。このことは各地の窯について確認されている。このデータを参考にする限り、今回分析した須恵器は１ヶ所で作られた製品ではなく、何ヶ所かで製作された須恵器の混合集団と判断される。つまり、岸之本南遺跡へ供給された須恵器であると考えられる。

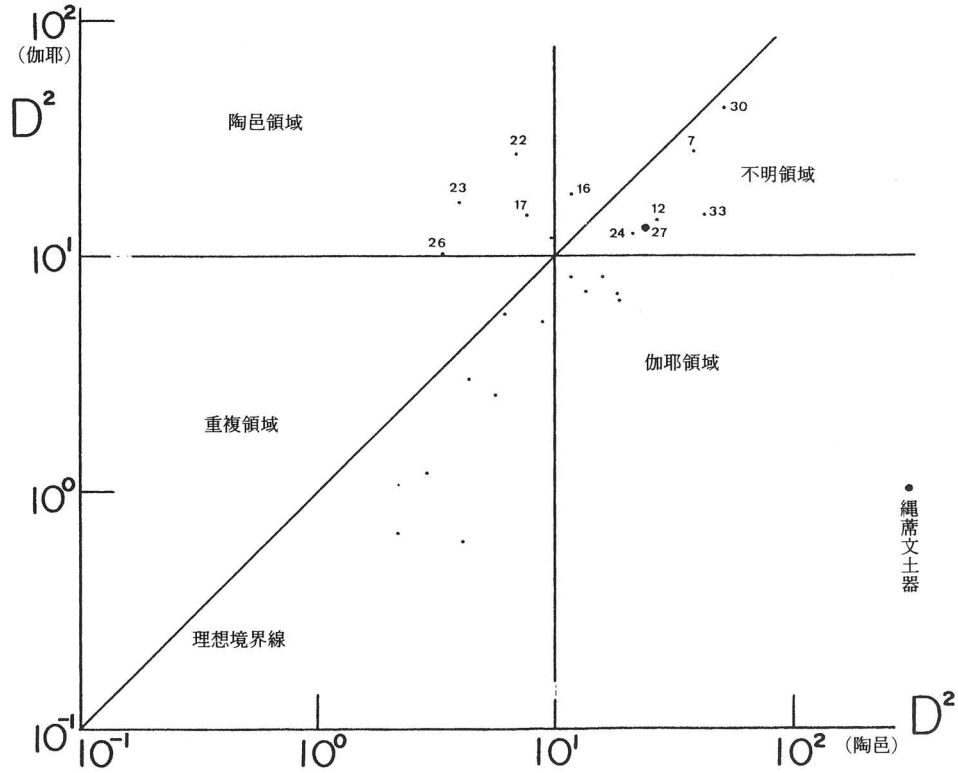
このような考え方に立つと、陶邑産と推定される須恵器と朝鮮半島からの搬入品と推定される陶質土器が混ざっていることは理解できる。その場合、大部分のものが陶邑産の須恵器でなく、朝鮮半島からの陶質土器であるということは興味深い。

№30はRb－Sr分布図では他の須恵器群から離れて分布する。畿内の、この時期の遺跡から出土する須恵器の中で、この位置に分布するものはほとんどない。№30は土師質土器であるので、もしかしたら、須恵器ではなく、土師器である可能性をもつ。一般に、土師器胎土は須恵器胎土とは異なっている。焼成温度は低いため、素材粘土の選択もそれほど厳しくなかったと思われる。土師器なら、Rb－Sr分布図で№30が分布することも理解できる。

土師器はその生産場所である窯跡が残っている場合がほとんどないので、つまり、産地そのものが最初から見つかっていないので、土師器の産地



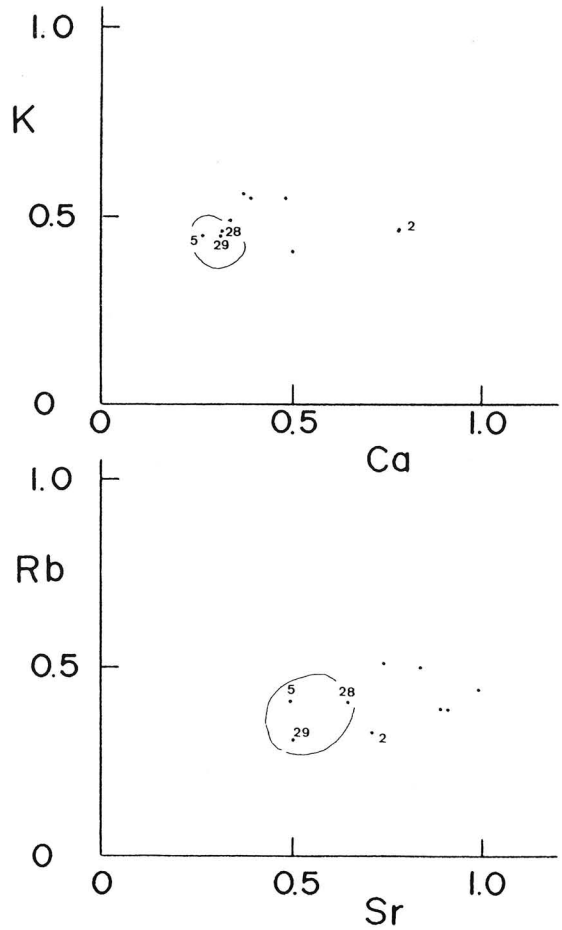
第47図　須恵器両分布図



第48図　岸之本南遺跡　出土初期須恵器の産地推定

推定の研究は困難である。むしろ、土師器の胎土研究という形で研究を進めており、土師器胎土と考古学的諸条件とがどこまで対応するかという発想で胎土の整理が進められている。

今回分析した土師器の両分布図を図49に示す。両図でまとまって分布するNo.5、28、29の3点は同類の胎土であり、同じところで製作された土師器である可能性が高い。また、No.1、4、10と、No.18、20もそれぞれ、同類の胎土とみられる。したがって、土師器胎土は少なくとも3種類あることになる。このうち、No.5、28、29のA群のみは他の土師器胎土とは異なることは図3からもわかる。No.28、29は布留式土器である。したがって、A群は布留式土器ということになる。図49の土師器の分布位置をみていると、古市古墳群の埴輪胎土と類似している。したがって、布留式土器を含めて、他の土師器も古市古墳群側で製作された可能性が高い。つまり、古市側の何ヶ所かで製作された土師器と推定する。



第49図　土師器両分布図

NO					K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D^2(陶邑)	D^2(伽耶)	推定結果
1	11- 2488	土師		カメ	0.546	0.487	3.06	0.439	0.968	0.375	—	—	
2	2489	土師		カメ	0.473	0.781	3.49	0.334	0.711	0.409	—	—	
3	2490	須		ツボ	0.479	0.296	2.47	0.517	0.611	0.451	18.30	7.00	伽耶
4	2491	土師		コシキ	0.412	0.495	2.91	0.503	0.835	0.291	—	—	
5	2492	土師			0.454	0.259	4.00	0.414	0.498	0.279	—	—	
6	2493	須			0.557	0.179	3.03	0.605	0.424	0.357	2.90	1.20	伽耶
7	2494	須	土師質	カメ	0.730	0.132	2.87	0.627	0.366	0.188	33.60	28.50	非陶邑
8	2495	須		カメ	0.467	0.267	3.08	0.505	0.533	0.399	13.30	7.10	伽耶
9	2496	須		フタ	0.475	0.244	2.96	0.539	0.495	0.351	8.80	5.20	伽耶
10	2497	土師		カメ	0.489	0.333	2.18	0.508	0.740	0.385	—	—	
11	2498	須		カメ	0.465	0.276	3.11	0.480	0.551	0.424	15.70	8.30	伽耶
12	2499	須		ツボ	0.475	0.329	2.69	0.458	0.588	0.454	26.70	14.30	非陶邑
13	2500	須	土師質	カメ	0.563	0.184	2.97	0.549	0.467	0.310	4.30	3.00	伽耶
14	2501	須		カメ	0.550	0.222	2.97	0.593	0.507	0.330	4.10	0.62	伽耶
15	2502	須		カメ	0.428	0.215	4.15	0.456	0.422	0.267	9.50	12.00	
16	2503	須	土師質	カメ	0.433	0.209	4.57	0.392	0.394	0.187	11.80	18.80	
17	2504	須		ツキ	0.507	0.135	2.66	0.406	0.380	0.258	7.60	15.10	陶邑
18	2505	土師		カメ	0.562	0.367	1.81	0.394	0.891	0.455	—	—	
19	2506	須		ツボ	0.532	0.189	3.03	0.597	0.476	0.353	2.20	0.68	伽耶
20	2507	土師		カメ	0.550	0.389	1.84	0.388	0.906	0.451	—	—	
21	2508	須		ハソウ	0.456	0.213	3.34	0.535	0.456	0.347	6.00	5.70	伽耶
22	2509	須		フタ	0.314	0.070	2.44	0.378	0.236	0.123	6.80	27.50	陶邑
23	2510	須		フタ	0.387	0.129	2.64	0.588	0.301	0.169	3.90	17.10	陶邑
24	2511	須			0.433	0.286	2.40	0.557	0.591	0.350	21.10	12.50	非陶邑
25	2512	須		ハソウ	0.500	0.231	2.90	0.598	0.507	0.389	5.60	2.60	伽耶
26	2513	須		フタ	0.416	0.112	2.32	0.443	0.347	0.229	3.30	10.40	陶邑
27	2514	須	縄蓆文	カメ	0.713	0.241	2.88	0.669	0.480	0.317	23.90	13.00	非陶邑
28	2515	土師	布留	カメ	0.464	0.312	2.23	0.410	0.654	0.383	—	—	
29	2516	土師		タカツキ	0.450	0.314	4.26	0.310	0.502	0.291	—	—	
30	2517	須	土師質	タカツキ	0.527	0.347	4.37	0.223	0.733	0.377	51.40	43.30	
31	2518	須	土師質	タカツキ	0.491	0.298	3.02	0.499	0.629	0.332	18.80	6.60	伽耶
32	2519	須		ツボ	0.451	0.251	3.37	0.524	0.486	0.373	11.70	8.30	伽耶
33	2520	須		ツボ	0.545	0.378	3.46	0.604	0.553	0.429	42.40	15.10	非陶邑

第4表　岸之本南遺跡　出土土器の分析データ

伯太藩陣屋跡隣接地（９８０３６）

（１）和泉市太町４丁目他　　（２）157.5㎡
（３）平成10年10月21日～10月31日
（４）府道岸和田南海線建設　　（５）西川　寿勝

調査経緯

都市計画道路、大阪岸和田南海線建設に伴って信太山丘陵から派生した谷部に橋梁・高架道路を構築し、丘陵の一部を削平する計画が示された。この地域に関する遺跡の状況は不明瞭だが、近隣に聖神社古墳群や丸笠山古墳などがあり、開発にともない遺跡が発見される事態が想定された。

建築部との協議の結果、予定地域のうち、買収済用地について事前に試掘調査を実施することとなった。

調査概要

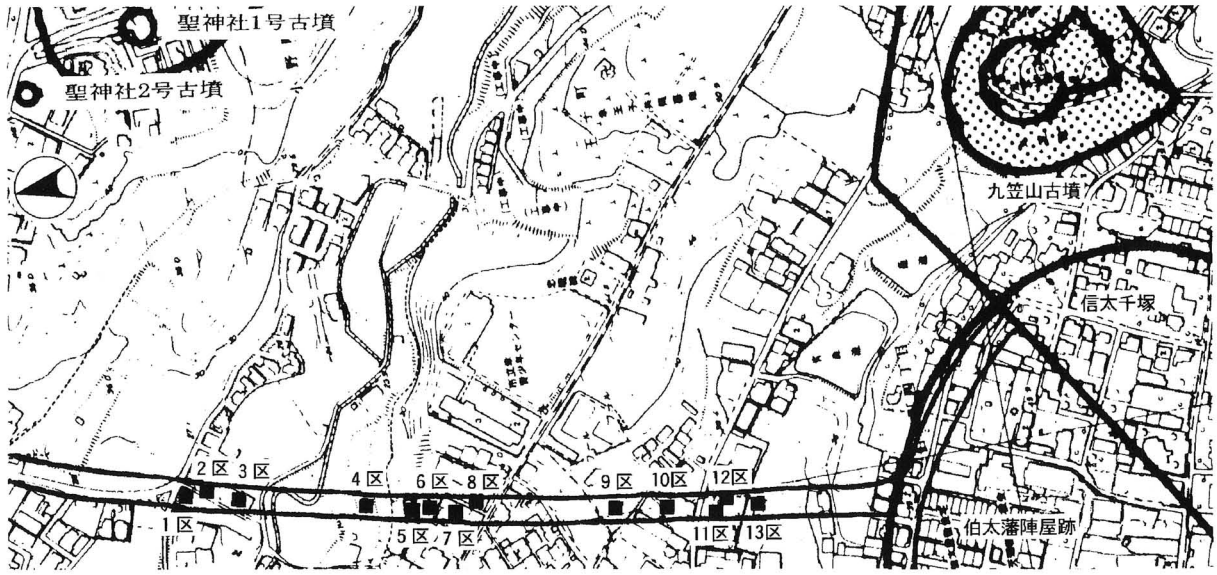
試掘調査は６か所の用地に14か所のトレンチを設定しておこなった。

１～３調査区は谷の底部に位置し、遺構・遺物は発見されなかった。４～７調査区は谷の南側斜面に位置するが、水田化による土地改変で地山がひな壇造成され、遺構・遺物は残されていなかった。８～12調査区は丸笠山古墳のある丘陵先端部に位置する。しかし、この部分も地山の削平が激しく、遺構・遺物はなかった。

ただし、盛り土中には古墳時代後期の須恵器片などがわずかに確認できた。よって、かつては人々の営みがあったことがわかる。

以上より、試掘範囲内には、顕著な遺構・遺物が残されておらず、本調査の必要はないと判断した。

第50図　１区（上）と５区（下）全景



第51図　試掘区（１～13区）位置図

男里（おのさと）遺跡（９８０３７）

（１）泉南市男里地内　　（２）300㎡

（３）平成10年11月１日～平成11年１月15日

（４）府営地域総合オアシス整備事業・泉南地区双子池改修　　（５）芝野圭之助

男里遺跡は大阪府泉南市、東経135度15分40秒、北緯34度21分30秒に存在する。遺跡全体は南北約1.3㎞、東西約1.1㎞の楕円形である。弥生時代の遺構は双子池の東約100ｍに南北に走る府道金熊寺男里線の敷地内で、南南東約200ｍに標高約15ｍを測る段丘上に大規模な溝や、多量に投棄された土器・石器等の遺物群と共に展開している。また双子池の西約150ｍの雄新小学校付近では弥生時代後期の墓が検出されている。

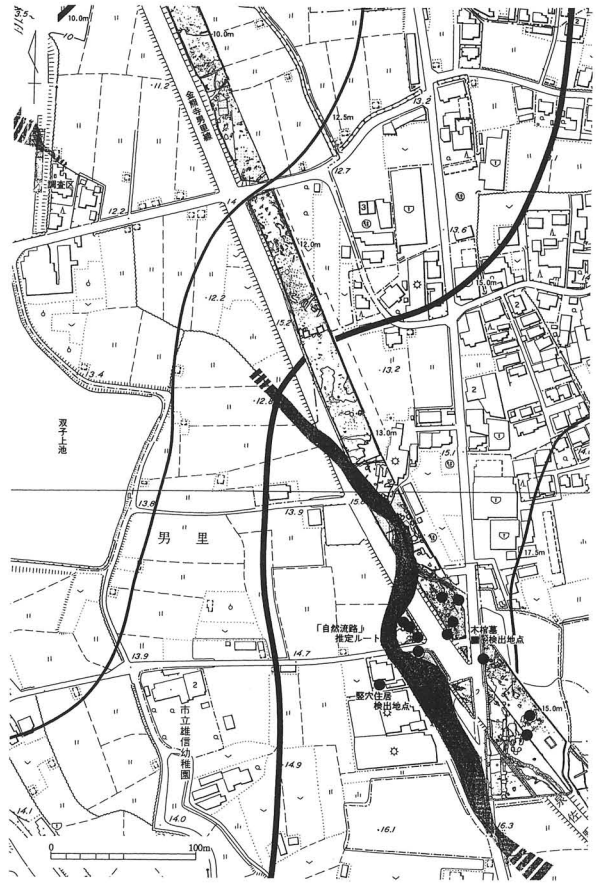
双子池周辺は縄文・弥生から古墳・奈良時代にかけての旧河道が見られ、古墳時代中・後期から本格的に河道を制御するための働きかけが行われ、池の下流域にも竪穴住居跡などが出現する。双子池の本事業で確認された、木杭列は、そうした河川制御装置の一部で、古墳時代の終末から奈良時代にかけての時期に構築され、機能していたと考えられた。過去の遺跡調査成果から推定すれば、以上の展開が想定される。さらに平安時代以降に上池・下池を分ける堤状の道が造成され、双子下池より北側の海岸部分に集落が展開し、耕地が広がるようになると考えられる。

上に記された上池・下池を分ける堤状の道の周辺では、６～７世紀代の掘立柱建物群や、やや離れた現男里集落に竪穴式小石室も検出されているので、何らかの律令時代の公的な色彩の強い建物が構築されていて、小規模な堤状の道の遺構が機能していた可能性が示唆される。

本年度の調査では、調査区の南東から池の内部に続いて北西に伸びる河道の埋没過程で掘削されたと考えられる溝が確認された。法量は幅50㎝～１ｍ深さ30～50㎝をはかり、埋め土には弥生時代中期の多数の土器が含まれていた。

この溝は調査区の東又は南東方向から流れてきており、府道金熊寺男里線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査時に検出している集落跡の南西部分に流れる流路に関連するものかと考えられる。

双子池の堤改修工事に伴う北側部分の文化財調査は終りにちかづいているが、河道の検出など具体的な遺構の姿が確認され、周辺の調査の積み重ねと相まって、泉南地域の各時代を代表する遺構として位置づけられようとしている。



第52図　調査区周辺の遺構概略図

第53図　溝内土器出土状況

駒ヶ谷第２散布地（９８０１８，９８０３９）

（１）羽曳野市駒ヶ谷　（２）37㎡
（３）平成10年７月15日～平成11年２月16日
（４）石川右岸幹線下水道他　（５）西川　寿勝

調査経緯

調査地は駒ケ谷第２散布地の中央を南北に竹之内街道が貫き、２つの遺跡が重複する地点に位置する。南約200ｍには近年新たに発見された倉塚古墳がある。駒ケ谷第２散布地は倉塚古墳と共通する西の丘陵からなだらかにくだる東斜面にあたる。遺跡の北東は谷となり飛鳥川が流れる。この付近はこれまでに主だった遺構の発見がなく、遺跡の性格は分布調査で発見された遺物により弥生時代と奈良時代を中心とした複合遺跡であることが推定されるにとどまる。

一方、竹之内街道は太子道として古くから文献に登場する街道で、飛鳥川に沿ってほぼ直線に伸びる現道（国道166号線）が推定地とされるものの、いつの時代までさかのぼるか、古い遺構が良好に遺存しているのかは明瞭でない。

調査は駒ケ谷第２散布地の南東隅に位置する地点と北隅に位置する地点にわかれる。前者は石川右岸幹線の下水道縦坑掘削に伴い、後者は国道166号線の歩道設置に先立つ試掘調査である。

石川右岸幹線下水道縦坑に伴う調査（Ａ地点）

現道とその東側水田にまたがって10×10ｍの範囲に綱矢板で囲んだ調査区を設定、旧耕土上の盛土を除去し、掘削を開始した。

掘削開始とともに調査区東隅に水路とこれに伴う木杭が発見された。この水路には遺物が含まれず、掘削年代を明確にできないが近代以降と考える。水路の西側は水田耕土、床土が互層となって２～３面確認できた。これらの粘土層は約1.5ｍの厚さに及び、この地が低湿地であったことを裏づける。その下層は飛鳥川が起源とおもわれる洪水粗砂層が厚く堆積し、旧河道あるいは氾濫源であったことが伺える。河川堆積物は地表下約５ｍまで機械により掘削したが、更に下層まで続いていた。

氾濫源が安定し、低湿地となった時期は明瞭ではない。また、河川堆積物中には遺物がまったくなかった。

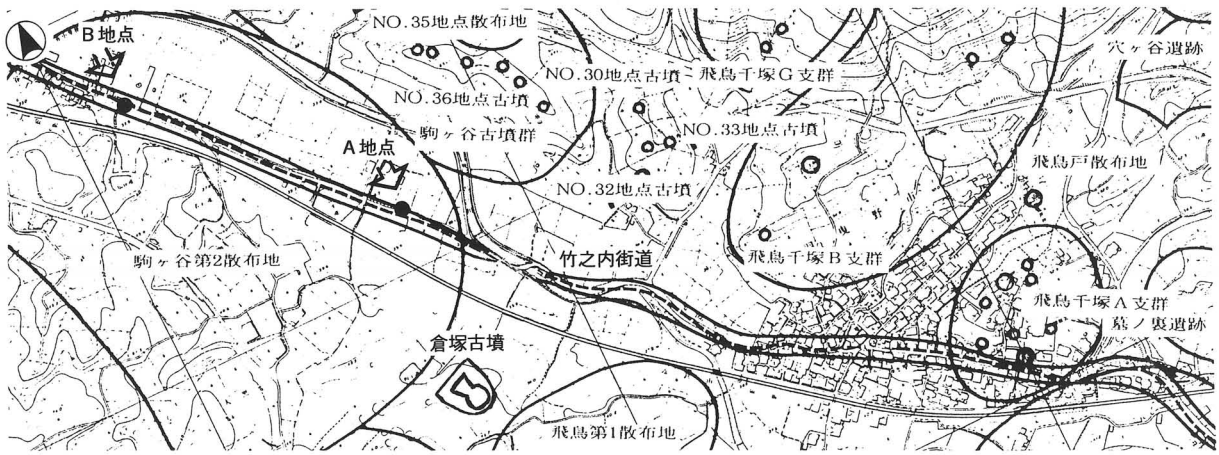
以上より、竹之内街道は調査区内に確認されず更に西側の丘陵斜面だった可能性を指摘できる。

歩道設置に伴う試掘調査（Ｂ地点）

現道と東に接する果樹園にまたがる５×31ｍの開発区において水路を切り替え、歩道設置する計画がなされた。これに先立って開発区の南北２か所に１×２ｍの試掘区を設定した。その結果、先の石川右岸幹線下水道の縦坑掘削に伴う調査と同様の堆積状況が確認され、この地域においても、街道、遺構の存在は確認できなかった。

まとめ

現道路の東側で行った２か所の調査では飛鳥川に伴う氾濫源が安定した後、低湿地となり、水田化して行く様子が確認できた。これらがいつの時代であるかは明瞭にできなかったものの河川堆積物にはひとつの遺物も包含されず、有史以前である可能性が強い。また、水田化は近代からさほどさかのぼらないと予想される。よって、竹之内街道は調査区より西側よりの丘陵斜面と考えられ、駒ケ谷第２散布地に伴う集落も丘陵斜面を中心にし、現道路東側には及ばない可能性が高いことがわかった。



第54図　試掘区（Ａ地点・Ｂ地点）位置図（1/2000）

木の本遺跡（９８０４１）

（１）八尾市空港１丁目　　（２）100m²

（３）平成10年11月17日～11月27日

（４）中部広域防災拠点整備事業　　（５）岩崎　二郎

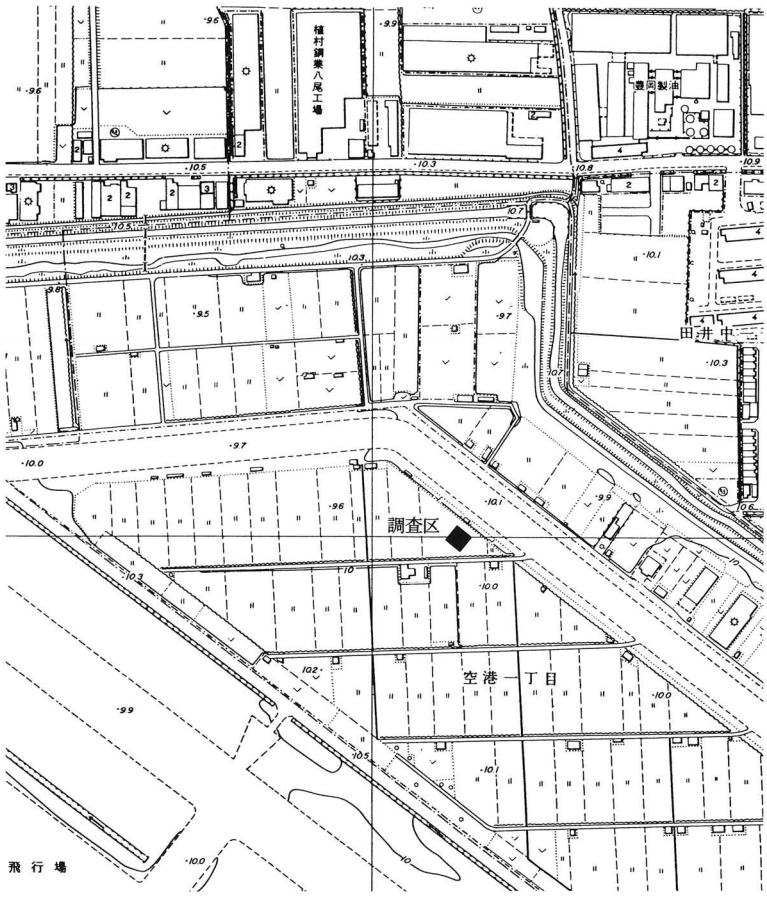
大阪府総務部消防防災安全課が計画した中部広域防災拠点整備事業予定地が木の本遺跡の範囲内に当たるため試掘調査を実施した。調査位置は八尾空港内のいわゆる菱形地の一角で、田井中遺跡の発掘調査によって弥生時代前期の集落が検出された地点の約100m南西にあたる場所である。

10×10mのグリッド１ケ所を設定し、平成10年11月17日調査に着手し、11月27日終了した。八尾市文化財調査研究会が1982～83年に空港整備事業に先立って実施した試掘調査を参考にして1.6mを機械掘削し、以下0.9mを人力掘削し、地表下2.5mまで掘り下げた。

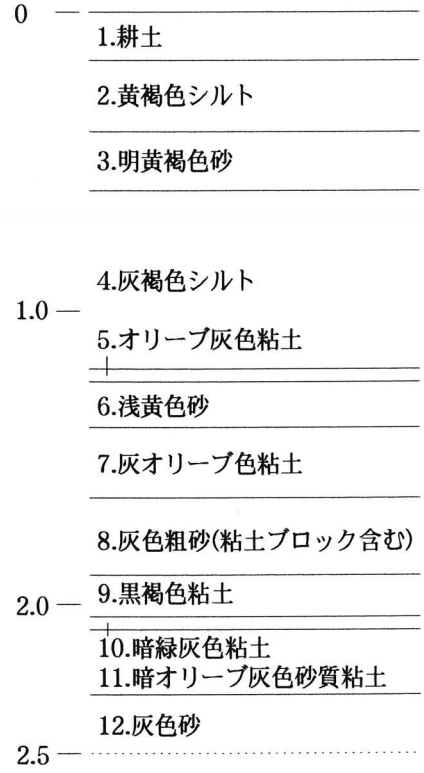
調査地の土層堆積状況は下図に示す通りで、弥生時代から中世の各時期の遺物が出土した。

１は現代の耕作土、２は床土、３は洪水砂層である。４の灰褐色シルトは、間に部分的に砂層が介在し一時期の面を検出できる可能性がある。その下も微妙に粘性が違うなど、さらに細分可能である。中世の土師器・瓦器をごく少量含む。中世の耕作土と思われるが、調査範囲内では畦畔等の遺構は検出できない。６は古代あるいは中世の洪水砂層、５はその上に堆積した微粒子の層である。７は上面に多数の足跡がある。この層まで機械掘削したので遺物は検出できなかったが、ある時期の水田である可能性がある。

８は灰色粘質粗砂に粘土ブロックが混じる。弥生時代前期から奈良時代の遺物を含む。９は上面に足跡があり、弥生時代前期から飛鳥時代の遺物を含む。10は遺物はほとんど含まない。11は大量の弥生時代前期の土器を含む。完形の壺が正立した状態で出土したが、下層の砂層からの湧水が激しくヘドロ化したため遺構は検出できなかった。12は厚い砂層で遺物は含まないようだが、湧水のため十分観察できず断定できない。



第55図　調査区位置図



第56図　土層断面模式図

神田北遺跡・禅城寺遺跡（９８０４４）

（１）池田市神田１丁目他　　（２）995㎡

（３）平成10年11月25日～平成11年３月31日

（４）都市計画道路神田池田線歩道設置　　（５）泉本　知秀・禰宜田佳男

はじめに

今年度、歩道設置工事が計画された地点には、北から禅城寺遺跡、宇保遺跡、神田北遺跡が連続して広がっている。いずれも猪名川の東側、TP20m程度の台地上に立地する。これまでの調査により、禅城寺遺跡では古墳時代と中世の遺物、宇保遺跡では弥生時代後期の遺物と７世紀前半の古墳の周濠の可能性がある溝、神田北遺跡では弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴住居跡、奈良時代と中世の掘立柱建物などが検出されている。

今年度、調査をおこなったのは、禅城寺遺跡と神田北遺跡にかかる部分である。

遺構と遺物

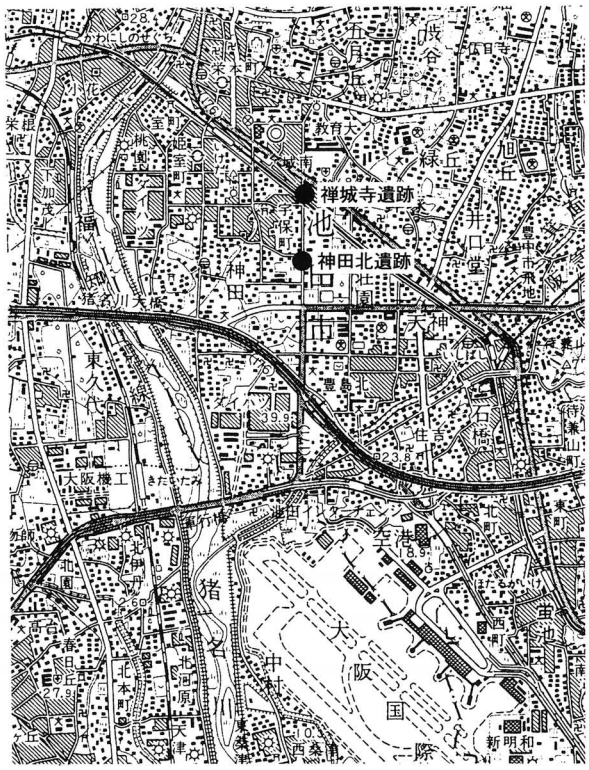
〈禅城寺遺跡〉府道と阪急電車が交差する周辺で、６カ所の調査をおこない、弥生時代後期の溝、奈良時代と思われる大溝、さらには溝や柱穴群を検出した。

弥生時代の溝は幅１ｍ、深さ40㎝程度の浅いもので、壺形土器の底部などが出土した。大溝は、南側の肩だけを確認しただけであるが、復元すると幅６ｍ、深さ1.6mとなる。遺物は非常に少なく、時期は明確でないが、奈良時代頃と考えている。柱穴群は一辺0.5～1.0mと比較的大きなものだが、調査区の制約から建物に復元できるようなものはなかった。時期を確定できるような遺物を検出することもできなかった。

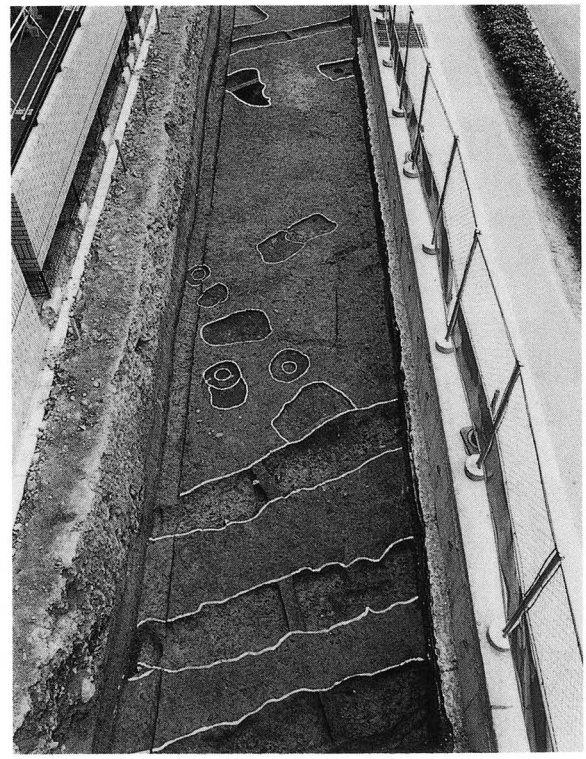
〈神田北遺跡〉２カ所で調査をおこなったが、削平のため遺構・遺物はほとんど見られず、沼状の落ち込みを検出しただけである。近世遺物は含まれないことから、中世頃のものと考えている。

まとめ

今年度の調査における最大の成果は、禅城寺遺跡が弥生時代から中世にかけての複合遺跡であることが判明した点である。調査地周辺にそれぞれの時期の居住域が広がっている蓋然性はきわめて高いといえる。特に、弥生時代後期の遺構を検出したことで、宇保遺跡・神田北遺跡において散発的に出ていたこの時期の遺構がさらに北の禅城寺遺跡まで広がっていたことが明らかとなった。現時点では詳細なことまで言及できないけれども、弥生時代後期の池田市域低地部の集落動向考える上で興味深い。なお、遺跡名の由来となっている禅城寺関係の資料については今回もまったく見いだすことができなかった。今後の課題である。



第57図　調査地位置図



第58図　禅城寺遺跡溝・柱穴検出状況

陶邑窯跡群（光明池地区）（９８０４８）

（１）堺市城山台５丁　（２）235㎡

（３）平成10年11月30日～12月25日

（４）府営ため池整備事業（光明池地区）　（５）西川　寿勝

調査経緯

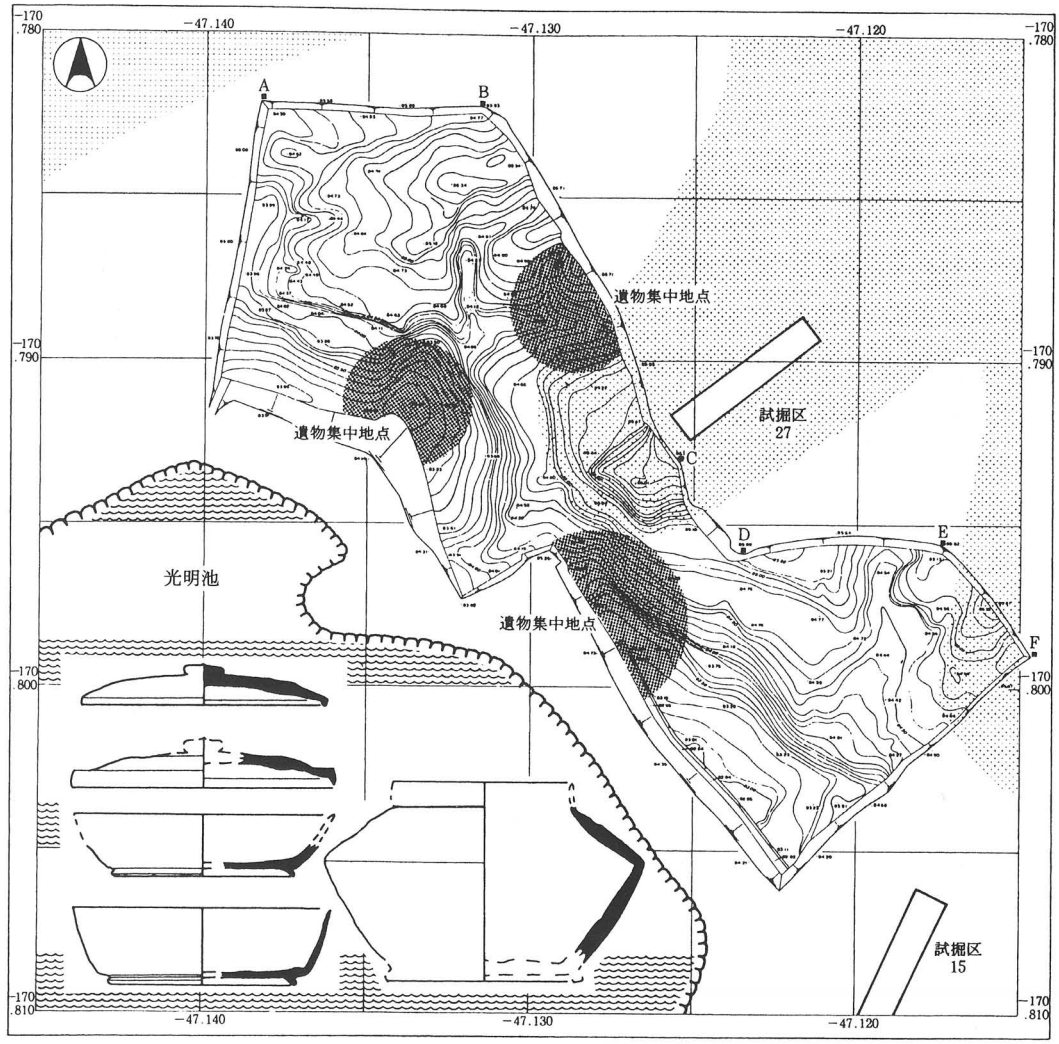
調査地は光明池東岸に位置し、前年度より遊歩道設置事業に伴う調査がおこなわれている。今回調査地は遊歩道計画地のうち、光明池48号窯と推定される部分を主とする。

調査概要

設定された調査区はｓ字形で西に下る急な斜面に位置する。調査の結果、表土下は20～40㎝程度の崩落土が覆っていた。調査区内からはコンテナ８箱分の窯壁片とコンテナ１箱分の須恵器が発見され、これらの遺物は光明池48号窯に伴うものと推定できる。土器の形態より、窯の操業年代は奈良時代後半と考えられる。しかし、窯にかかわる遺構は残されておらず、はやくに崩落したか、窯本体はさらに斜面上部であると予想される。

調査中、光明池の水位が下がり、光明池14・23・41号窯が姿を現したので、現況測量と遺物の採集をした。光明池14・41号窯は５世紀後半の窯体の一部が露出、灰原の須恵器が波に洗われ、散乱している状態だった。一方、光明池23号窯は奈良時代前期の須恵器を含む灰原が幅約20ｍにわたって扇形にひろがっていた。灰原は汀線下部の斜面に位置し、高い密度で須恵器が散乱する。扇の要に位置する部分には平坦地がある。平坦地は幅約５ｍ、奥行き３ｍを測る。この平坦地が平窯の窯体にあたるのか、盗掘坑などの撹乱にあたるのかは確定できなかった。

上記の詳細については99年３月発行の『陶邑窯跡群発掘調査概要・II』に掲載している。



第59図　出土須恵器及調査区位置図

高向（たこう）遺跡（９８０４９）

（１）河内長野市高向　　（２）120㎡

（３）平成11年１月５日～１月31日

（４）府営ため池整備事業（田保池地区）　　（５）西川　寿勝

調査経緯

府営ため池整備事業に伴い「丹保池」池堤が改修される計画がもちあがり、高向遺跡に伴う遺構の残存の有無について、試掘調査を実施した。

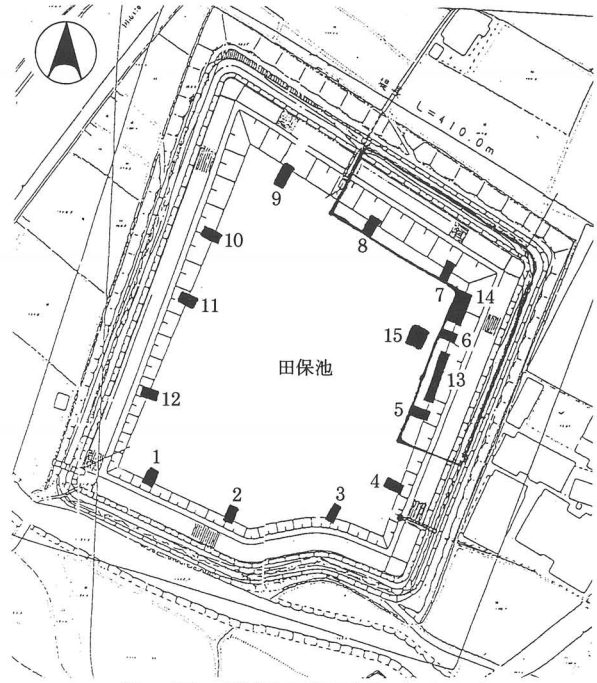
池西側を南北に横切る大阪外環状線建設に先立つ大阪府埋蔵文化財協会の調査では大量の旧石器が発見されている。また、池南側に近接する府道建設に伴う河内長野市教育委員会の調査では奈良時代の集落が発見されている。今回の開発計画地でも堤盛り土に土器片などの散布がみられた。

調査概要

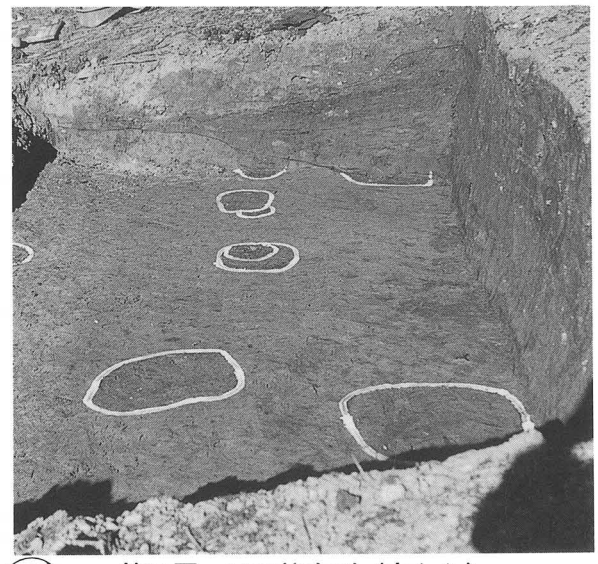
田保池の堤は東西・南北ともほぼ400ｍで、池は地形に添った水田条里にのって、真四角に構築されていた。そこで、各堤の内側斜面に２×１ｍの調査区を３か所ずつ、合計12か所設定し、遺構・遺物の状況を確認した。

その結果、池の南半に設定した１・２・３・４・12調査区は盛り土の下に地山が露出、池の南半部自体が地山を掘り込んで形成されており、遺構・遺物が残されていないことがわかった。また、池北半部も西側は地山が礫混じりの硬い段丘層で遺構はなかった。しかし、池北半の東側、５～８調査区は平坦な地山の上に遺物包含層が良好に残されていた。そこで、５～７調査区の間に新たに13～15調査区を設定して、遺構の状況を確認したところ、建物の一部と考えられる柱穴列と奈良時代の土器や瓦が発見された。その他、中世の土器片も確認できた。

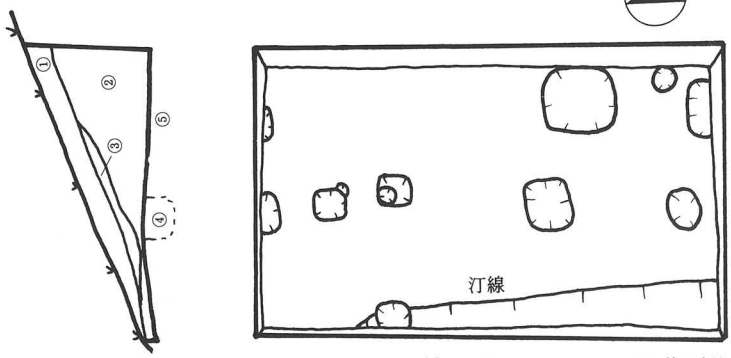
以上より、堤の北半部の西側、約400ｍにわたる区間は遺構・遺物が残されている可能性が高い。改築工事に先立って文化財保護に関する協議を予定することとなった。



第60図　試掘区位置図（1/100）



第61図　14区柱穴列（南から）



① 表土・堤盛土（黄褐土）
② 堤盛土（暗灰褐粘土）
③ しゅんせつヘドロ（暗茶灰土）
④ 柱穴埋土（暗茶褐土）
⑤ 地山（黄褐粘土）

第62図　14区平面及北壁断面図

招提寺内村遺跡・御堂池（９８０５０）

（１）枚方市招提元町三丁目　（２）484m²
（３）平成10年12月３日から12月21日
（４）御堂池堤体改修工事　（５）佐久間貴士

招提寺内村は、「招提寺内興起後聞記并年寄分由緒実録」（枚方市史）によれば、天文12年（1543）真宗の道場を建てたのに始まる。寺内村は土塁で囲われ、村の入口には木戸があった。招提寺（現敬応寺）は台地の北端に建立され、寺の東の谷は堤を築いて水堀とした。これが御堂池である。この堀は同時に潅漑用のため池であったと思われ、大阪府内では築造年代の分かる数少ない池となっている。

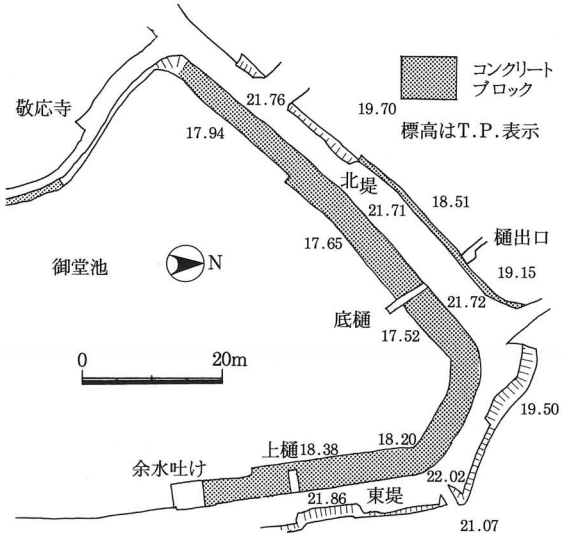
御堂池は、谷の北側と東側の一部に堤体を巡らせている。Ｌ字形をした堤体の全長は約130mである。北堤だけをみると約85mで、これが谷入口の幅である。北堤の最大上幅は6.2m、最大下幅は13.7mである。底樋は北堤の北東隅にあり、上樋と余水吐けが東堤にある。池の中央は、戦後の工事で深く堀り下げられており、その土で谷奥にあたる池の南半分が埋め立てられていた。

本来の池底の最深部は底樋入口で17.52mである。池底は底樋に向かって水が集まるように扇形に10cmほど掘り下げられていた。底樋管底は出口・入口とも17.75mで池底より少し高い。上樋の管底は19.64mである。底樋管底と上樋管底との比高差は1.89mである。

余水吐けの高さは19.37mと上樋の管底より少し低く設定され、常時は上樋まで水が上がらないように造られている。余水吐けを開けた状態だと、満水時の水深は1.85mとなる。上樋使用時には、余水吐けを閉じて更に水を溜めるようになっている。

今回の調査は、堤体改修工事に伴い、内側のコンクリートブロックをはずし、新たな刃金土を入れるため、堤の裾を幅約４m、長さ120m程掘削した。調査では池底と谷の両側の斜面が検出された。その結果、築造時の堤の長さは現在とほぼ同じであったことがわかった。堤は谷の中に堆積していた表土を削除し、しっかりした地盤の上に築いたこともわかった。しかし当初の堤の幅や高さは、横断面を見られなかったので不明である。

また池の底の高さは、堤の外の耕地より１mほど低くなっていた。現在の耕地の高さが戦国時代より上昇している可能性はあるが、１mの差は大きい。恐らく築造時も、池底のほうが耕地面より少し深く掘られていたと考えたほうがよさそうである。堆積はヘドロ層がほとんどで、近世・近代の陶磁器が少量出土した。



第63図　御堂池北半部平面図

第64図　御堂池調査前（南西から）

第65図　御堂池北堤（東から）

総持寺遺跡（９８０５３）

（１）茨木市三島丘２丁目　（２）1,850㎡
（３）平成10年12月21日～平成11年３月31日
（４）府営三島丘住宅建替　（５）阿部　幸一

茨木市の東部には北摂山地から南に派生する「富田台地」と呼ばれる標高20～30m程度の比較的平坦な段丘面が広がっている。遺跡はこの段丘の南西部に立地している。

既往の調査

この遺跡では、府教委や（財）大阪府文化財調査研究センター、茨木市教委により調査が実施され、古墳や飛鳥時代から鎌倉時代頃の建物跡、墓などが検出されている。

府営三島丘住宅建替えに伴う調査は、平成６年度から８年度まで３回実施されており、延べ面積約11000㎡に達する。

今回の調査地に接するＡ地区（94年度調査地）では古墳時代前期の竪穴住居跡、方墳、奈良時代から鎌倉時代の掘立柱建物などが検出されているほか、これまでの調査で、弥生時代の方形周溝墓３基、土器棺墓、古墳時代から飛鳥時代の竪穴住居跡、古墳時代中期の円筒埴輪や家、鶏などの形象埴輪を伴う径４～15mの古墳38基（円墳１基、方墳37基）、奈良時代から平安時代及び鎌倉時代の掘立柱建物跡、鎌倉時代の土坑墓などが検出されている。

また、調査地の北100mの住宅都市整備工団公団のマンション建設に伴う調査でも７世紀から14世紀頃までの集落跡や鎌倉時代の烏帽子や刀子を副葬した土坑墓などが検出されている。

調査結果

今回の調査では、５世紀中頃の方墳２基、奈良時代から平安時代頃の掘立柱建物・井戸・溝、鎌倉時代掘立柱建物・水溜め、土坑などを検出した。

39号墳

これまでの調査で検出した中でもっとも北に位置する古墳である。主軸を北北東に置く。内法で東西8.5m、南北9.5mを測る方墳である。周濠は0.8～1.5mで、深さ0.3m程度が残存していた。周濠から細かく砕けた円筒埴輪片や土師器、須恵器の高坏、坏蓋などが出土している。

40号墳

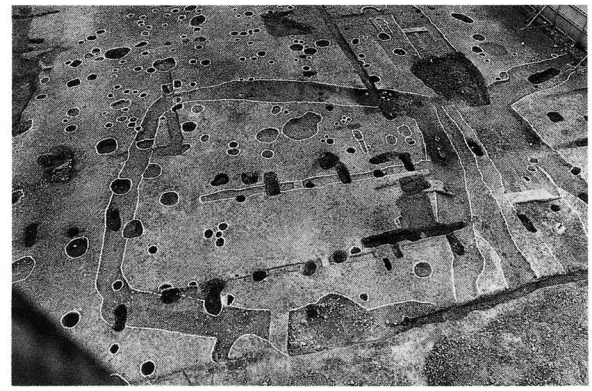
39号分の南に位置する。東西4.5m、南が調査範囲外に延びているが、５m以上を測る。周濠の幅は１m前後を測る。

建物跡

約1850㎡の調査区で1200個以上の柱穴、土坑を検出している。方形の柱穴は７世紀から10世紀頃、円形の柱穴は主に鎌倉時代の柱跡である。２間×５間を最大に、１間×２間のものまで、５棟の建物跡を復元したが、復元できたものは10世紀頃までの方形の柱穴の建物で、鎌倉時代のものは、今後の作業課題である。

これまでの調査から、当遺跡の古墳の造営は５世紀代に終わり、奈良時代には古墳を潰し、集落が形成され、遺物から多少の断絶はみられるようであるが、室町時代まで集落が営まれている。また、遺構の分布状況から、集落は台地端の南から徐々に北及び東に移動する傾向が伺われる。

第66図　遺構全体図



第67図　39号墳

栄町遺跡（９８０６１）

（１）羽曳野市栄町　（２）152㎡
（３）平成11年２月１日～平成11年３月５日
（４）旧170号歩道設置　（５）枡本　哲

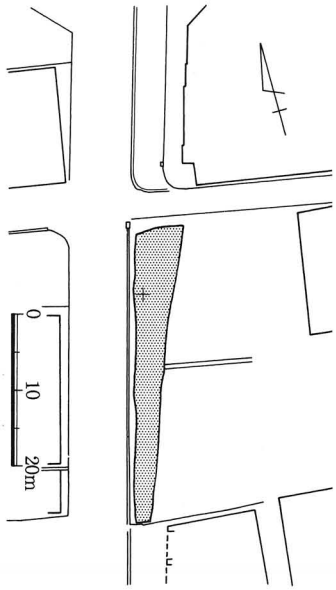
今回の栄町遺跡の調査地点は、近鉄古市駅西100mの国道旧170号線、白鳥３丁目交差点南側の料亭「清月」より南40mの「明治生命」までの南行き車線である。付近でのこれまでの調査結果と事前に実施した幅約１mの試掘トレンチ調査により、厚さ30㎝の表土下に部分的に残る希薄な包含層と遺構検出面を確認したので、工事に係る全域の発掘調査を実施した。

遺構検出面となる地山の黄色粘土面は調査区の北半に一様に堆積するが、南半では場所によって若干違う土層がみられ、南端に至ってこの地山面が隆起し、現在は国道170号線により断ち切られている東西方向に延びる丘陵部へと続いている。したがって南端部の第19層は山砂であり、これは丘陵部頂上で行なった試掘調査によって確認した淡赤褐色の礫層とともにこの丘陵堆積層を構成している。調査区南半部ではこの地山面上に５～20㎝の黄色粘土、砂質土の堆積がみられ、これには古代の土師器片が含まれるが、中世遺物は含まない。その上には中世包含層である灰黄褐色の粘質土が被るところがあり、瓦器片や瓦片が出土した（第73図２）。また中央部の汚水管設置に伴う攪乱を受けた第12層では廃材に紛れて埴輪片（同４～８）や土師器甑把手片（同８）が出土している。

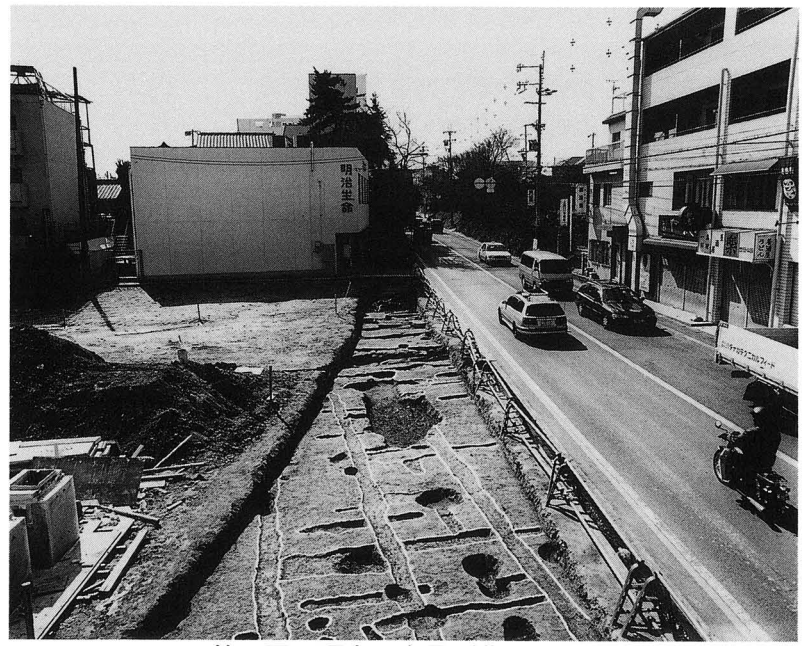
古代の遺構としては、調査区中央でこれらの中世溝に切られる形で径0.95m×0.6m、深さ６～８㎝、灰黄色粘土を埋土とする楕円形土坑68が検出され、その北肩から流れ込む形で６世紀後半の須恵器坏身（第73図９）が出土した。また南端部で不定形な土坑群が重複する形で検出され、土坑62では布留式の甕、高坏の破片（同10,11）が出土した。それを切る土坑65また西壁断面（16層）から比較的残りのよい７世紀後半と思われる土師器甕（同12,13）が出土した。

中世の遺構としては、東西および南北方向の溝があり、南北溝が東西溝を切る形で検出される。概ね南北溝は濃淡の違いのある黄褐色の粘質土、東西溝が灰白色の砂質土が埋土である。出土遺物は瓦器、土師器、瓦などの細片が多い。中央部ではトレンチを横断する形で幅1.3～1.5m、深さ0.35～0.4mの溝52が検出されたが、第１層以下は２つの溝となり、溝肩に杭穴が認められた。出土遺物は瓦器、土師器の細片が多いが、上層より瓦質火鉢の破片（同１）が出土した。

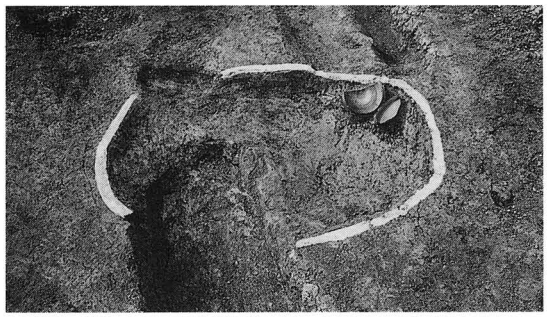
当初、中世以前の遺構は予想していなかったが、本地点では中央部で須恵器坏身出土土坑、南部では土師器出土土坑群を検出できた。その性格はまだはっきりしないが、古代では少なくとも古墳時代から７世紀代の生活域を想定できそうである。中世は耕作地であり、中央部で検出された大溝は地割り境に沿った16世紀末あたりに埋没する潅漑水路の可能性を考えたい。



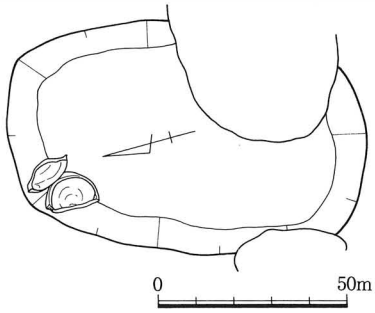
第68図　調査区位置図



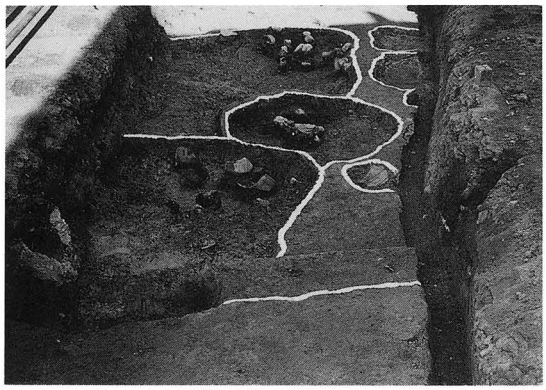
第69図　調査区全景（北から南）



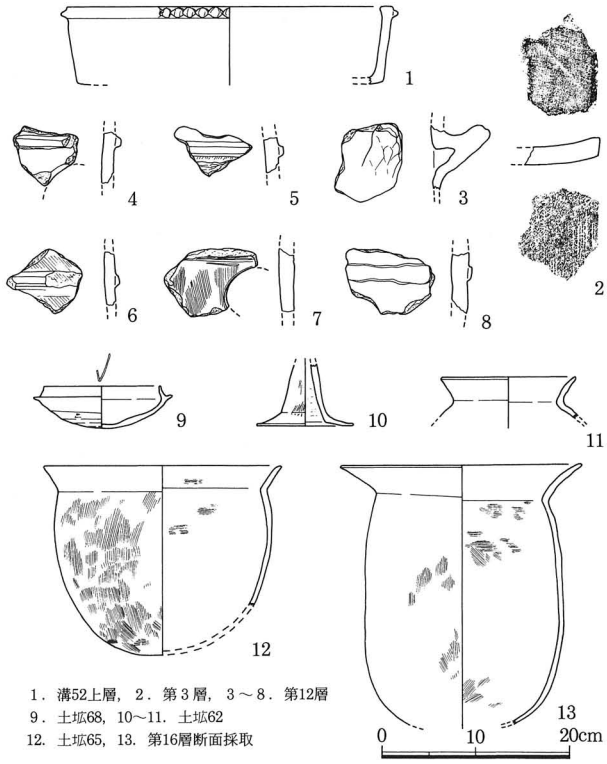
第70図　土坑68遺物出土状況（東から西）



第71図　土坑68遺物出土状況図

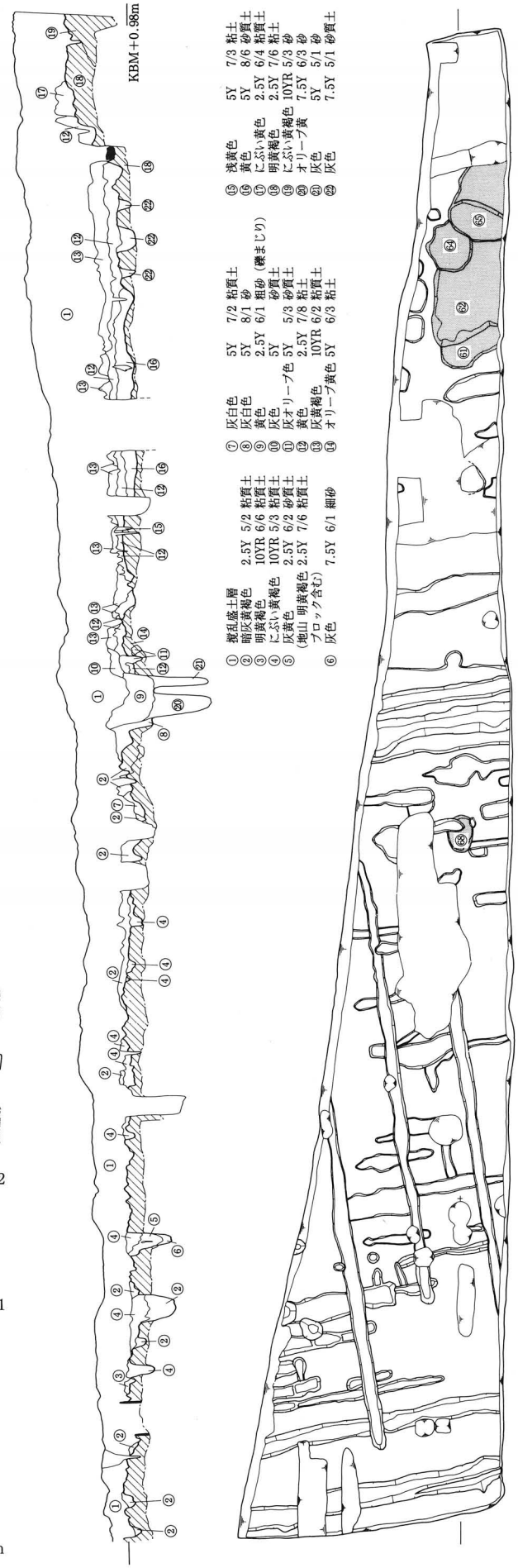


第72図　土坑群遺物出土状況（南から北）



1．溝52上層，2．第3層，3～8．第12層
9．土坑68，10～11．土坑62
12．土坑65，13．第16層断面採取

第73図　出土遺物図



第74図　遺構全体図及土層断面図

寛弘寺古墳群（９８０６４）

（１）南河内郡寛弘寺738－２　　（２）150m²

（３）平成11年２月17日～平成11年３月５日

（４）農地開発事業「河南西部地区」　　（５）今村　道雄

寛弘寺７号墳下層の調査

はじめに

本古墳は、南河内郡河南町寛弘寺に所在する総数92基の寛弘寺古墳群のなかのツギノ木山支群（１～７号墳）の１基である。弥生時代の住居跡は、中期の竪穴住居跡８棟、後期後半の住居跡111棟の合計棟119棟である。

「河南西部地区」農地開発事業は、昭和57年に事業認可を受け、同58年に工事を着工し、昭和63年に完成予定であったが、事情により平成12年頃に完成の目標をおくようになっている。

このたび大阪府農林部は、古墳が立地する丘陵部で法面が緩み、将来大規模な土砂崩壊につながる可能性があることから、その防止をはかるためにＵ字型排水溝設置工事が具体化し、文化財保護課と協議した結果、７号墳下層の調査が必要との判断がなされた。

調査成果

調査は、表土・攪乱土層を機械で剝ぎ取り、その下の土層を人力掘削し調査を進めた。表土を剝ぐとすぐに地山が露出し弥生時代後期の土坑のプラン等が認められた。一方、できるかぎり石室の保存はかるため、排水溝の工事変更をしたものの土坑１～４と石室の掘り方の一部の保存は困難であった。下層の調査に至までに石室掘り方と現代水路法面肩部から羨道部を確認したが工事で破壊されることがないため調査後埋め戻した。

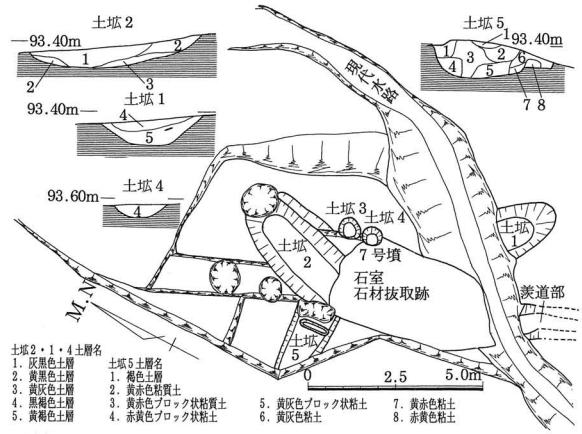
７号墳下層から検出した遺構は、弥生時代後期後半の５基の土坑である。

土坑１は、現代水路に削られているものの1.7×1.5m深さ75㎝、黒褐色、黄褐色土中には弥生時代後期の土器を数十点含んでいた。

土坑２は、昭和62年の調査では後期の大溝とされているが掘り下げた結果、縦3.2m以上、横2.2m、深さ55㎝、灰黒色土から後期の土器が多数出土した。

土坑３・４は、径60～70㎝、深さ30㎝余、埋土は黒褐色土である。土器は出土していない。

土坑５は、縦1.9m以上　横1.3m、深さ30㎝余を測る。後期の土器片数点が出土している



第75図　７号墳下層遺構平面図（弥生後期）

第76図　遺構検出状況

第77図　遺構検出状況

第78図　Ｕ字型排水溝工事

目垣（めがき）遺跡（９８０６７）

（１）茨木市目垣３丁目地内　（２）27㎡
（３）平成11年２月26日～３月６日
（４）府道（十三高槻線）地下道整備工事　（５）亀島　重則

調査の結果、４枚の遺構面（最上位面を第１面と呼称）を確認した。発掘区が小規模のため、遺構の性格を決めかねるものばかりである。しかし、今後予想される開発に伴う調査に備え、積極的に解釈し、一定の性格づけを行なっておくことも必要である。この点を念頭におき、後続の調査による検証の材料になるものを記しておく。

第１面（OP8.2m付近）　土坑・溝・落ち込みなどがある。落ち込みから、甕が出土した。弥生時代後期前半。遺構群の性格は不明。

第２面（OP8.1m付近）　溝・小穴がある。北西隅に存在する大溝は深さ約60㎝、幅２ｍ以上で東側法面に段をもつ。空間を区画するものか、水路としての機能をもったものか、判断しにくい。最下層中から石庖丁が１点出土している。中期。

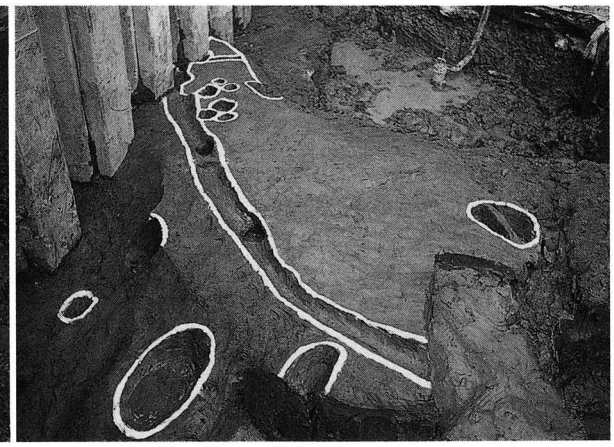
第３面（OP8.0m付近）　マウンド・溝がある。調査区中央で約10㎝の高まり（マウンド）を検出した。北端近くで直角に曲がる。4.5m以上の規模をもつ方形周溝墓の可能性がある。マウンドの北東に取りつく溝はマウンド基底面の高さからの掘り込みであるが、関連する遺構かどうか判別しがたい。この時期の空間を墓域と考える。中期。

第４面（OP7.7m付近）　竪穴住居・土坑・小穴・溝・落ち込みがある。調査区中央で検出した弧状に走る小溝といくつかの小穴から竪穴住居を想定した。円形住居として復元すると、６ｍほどの規模となる。北西隅の土坑は深さ1.1mを測る。灰色粘土に灰白色粘土ブロックをまじえて埋めている。水生植物片も多く含まれる。全体の遺構の密度からすれば、居住区の一部と考えれる。北西隅で出土した土器（第II様式）から中期初とみる。第４面の下層、OP7.4m付近の明緑灰色系粘土以下は比較的安定した土層である。これを覆う黄灰色～褐灰色粘土は微細スミ粒をふくむことや質・色調などに上層の弥生期包含層と共通のものがあり、遺物を含んではいないものの、包含層になる可能性がある。市教育委員会の以前の調査地点では、弥生中期遺構面の下層から縄文晩期（船橋式）土器が出土しているとのことであり、本地点のこの層も今後とも要注意である。

昭和48年、遺跡発見の端緒となった関西電力鉄塔の基礎工事では、中期初（II様式）を中心とする土器や石器が大量に出土した。近年、２箇所で本格的な調査がおこなわれた。ここでは、溝・土坑・柱穴をはじめ、土器棺墓・区画溝・井戸など膨大な量の遺構・遺物が出土している。本地点の第４面～２面がこれに相当する考えられる。このことから、前期の終わりに始まった集落が、中期初になって爆発的に拡大したとみられ、少なくとも径200m以上の広がりをもつ。中期の中ごろから後半にかけての様相は明らかにされていないが、今回の調査区も集落域の一角を占めることがわかった。後期以降は、以前の調査では遺物は出土しているものの、確実な遺構は未発見であった。

今回の調査で、本地点で検出した遺構群や遺物は、現在推定している遺跡範囲の南東部に確実に存在することを実証した。さらに４面におよぶ遺構群の変遷を追うことができ、時期的にその性格を変化させていることがわかった点に調査の成果が集約される。

第79図　第３面マウンド（手前）・溝



第80図　第４面竪穴住居

高柳（たかやなぎ）遺跡（９８０６９）

（１）寝屋川市高柳２丁目地内　　（２）1,236㎡
（３）平成10年８月24日～12月25日
（４）都市計画道路千里丘寝屋川線建設　　（５）禰宜田佳男

高柳遺跡は寝屋川市西部の低地部、淀川や古川が形成した自然堤防上に広がる集落遺跡である。現地表でTP３ｍを測る。これまでの調査で、平安時代の集落址、弥生時代後期の竪穴住居址などが検出され、注目される。遺物としては緑釉陶器・灰釉陶器・初期須恵器等がある。今年度は府道建設に伴う調査の最終年度にあたり、E地区・F地区の２ヶ所の発掘を行った。これまでの調査区との連続性や試掘調査の結果からすると、水田址等の検出が予測される地点にあたる。

層序

盛り土以下、近世包含層２層、中世包含層１層、古代包含層２層を経て古代面に達する。古代の遺構面の標高はTP1.1ｍで、これまでに掘立柱建物が検出された面よりも低くなっている。各層はいずれも境界が上下に乱れており、明確な不整合面は確認できなかった。遺物は各層ともに少なく、出てきても小破片のものが目立つ。

遺構と遺物

Ｅ地区では、近世面で浅い洪水層やスキ溝を確認したが、中世面で遺構を認めることはできなかった。また、古代面では南北方向のアゼ状の高まりを検出している。

Ｆ地区では東西方向の自然流路を検出した。調査区の中央が南側の肩にあたるが、北の肩はちょうど未調査区にあたる。復元すると幅は20ｍ程度になる。遺物としては奈良から平安時代の土師器・須恵器・黒色土器・曲物を中心に、古墳時代から近世にかけてのものが出土したけれども、量は多くない。最終埋没時期は近世である。

流路の南側の古代面で東西方向のアゼ状の高まりを検出した。E地区やそれ以前の溝やアゼの方向からすると、一連のものと考えている。

自然科学分析の結果

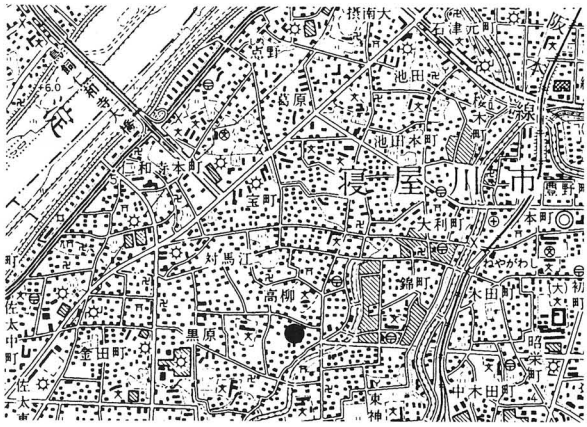
花粉・珪藻・プラントオパール分析を行った。その結果、（１）平安時代にはプラントオパールが大量に検出され水田が営まれていた、（２）中世においては沼沢地化し、一時的に水田が放棄された可能性がある、（３）近世には再び水田が営まれると同時にソバ栽培もおこなわれていた、ということが判明した。

まとめ

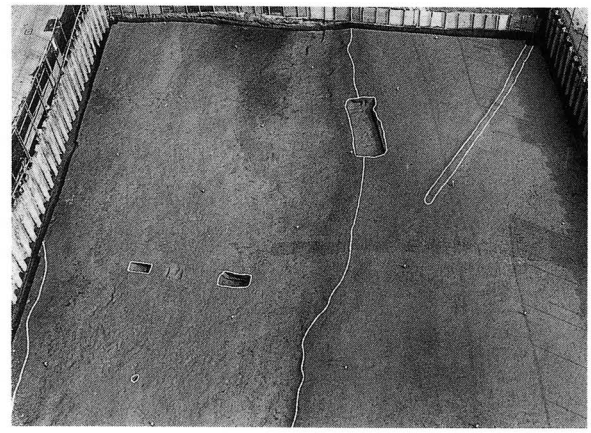
３年間にわたり高柳遺跡の調査をおこない、集落域の広がり、時期ごとの土地利用の変遷などが明らかになってきた。詳細は、次年度刊行予定の報告書に譲るが、これまでにわかっている範囲で簡単に変遷を辿っておこう。

この地に初めて人々の足跡が認められるのは弥生時代後期で、竪穴住居１棟を検出した。古墳時代にはいると、５・６世紀の土器が散発的に出土し、遺構もわずかに認められる。初期須恵器の出土は少数ながらも注目される。

平安時代にも集落が形成され、その南側には水田が広がっていた。緑釉陶器・灰釉陶器・墨書土器の存在からすると、一般集落とは異なる性格を考えるべきであろう。中世にも同じ場所に掘立柱建物が検出されているものの、平安時代に水田だった場所は、沼沢地化していた。近世になると、周辺一帯は水田化し、ソバ栽培もおこなわれるようになった。



第81図　調査地位置図


第82図　Ｆ地区遺構検出状況

上汐四丁目所在遺跡（９８０７０）

（１）大阪市天王寺区上汐４丁目　（２）100㎡　（３）平成10年８月20日
（４）府立夕陽丘女子高等学校職業技術専門校建て替え
（５）広瀬雅信、森井貞雄、今村道雄、西川寿勝

調査経緯

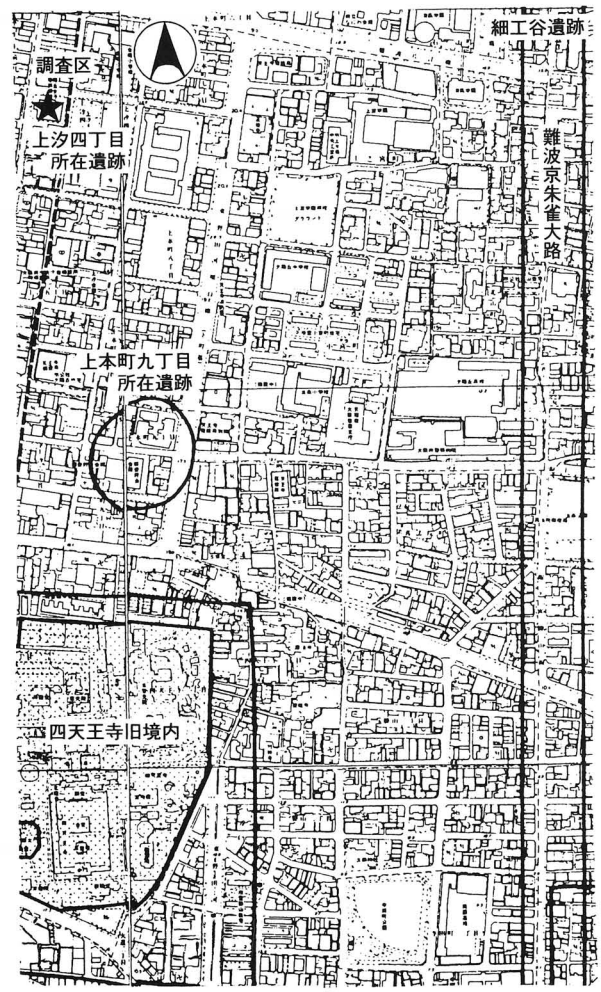
府立夕陽ケ丘女子高等職業技術専門校の建て替えにともない98年度に試掘調査を実施した結果、遺構・遺物が発見されたため、新規発見遺跡として、「上汐四丁目所在遺跡」と命名された。（以上については前年度の年報に詳しい。）その結果をうけ、開発に先立って発掘調査されることとなり、予定地の中央に約10×10mの調査区を設定した。

調査概要

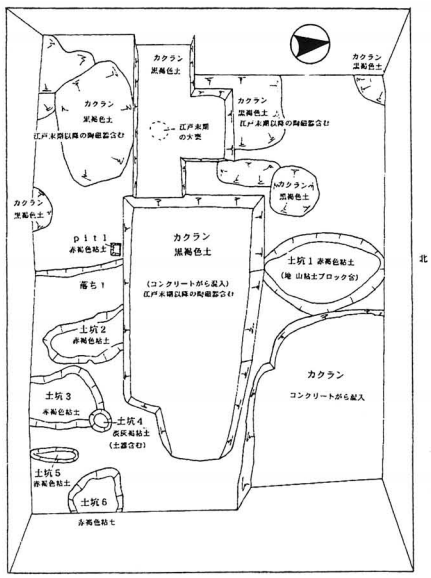
表土下、約1.5mまでは現代の建物などによる撹乱と盛り土があり、機械で除去、その直下にある薄い包含層を四名の担当者（広瀬・森井・今村・西川）が分担して除去したのち、遺構・遺物を検出・掘削した。その結果、地山が残されていた部分で浅い土坑と落ち込みが認められた。包含層からは中世の土師器とおもわれる土器小片がわずかに発見された程度で時期や性格は不明である。

まとめ

今回の調査地点では建物の基礎などによる撹乱や生活ゴミを投棄した土坑によって、遺構面の大半が失われており、遺跡の性格を確認することはできなかった。



第83図　調査区位置図（1/2000）



第84図　遺構平面図（1/250）

第85図　調査状況

倉垣遺跡（９８０７４）

（１）豊能郡能勢町倉垣　（２）3,364㎡
（３）平成10年６月８日～11月30日
（４）農村総合整備事業　（５）辻本　武

倉垣遺跡は南北1.5㎞、東西0.8㎞の小盆地の中央に位置する。これまでの調査では、弥生・古墳・飛鳥の各時代および中世の住居跡等が発見されている。今回も昨年に引き続き、圃場整備工事に先立ち発掘調査を行った。

弥生時代

前期末～中期前半の竪穴式住居４棟、方形周溝墓６基を検出した。竪穴式住居は径６ｍ前後の円形で、柱穴は６本であるが、なかには４本・５本が重なるものがある。２回の建て替えと考えられるが、類例としては一昨年度の本遺跡調査でも検出されている。

方形周溝墓群は竪穴式住居群の東にあって、その一部が重なり合う。一辺が４～６ｍの規模で、その周囲を幅0.5～1.2ｍの溝がまわる。周溝は一周するのではなく、断続する。主体部は後世に削平されたものと思われ、検出されなかった。

出土遺物としては壺・甕などとともに石包丁・磨製石斧・磨製石剣など多彩であった。

古墳時代

前期の大溝、中期の竪穴式住居・土坑、後期の竪穴式住居２棟・掘立柱建物８棟・溝などを検出した。

前期の大溝は幅0.9ｍ、深さ0.6ｍのＶ字溝で検出長30ｍ。溝内より布留式でも古相の土師器が多く出土した。そのなかには全くの完形品の大甕もあった。

中期の竪穴式住居は須恵器出現直前の時期のもので、布留式の土師器が多く出土した。一辺4.0×4.5ｍの方形で、柱穴は２本。壁溝内に木壁の痕跡が観察された。土坑はこの竪穴式住居に続く時期のもので、径６ｍ前後の不定形を呈する。この遺構から出土した須恵器は、当地域では最も古いものである。

後期の竪穴式住居は一辺６ｍと7.5ｍの方形で、ともに柱穴は４本である。掘立柱建物のうち６棟は１間四方のもので、竪穴式住居の壁溝が削平されて柱穴が残ったものとも考えられる。

飛鳥時代

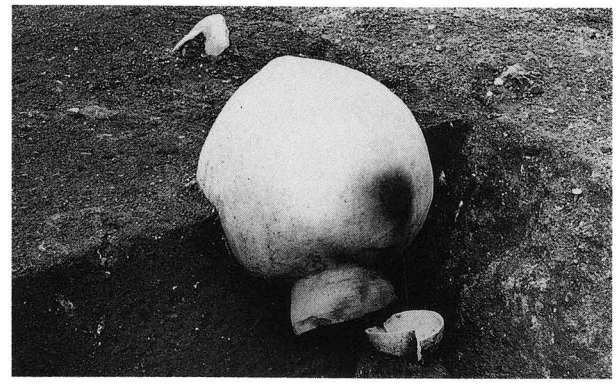
竪穴式住居を１棟検出した。4.5ｍ四方で、柱穴は４本。北西辺の中央に竈を持つが、支脚が立ったままであった。竈は壁体を見つけることが出来なかったので、住居廃棄時に完全に踏みつぶされたものと考えられる。

平安時代

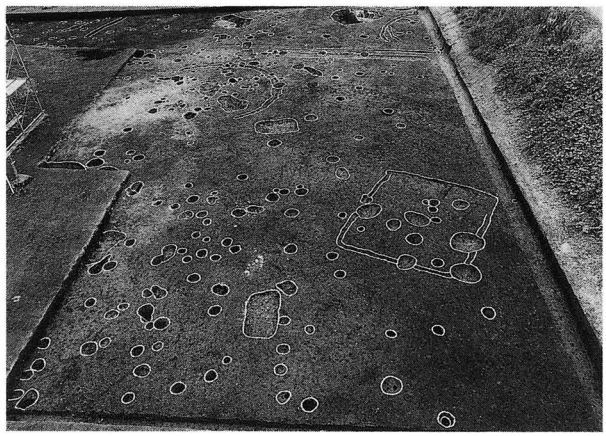
掘立柱建物３棟を検出した。柱穴内およびその周辺で黒色土器等が出土しているが、遺物量はそれまでの時代に比べると希薄である。

中世

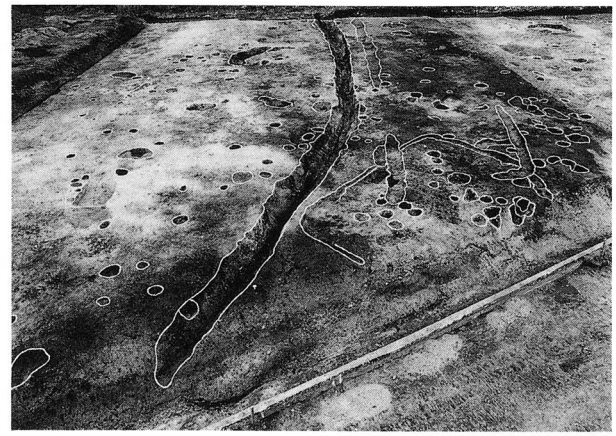
若干のピット群と遺物の出土があった。集落の一画となろうが、建物の復元は困難であった。



第87図　完形で出土した布留式土器



第86図　竪穴式住居群と掘立柱建物群



第88図　大溝と竪穴式住居

崇禅寺遺跡他（98081，98082，98085～98087）

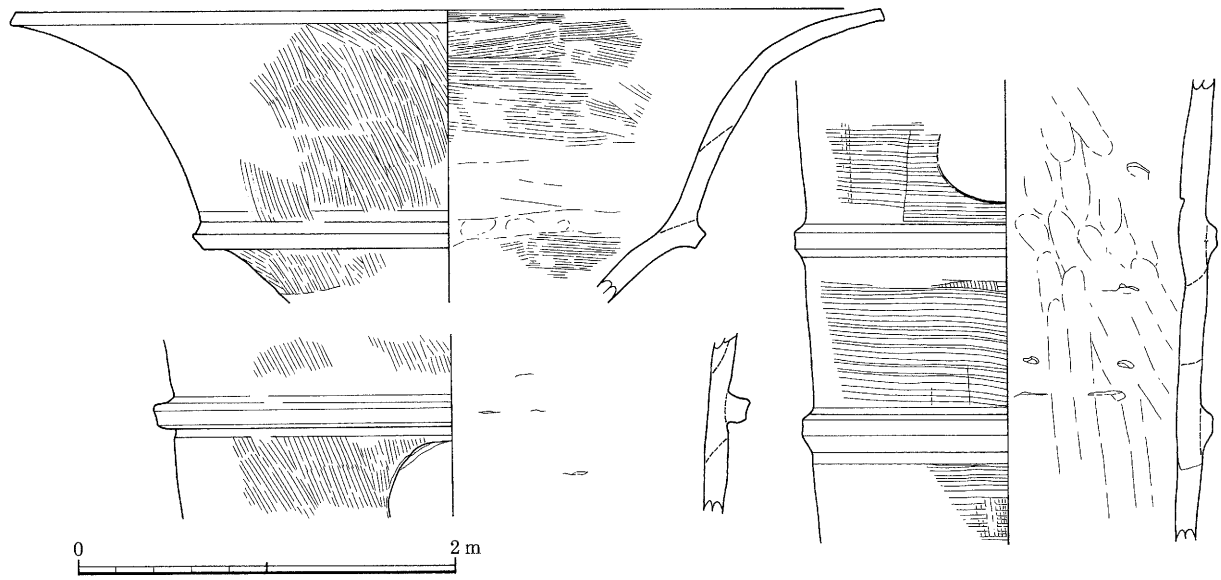
（1）大阪市東淀川区東中島5丁目地内　（2）6㎡
（3）平成10年9月18日～平成10年10月30日
（4）府営住宅建て替え整備事業　（5）芝野圭之助

平成11年度以降の住宅建て替え事業が予定されている下表の住宅について、大阪府建築都市部住宅整備課から試掘依頼を受け、上記の要領で実施した。いずれも遺跡範囲の周辺又は隣接地で、旧地形や土地利用状況は推定されたが、多量の遺構遺物が出土し、遺跡として認定されることはなかった。唯一、崇禅寺遺跡において現地表下約50㎝に堆積する黄色を呈する細かな砂礫の洪水堆積を思わせる沖積土層内から埴輪片がコンテナ1箱程度出土した。崇禅寺遺跡は標高約4mに立地する。淀川の河川堆積物及び大阪湾の湾岸流による自然堤防（砂堆）上に位置し、現地表面から厚さ約50㎝の戦災時の瓦礫と考えられる盛土で覆われている。その下に厚さ約1mの黄色砂層が堆積している。下層に掘削が及ぶと徐々に粒子が粗くなって、現地表下2mの深さに至ると、褐色砂礫土層にあたり、約2.4mで湧き水が多量に出て掘削不可能となる。

崇禅寺鉄筋	埴輪
住之江	近世後期から明治時代陶器片
城北	
松原	サヌカイト片
岸和田簡耐	近世後期から明治時代陶器片
忠岡	
中津	第二次世界大戦時の1トン爆弾の爆発痕跡

出土埴輪は、円筒埴輪・朝顔型埴輪・衣蓋形埴輪がみられ、実測可能なものについては復原口径「朝顔」約45㎝、「円筒」20㎝を測った。朝顔型埴輪は器壁表面を丹で塗り整えられ、いずれも焼成は酸化炎焼成、外面調整は左斜め上方の縦刷毛調整が施される。胎土は長石、チャートを含みやや粗い。円筒埴輪は登窯による物と、野焼きによる物とが存在する。円筒埴輪の外面調整は左斜め上方の縦刷毛調整と断続横刷毛による2次調整が見られ、内面は粘土紐接合痕跡を残す程度のやや粗い縦撫で調整のものと、丁寧な斜め上方への斜め撫で調整が見られる。口縁部付近は丁寧に横撫でされる。胎土は精良である。透かし穴は1段飛ばしで、90°ずつずらして開けられている。衣蓋形埴輪は褐色を呈し、刷毛目調整が施されている。焼成は酸化炎で、胎土には白色粒が含まれている。

現在の崇禅寺寺域（大阪府指定史跡摂津県改称豊崎県庁跡）の北側の府営住宅の調査では昭和56年に古墳時代前期の土師器・製塩土器・土錘・埴輪・古墳時代の素環頭太刀・奈良時代の須恵器、冨寿神宝等が出土している。過去の遺物の発見箇所の例では崇禅寺の東側に弥生時代後期の竪穴式住居跡や河道が検出されている。



第89図　崇禅寺遺跡他、出土遺物図

長谷（ながたに）のガマ（９８０８４）

（１）豊能郡能勢町長谷　　（２）60㎡
（３）平成10年２月23日～３月17日　５月１日～６月５日
（４）農道新設工事　　（５）辻本　武

調査に至る経過

能勢町長谷地区は棚田が発達し、美しい景観を見せる地域である。この棚田に「ガマ」と称される特殊な水利施設が分布することが以前より知られている。これは山塊の斜面を流れる水脈に石組みを構築するもので、その上に盛土して棚田を成している。この石組みは横穴式のもので「ガマ」と呼ばれている。大阪教育大の鳥越憲三郎氏の研究によって、中世に遡ることが確実視されるものである。1984年度調査では217ケ所のガマが確認されている。

今回、この棚田に農道の建設が予定された。農道はガマを道路下に埋めてしまう盛土工法で、破壊するものではない。現在も機能しているガマには人孔を設けて維持補修できるように設計された。しかし半永久的に見ることができなくなるため、調査して記録することとなった。

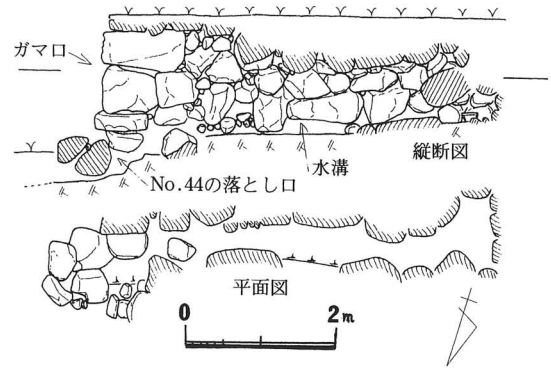
ガマの構造

ガマは落とし口、水溝（横穴状の暗渠）、ガマ口からなる。上の落とし口に入った水が、水田下の水溝を通ってガマ口に出て、下段のガマの落とし口に入って水溝→ガマ口と繰り返しながら連続して流れる。このような流れが、合流あるいは分流して棚田を上から順に巡り、水田の用排水路の機能を果たしているのである。またガマは流路を一定にする役割も持ち、急峻な棚田が長年にわたって崩れることなく、維持されてきた要因となっている。

ガマの調査

農道建設によって影響を受ける６ケ所のガマを調査した。ここでは代表例としてNo.45のガマを紹介する。これは水溝部分が1.0～0.3m大の自然石を巧く組んで横穴式石室風に構築される典型的なガマである。ガマ口は高さ1.4m、幅0.6mでガマとしては最大級の大きさである。奥行きは5.2mを測る。入り口から1.5mくらいまでは広くて身体を楽に入れることができるが、それより奥は高さ0.8m、幅0.3～0.4mと狭くなり、最奥部では高さ0.4mとなる。

これより上段のガマはNo.46であるが、このガマ口から出た水はNo.45の落とし口に入り、さらに横穴状の水溝の最奥部から底面を流れてガマ口に出て、すぐに下段のNo.44の落とし口に入る。No.45の落とし口と水溝の最奥部とは約４ｍ離れており、その間はこれまでの調査例から集石暗渠（いわゆ盲暗渠）と思われる。



第91図　No.45ガマ縦断図と平面図

第90図　調査地周辺の棚田

第92図　No.45ガマ口と調査風景

普及啓発・広報事業

●調査事務所の利用

A　会議等

・平成11年３月６日
第38回大阪府埋蔵文化財研究会
「中世の集落と耕地開発を考える」

B　調査スライド検討会

・平成10年６月10日
奥和之「みかん山古墳群の調査」
・平成10年８月12日
森井貞雄「黄河流域の古代都城を訪ねて」
・平成10年10月14日
阿部幸一「雁屋遺跡の検討」
・平成10年11月11日
今村道雄「尾平遺跡の調査」
・平成11年１月13日
上林史郎「寛弘寺古墳群の変遷とその意義」
・平成11年３月10日
山上　弘「招提中町遺跡の調査」

●現地説明会

・平成10年12月19日
余部遺跡その２　　参加約　４００人
・平成11年３月６日
新堂廃寺　　参加約１，３００人

資料数一覧

●出土遺物（コンテナ数）（平成11年４月１日現在）

・泉北考古資料館内第１収蔵庫　１０，５５９箱
堺市若松台
・泉北事務所　３１，９００箱
高石市綾園４丁目
・大井事務所　１２，８００箱
藤井寺市西大井
・外環高架下収蔵庫　７，８００箱
藤井寺市西古室
・志紀収蔵庫　１，１０１箱
八尾市志紀町西
・北部収蔵庫　２，６００箱
摂津市鳥飼中
・東大阪文化財収蔵庫　８０，８６１箱
東大阪市長田東
・文化財調査事務所　７，７００箱
堺市竹城台
合計　１５５，３２１箱

●民俗資料

・文化財調査事務所

谷口家資料	２２１点
上辻家資料	１３２点
守田コレクション	約２００点
上平家資料	１５０点
畑野家資料	６８点
三宅家資料	
大恩寺資料	
前西家資料	２２件

●その他の資料（平成10年９月現在）

・文化財調査事務所

図面	４，４５７ケース
写真	６，２０３ケース
台帳	２，２５１冊
パネル	２５３点
図書	２４，３５０冊

資料の貸出・掲載・閲覧

長期貸出資料

貸出・展示先	貸出品	出土遺物
能勢町歴史資料館	弥生土器9点　土師器7点　須恵器5点	大里遺跡
	石包丁4点　石斧3点　石鏃6点　他2点	
	須恵器1点	上椿遺跡
	円面硯など4点	尾道遺跡
	黒色土器2点　土師器小皿3点	九ノ坪遺跡
	瓦器碗7点　土師器皿4点　須恵器破片等	余野城遺跡
藤井寺市立図書館展示室	小型修羅	三ツ塚古墳
太子町立竹ノ内街道歴史資料館	須恵器等一括資料	一須賀古墳群Q1支群
	銀製帯金具（複製）	伽山古墓
国立歴史民俗博物館	石包丁3点	池上曽根遺跡
大阪府立ドーンセンター	陶磁器・金属器等	大坂城跡
吹田市立博物館	軒瓦　緑釉瓦　窯道具など	吉志部瓦窯
吉志部神社	〃　複弁八葉蓮華文軒丸他瓦3点　とちん2点	吉志部瓦窯
大阪府立玉川高等学校	〃　弥生土器5点	稲葉遺跡
大阪府立大手前高等学校	陶磁器・瓦・金属器等14点	大坂城跡
東京国立博物館	須恵器6点	陶邑窯跡群（TK73　TK85　TK87）

短期貸出・掲載許可資料

依頼者	貸出・掲載	写真・遺物	種類	遺跡名	内容
大阪府立弥生文化博物館	貸出	遺物	木製品	池上曽根遺跡	男根形木製品
羽曳野市教育委員会	貸出	写真	カラーポジ	はさみ山遺跡	住居状遺構2点
埼玉県立さきたま資料館	貸出	遺物	土器	野々井25号墳	刻字須恵器
		写真	カラーポジ	野々井25号墳	刻字須恵器
大阪府立近つ飛鳥博物館	貸出	遺物	金属製品	初田2号墳	金環2点
			玉	初田2号墳	ガラス玉25点
			金属製品	初田2号墳	漆棺付銅釘19点
			瓦	お亀石古墳	平瓦1点
			土製品	初田1号墳	磚10点
			金属製品	堂山古墳	棺座金具3点
			金属製品	堂山古墳	鉄釘21点
			土製品	牛石14号墳	磚11点
			土器	牛石14号墳	須恵器2点
香芝市立二上山博物館	貸出	遺物	石器	甲田南遺跡	打製石剣
			石器	田井中遺跡	サヌカイト15点
			石器	寛弘寺遺跡	サヌカイト34点
			石器	今池遺跡	槍先形石器10点
			石器	今池遺跡	ハンマーストーン3点
			石器	今池遺跡	台石2点
			石器	今池遺跡	原礫2点
			35mmスライド	今池遺跡	第2地点全景
			36mmスライド	寛弘寺遺跡	竪穴3010全景
			37mmスライド	寛弘寺遺跡	竪穴3010石材貯蔵穴
発掘された日本列島展実行委員会	貸出　撮影	遺物	土器	総持寺遺跡	「調」刻字須恵器
八尾市立歴史民俗資料館	貸出	遺物	土器	高安城山頂燧跡推定地	土師質甕等19点
			金属製品	高安城山頂燧跡推定地	鉄釘6点
			金属製品	高安城山頂燧跡推定地	草摺6点
			金属製品	高安城山頂燧跡推定地	古銭4点
			金属製品	高安城山頂燧跡推定地	小札4点
			石製品	高安城山頂燧跡推定地	碁石7点
		写真	モノクロプリント	高安山1号墳	調査前、外護列石
			モノクロプリント	高安山2号墳	開口部と外護列石、遺物出土状況
			モノクロネガ	高安山古墳群	土器9点
			モノクロネガ	高安山古墳群	土器集合
			カラープリント	高安山城	トレンチ
			モノクロプリント	高安山城	古代高安城関連遺物集合
東大阪郷土資料館	貸出	写真	モノクロプリント	田辺廃寺	西塔基壇
			35mmスライド	田辺廃寺	東塔基壇
		遺物	土器	神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡	土師器4点
			土器	神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡	須恵器3点
			土器	神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡	墨書土器3点
			土器	西ノ辻遺跡	緑釉陶器
		写真	パネル	神並遺跡	井戸
	掲載	写真		鳥坂寺跡	重弁蓮華文軒丸瓦
	掲載			神並・西の辻・鬼虎川遺跡	調査写真
愛知県陶磁資料館 ㈶五島美術館	貸出　撮影	遺物	土器	鳥坂寺跡	三彩火舎
			土器	鳥坂寺跡	三彩盤
古代瓦研究会	貸出	遺物	瓦	秦廃寺	軒丸瓦2点
大阪市立博物館	貸出	遺物	木製品	池上曽根遺跡	把手付鉢
			木製品	池上曽根遺跡	簪２点
			木製品	池上曽根遺跡	縦杓子
			木製品	亀井遺跡	まな板
			木製品　金属製品	大坂城跡	ヤリカンナ
			木製品　金属製品	大坂城跡	鋸
			木製品　金属製品	大坂城跡	鉋
			木製品　金属製品	大坂城跡	鑢
			木製品　金属製品	大坂城跡	錐
			木製品	大坂城跡	物差し
			木製品	大坂城跡	羽子板
			木製品	大坂城跡	将棋の駒3点

大阪市立博物館		写真	モノクロプリント	亀井遺跡	まな板
			カラーポジ	大坂城跡	鋸
			カラーポジ	大坂城跡	羽子板
			カラーポジ	大坂城跡	将棋の駒3点
			カラーポジ	三ツ塚古墳	修羅出土状況
大阪府老人大学	貸出	遺物	土器	陶邑窯跡群	須恵器10点
			瓦		瓦5点
新潟大学理学部	分析資料提供	遺物	土器	陶邑窯跡群	須恵器12点
㈱至文堂	借用	遺物	モノクロプリント	河内国分寺跡	鬼面文鬼瓦
四条畷市教育委員会	借用　撮影	遺物	木製品	雁屋遺跡	鳥形木製品
			土器	雁屋遺跡	絵画土器
㈱日本教育研究センター	貸出	写真	カラーポジ	池上曽根遺跡	多重環濠
㈱日本教育研究センター	貸出	写真	カラーポジ	池島遺跡	弥生水田跡
			カラーポジ	三ツ塚古墳	修羅出土状況
大阪市立博物館	貸出　撮影	遺物	瓦	新堂廃寺	軒丸瓦3点
			土製品	讃良郡条里遺跡	ガラス玉鋳型
大阪城天守閣	貸出	写真	モノクロプリント	大坂城跡	三の丸石垣
柏原市教育委員会	貸出	写真	カラーポジ	河内国分寺跡	塔跡基壇
			カラーポジ	河内国分寺跡	塔跡南半部
			カラーポジ	河内国分寺跡	塔跡南縁石階
富田林高校	貸出	遺物	土器	谷川遺跡	土師器甕1点
			土器	谷川遺跡	土師器羽釜6点
			土器	谷川遺跡	東播磨系練鉢3点
			石器	谷川遺跡	石鏃9点
			石器	谷川遺跡	木葉形尖頭器
			その他	谷川遺跡	昭和初期文房具等19点
㈱小学館	貸出	写真	カラーポジ	はさみ山遺跡	旧石器住居再現3点
大阪府土木部	貸出	写真	乾板	狭山池	昭和改修工事11点
㈱ジャパン通信情報センター	貸出	写真	カラープリント	池上曽根遺跡	ヒスイ勾玉
個人	貸出	写真	モノクロプリント	久宝寺遺跡	方形周溝墓3－1土器出土状況
			モノクロプリント	久宝寺遺跡	方形周溝墓3－1土器
大阪市史編纂所	貸出	図面	図面	西町奉行所跡	遺構
		写真	モノクロプリント	西町奉行所跡	遺構2点
			モノクロプリント	大坂城跡	遺物26点
		図面	図面	大坂城跡	三の丸遺構
		写真	モノクロプリント		三の丸遺構
大阪市史編纂所	貸出	写真		聖天山古墳	須恵器
大阪市史編纂所	貸出	写真	モノクロプリント	大坂城跡	OMMビル建設地点石垣2点
㈶竹中大工道具館	貸出	遺物	木製品	大坂城跡	台鉋
			木製品	大坂城跡	溝挽鋸
			木製品	大坂城跡	横挽鋸
			木製品・金属製品	大坂城跡	ヤスリ
泉大津市織編館	貸出	遺物	金属製品	大園遺跡	八稜鏡2面
大阪府土木部	貸出	写真	35mmスライド	河合遺跡	3点
			35mmスライド	古市大溝	2点
			モノクロプリント	平尾遺跡	空撮
滋賀県近江町はにわ館	貸出	写真	カラーポジ	青山4号墳	猪形埴輪
			カラープリント	津堂城山古墳	ついたて形埴輪
			カラーポジ	蓍上山古墳	武具一式埴輪
			カラーポジ	古室遺跡	カブト形埴輪
		写真	カラーポジ	交野東車塚古墳	短甲形埴輪
文化庁記念物課	貸出	写真	カラーポジ	大坂城跡	三の丸石垣断面
			カラーポジ	東町奉行所	北側石垣
和泉市教育委員会	貸出	写真	カラーポジ	池上曽根遺跡	ヒスイ勾玉
			カラーポジ	池上曽根遺跡	弥生中期土器集合
近つ飛鳥博物館	貸出	写真	カラーポジ	三ツ塚古墳	修羅7点
			35mmスライド	三ツ塚古墳	修羅出土状況
			カラーポジ	三ツ塚古墳	埴輪4点
			カラーポジ	三ツ塚古墳	土師器2点
			カラーポジ	三ツ塚古墳	埴輪2点
近つ飛鳥博物館	貸出	遺物	埴輪	三ツ塚古墳	家形埴輪
			埴輪	三ツ塚古墳	円筒埴輪26点
			埴輪	三ツ塚古墳	騎馬人像線刻埴輪
			土器	三ツ塚古墳	土師器ツキ
美原町教育委員会	貸出	写真	モノクロプリント	一須賀古墳群	遠景
			モノクロプリント	一須賀古墳群	ミニチュア竈
			モノクロプリント	一須賀古墳群	B7号墳金製垂飾付耳飾
	貸出	写真	カラーポジ	瓜生堂遺跡　鬼虎川遺跡	木製農具
大阪府統計協会	貸出	写真	カラープリント	蓍上山古墳	巫女形埴輪
			カラープリント	大仙陵古墳	
			カラープリント	交野車塚古墳	家形埴輪
㈱マガジントップ	貸出	写真	カラーポジ	池上曽根遺跡	ヒスイ勾玉
㈱アケト	貸出	写真	カラーポジ	池上曽根遺跡	ヒスイ勾玉
㈱河出書房新社	貸出	写真	カラーポジ	はさみ山遺跡	旧石器時代住居跡
			35mmスライド	南花田遺跡	旧石器時代住居跡
大阪府土木部	貸出	写真	35mmスライド	亀井遺跡	遺構6点
㈲和銅社	貸出	写真	カラーポジ	蓍上山古墳	巫女形埴輪
藤井寺市教育委員会	貸出	写真	モノクロプリント	総持寺遺跡	「調」刻字須恵器
	掲載	写真	モノクロプリント	松岳山古墳	長持形石棺
			モノクロプリント	津堂城山古墳	竪穴式石槨、長持形石棺
			モノクロプリント	墓山古墳	短甲形埴輪
大阪府南部流域下水道事務所	貸出	写真	パネル	西大井遺跡	遺構2点」
㈱世界文化社	貸出	写真	カラーポジ.	三ツ塚古墳	修羅出土状況
大阪狭山市市長公室	貸出	写真	モノクロプリント	総持寺遺跡	「調」刻字須恵器
㈱日本クリエート	貸出	写真	35mmスライド	大仙陵古墳	空撮
あさひ高速印刷㈱	貸出	写真	カラーポジ	禅城寺遺跡	遺構2点
九州芸術工科大学	貸出	写真	カラーポジ	大坂城跡	台鉋

近畿郵政局	撮影　掲載	写真		池上曽根遺跡	ヒスイ勾玉
㈱小学館サライ編集部	撮影　掲載	写真		陶邑窯跡群	須恵器9点
㈱おふぃすまどか	撮影　掲載	写真		安威遺跡	調査風景
㈱記録映画社	撮影　掲載	写真		陶邑窯跡群	須恵器
個人	撮影・掲載	写真		北玉山古墳	捩文鏡
㈱至文堂	掲載	写真	カラーポジ	原山4号古墓	鴟尾
			モノクロプリント	高井田廃寺	鴟尾
			モノクロプリント	細井廃寺	鴟尾
㈱碧水社	掲載	写真		大坂城跡	太閤枡
㈱山川出版社	掲載	写真		桧尾塚原9号墳	須恵器
㈲地人館	掲載	写真		三ツ塚古墳	修羅出土状況
羽曳野市長	掲載	写真		白鳥陵古墳	
				河内大塚山古墳	
㈱東京美術	掲載	写真		池上曽根遺跡	方形周溝墓
				池上曽根遺跡	銅鐸片
				八尾南遺跡	讃岐系甕
				国府遺跡	巴形銅器
				要池遺跡	有鈎銅釧
松原市長	掲載	写真		大和川今池遺跡	和同開珎
				大和川今池遺跡	治平元宝
㈶大阪都市協会	掲載	写真		大坂城跡	物差し　鉋
㈱学生社	掲載	図面		雁屋遺跡	鳥人絵画土器
㈱小学館	掲載	写真		恩智遺跡	壺
ハイビジョン・ミュージアム推進協議会　㈲和銅社	掲載	写真		池上曽根遺跡	石斧複製品
㈱小学館	掲載	写真		池上曽根遺跡	鳥形木製品
藤井寺市教育委員会	掲載	写真		三ツ塚古墳	修羅出土状況
藤井寺市教育委員会	掲載	写真		津堂城山古墳	石棺出土状況
㈱講談社マルチメデイア事業部	掲載	写真		陶邑窯跡群	須恵器集合
個人	掲載	写真		岡2丁目所在遺跡	遺構2点
個人	掲載	写真		名古山古墳	B地区全景
				名古山古墳	土器出土状況
藤井寺市教育委員会	掲載	写真		津堂城山古墳	石棺出土状況
藤井寺市教育委員会	掲載	写真		津堂城山古墳	石棺出土状況
				三ツ塚古墳	修羅出土状況
				津堂城山古墳	さしば状埴輪
個人	掲載	図面		大野寺土塔	測量図
朝日新聞社出版局	掲載	写真		大坂城跡	台鉋
㈱新人物往来社	掲載	写真		新堂廃寺	中門跡
				新堂廃寺	軒丸瓦

資料閲覧

所属	資料内容	遺跡
堺市立埋蔵文化財センター	写真資料	大野寺跡
大阪大学	弥生土器	池上曽根遺跡
㈶豊田理化学研究所	須恵器	陶邑窯跡群
大阪成蹊女子短期大学	下駄	大坂城跡
個人	鏡	
奈良大学	紡錘車	甲田南遺跡
立命館大学	円筒埴輪	仲津山古墳　応神陵古墳
大阪市立博物館	木製品　大工道具一式	池上曽根遺跡　亀井遺跡　大坂城跡
奈良国立文化財研究所	瓦	菱木下遺跡　長峰丘陵遺跡　岡田寺跡　向泉寺跡　大和川今池遺跡
立命館大学	円筒埴輪	応神陵古墳外堤　土師ノ里遺跡　道端古墳　林遺跡　矢倉古墳　北岡遺跡 小具足塚古墳　御曹司塚古墳　仲津山古墳　ツゲノ111号墳　青山古墳群 総持寺古墳群
立命館大学	円筒埴輪	土師ノ里遺跡　道端古墳
個人	下駄	大坂城跡　堺環濠都市遺跡
広島大学	石錘	淡輪遺跡
熊本大学	巴形銅器	国府遺跡
京都大学	弥生土器	国府遺跡　雁屋遺跡　川北遺跡　正法寺遺跡　東奈良遺跡　神並・西ノ辻遺跡 喜志・阪田遺跡
京都大学	弥生土器	国府遺跡　雁屋遺跡　川北遺跡　神並・西ノ辻遺跡
岡山理科大学	須恵器	陶邑窯跡群
㈶大阪府文化財調査研究センター		陶邑窯跡群
和泉市教育委員会	木器　土器　瓦	池上曽根遺跡　和泉国分寺跡
立命館大学	円筒埴輪	国府遺跡　長原27号墳
大阪大学	石包丁	田井中遺跡
奈良県立博物館	軒丸瓦	新堂廃寺　秦廃寺
㈶山形県埋蔵文化財センター	須恵器	陶器南遺跡
奈良大学	六器	普賢寺跡
九州大学	瓦	新堂廃寺　秦廃寺
明治大学	須恵器	陶邑窯跡群
山梨県埋蔵文化財センター	須恵器	陶邑窯跡群
㈶大阪府文化財調査研究センター	遺構図面	大和川今池遺跡
岡山大学	旧石器	八尾南遺跡他
㈶山形県埋蔵文化財センター	須恵器	陶邑窯跡群
狭山池ダム資料館準備室	写真資料	亀井遺跡
堺市立埋蔵文化財センター	鋳造関連	堺環濠都市遺跡
八雲立つ風土記の丘資料館	ガラス玉鋳型　石材	讃良郡条里遺跡　田井中遺跡
狭山池ダム資料館準備室	写真資料	河合遺跡　古市大溝　平尾遺跡
㈶岩手県文化振興事業団	須恵器	陶邑窯跡群
佐賀県庁	須恵器	陶邑窯跡群

大阪府教育委員会文化財調査事務所年報 3
発行日　1999年12月28日
発　行　大阪府教育委員会
編　集　大阪府教育委員会文化財調査事務所
印　刷　株式会社　中島弘文堂印刷所